

始



特234
11



新源
譯

氏物語

全

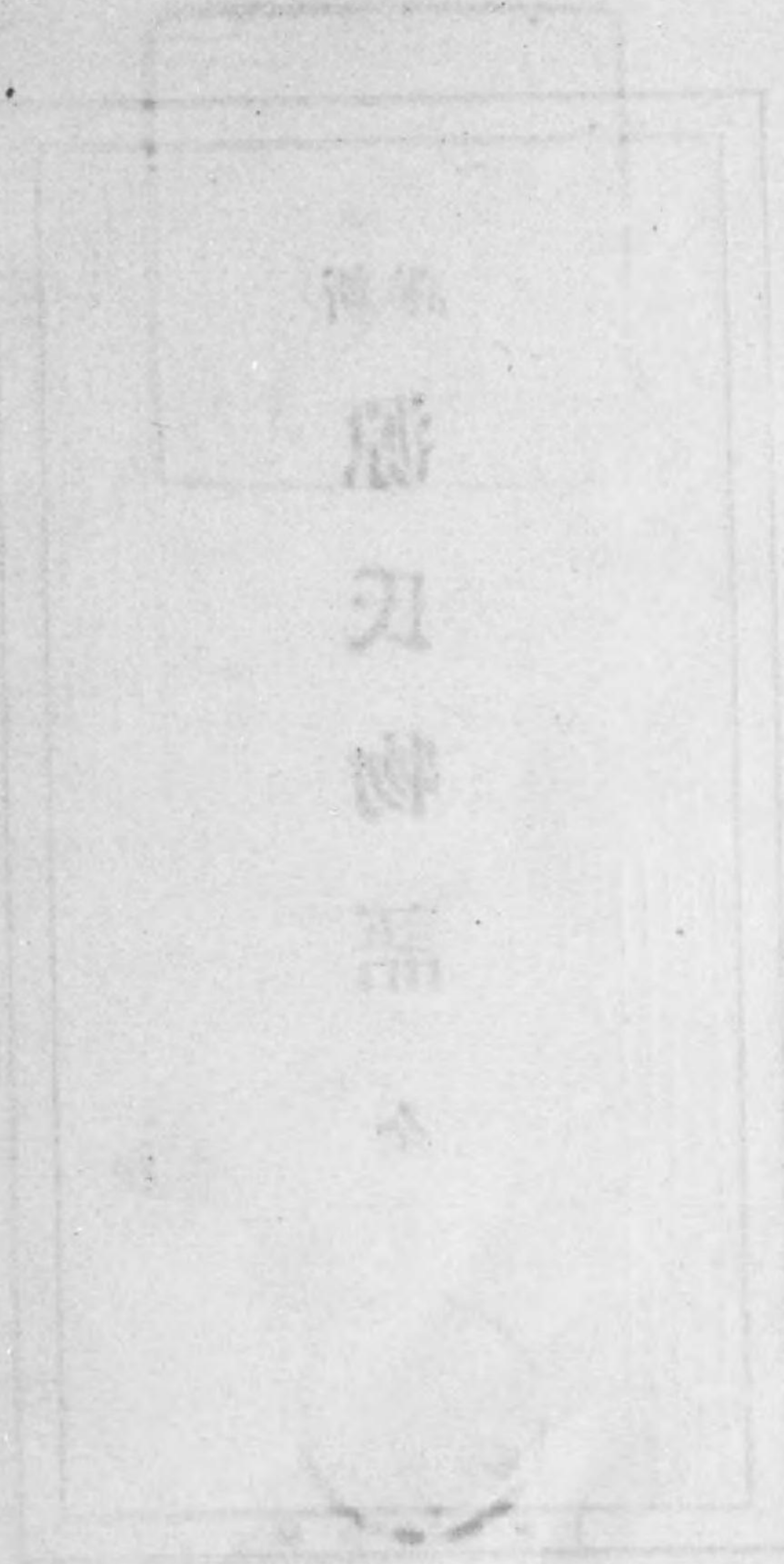


【 版 務 書 局 總 發 行 】

前記

第一期 ゑの若き日

一	桐壺	一
二	帚木	八
三	空蟬	三〇
四	夕顔	三五
五	若紫	四〇
六	末摘花	四六
七	紅葉賀	五一
八	花宴	五七
第二期 謫居の前後		
九	葵	六一



第三期 女院の死

一〇	神	六九
一一	花散里	七五
一二	須磨	七七
一三	明石	八七
一四	澤標	六六
一五	蓬生	一〇一
一六	關屋	一〇六
一七	繪合	一〇九
一八	松風	一一四
一九	薄雲	一一〇
二〇	朝顔	一二六

中 紀

上 その子女たち

二一	乙女	一
二二	玉鬘	一〇

中 六條院の造營

二三	初音	一八
二四	胡蝶	三三
二五	螢	六六
二六	常夏	一〇〇
二七	篝火	一三五
二八	野分	一七七

二九 行幸…………… 四〇

三〇 藤袴…………… 四〇

下 尊貴の生活

三一 眞木柱…………… 四〇

三二 梅枝…………… 四〇

三三 藤裏葉…………… 四〇

後 紀

上 小猫の戯れ

三四 若菜上…………… 四〇

三五 若菜下…………… 四〇

三六 柏木…………… 四〇

三七 横笛…………… 四〇

三八 鈴蟲…………… 四〇

三九 夕霧…………… 四〇

中 紫上に別れて

四〇 御法…………… 四〇

四一 幻…………… 四〇

後紀

下 光かくれて

四二 句 宮

四三 紅 梅

四四 竹 河

宇治十帖

上 宇治の宮

四五 橋 姫

四六 椎 本

四七 總 角

四八 早 蕨

一 八 一〇 七 六 五 四 三 二 一

四九 寄生..... 四

下 漂ふ浮舟

五〇 東屋..... 六

五一 浮舟..... 七

五二 蜻蛉..... 二〇

五三 手習..... 二二

五四 夢浮橋..... 三三

上編

新源氏物語 上編

新源氏物語 上編

桐壺

いづれの御時ともいはぬ、——假に帝を桐壺の帝と申しておかう——、女御更衣と後宮に麗人の多かつた中に桐壺の更衣と申すがあつた。大納言だつた父の早く世を去つた後は母の手で人となり、亡父の遺言によつて宮仕したのであつた。帝はこの更衣をまたなき者に思し召して人の譏をもお憚りにならぬ。かうした中に、宿世の縁といはうか、玉のやうな皇子さへおうみ申したので、人の嫉みはますくひさくなる。これより先き、弘徽殿の女御——右大臣の息女である——のお腹に皇子があつたので、外戚の關係さひひ、旁、太子は無論こちらの皇子とは思へぎ、帝は今度の皇子をのみ厚くお愛しになるので、或はと思ふ危惧の念から、生母更衣に

對する嫉妬は日にそへて強くなつてゆくのであつた。

いろ／＼の心遣ひが重なり／＼て更衣の健康はだん／＼衰へて来る。皇子が三つになつた年餘りに衰弱がはげしいので里に下つて保養したい旨を切に乞うても、帝は日頃の病弱に慣れてはお許にならぬ。その中にも病勢は昂進する一方なので更衣の母はわが子のため泣く／＼帝にはお暇を乞うたので、やう／＼お許があつた。更衣も今更に馴れし宮中を去るの悲しさに、帝の別を惜み給ふを見ては、

かぎりとして別るゝ道の悲しきに生かまほしきは命なりけりと苦しい息の下に名残を惜みつゝ里に歸つてゆく。

帝は寺々に更衣のために病氣平癒の祈禱をお命じになる一方、里へは絶えず御使を遣して病状をおたづねになる。しかし遂に最後の日が來た。例のやうに御使が里へ行くと、

「とう／＼夜中すぎに」と人々は泣き騒いでゐる。力なく歸つた御使よ、さてはその夜の帝の御歎きよ。せめては亡き更衣の形見とも見ん皇子も、かうした喪の中を宮中に止る先例もない

ので、宮を出て亡き人の里へ行く。亡き骸は北邨一片の烟ミなしはて、贈三位の宣命のみがありし日の寵幸を偲ばせるのみである

帝は一の宮を御覽する度に、里なる皇子の佛の戀しく思ひ出でられて、女官等をやつて始終の様子をお見せになつてゐるが、ある野分の夕、急に肌寒を感じるにつけ、殊にあはれに思召して靱負の命婦を遣された。命婦を出して、帝は一人折しもさし出た月影に更衣のありし世を偲びつゝ、思慕の情轉た切なるものがあつて、御臥床にもつかせられず、長恨歌の繪巻くりひろげつゝ、楊貴妃に別れた玄宗の心持をわが御身の上にひき較べて御涙を垂れ給うて夜の更け行くをも覺えず、つく／＼こながめ侘びておいでになる所へ命婦が歸つて來た。命婦はかの母君の宿を訪うて、夜一夜迷に語り交はしつゝ折しも風いさ涼しく吹いて草葉にすだく蟲の音も哀を誘うて冷たく澄みかへる入方の月の満目蕭條たる里の景色に心ひかれながら、帝の御心を思へば皇子の近狀をも申さうと急ぎ歸つたのであつた。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩が下を思ひこそやれ

こ仰せた御返事には

あらし風ふせぎしかけの枯れしより小萩がもこで靜心なき

こあつたのを御覽するにも、御涙はまた新になるのである。命婦はまたかの母君から形見こて得て來た故更衣の調髪の具や、裝束なきをもお自にかけたので、一しほ悲しく、ありし日の佛が慕はしく、臨邛の道士が貴妃をたづねて、これを蓬萊の仙境に得、金釵を記念こして持ち來つて玄宗に上つたこもなきも思はれて、魂のありかをそここ知るべく索め行くべき方士のない今の世を心憂くも思すのであつた。

やがて御忌も明けて皇子も内裏にお歸りになつた。暫し見ぬ中に美しく大人びて來た皇子の姿に限りなき愛着を感じ給うた帝は、その翌年立太子の儀を行ひ給ふ時も、一の皇子を超えてこは思し召せき、外戚のはかしくなつたのを思しては、却て行末の幸も覺束なくさうした氣色は色にもお出しにならなかつたので、弘徽殿の女御の心もや、落着かれ、世の非難もなくて濟んだ。

皇子の六つの時に外祖母は故更衣の後を追うて不歸の客こなつた。皇子は更なり帝もいこ哀れに思し召した。

悲しみの中に皇子は七歳の春を迎へて、御讀書初の式を擧げられたが、その賢さは比ぶべきものもなく恐しきまでに帝は思すのであつた。しかもその容顔の美しさ、愛らしさ、いかな武士でも、仇敵でも打ち見てはほゝゑますにはゐられないやうな御様に後宮の方々もかの更衣に對して抱いてゐた悪感を忘れて、ひたぶるにめでいつくしまれる。學問の道にすぐれた才能を持つてゐたのは云ふまでもない、管絃の技にもいひしれぬ饒かな天分を享けてゐられた皇子であつた。

その頃高麗人が來朝して鴻臚館に淹留してゐたが、中に世にも優れた相人があつたので、あゝる日右大辨に皇子を伴はせて相を觀せられたが、かの相人は驚き怪んで、

「このお方には帝王の位にも昇るべき相が見えますが、それにしては少し缺けた點もあるやうですから憂ふべき事が起るかもしれませぬ。又臣下こして見るこ別の相こあります」とこいうた。

觀相の事が濟んで何か詩文なき作り交はす中に、皇子もめでたい句を作られたのを高麗人は非常に感服した。

帝は以前からも思召すことがあつて、まだこの皇子に親王宣下もなかつたのだが、今高麗人の觀相の結果によつていよく皇子を臣籍に下すことに御決心なすつて、ますます學問藝能を勵ましめ給うて、他日大政輔弼の任に備へしめ給ふのである。

かうした中には帝は故更衣をお忘れになることはなく、せめて思召て然るべき方々をお召しになるけれど、御心慰む方はない。

「あの更衣に准へるごこの出来るだけの女でさへ世にはないものよ」を仰つてゐるが、ある時先帝の四の宮の故更衣の佛にいさよく似給ふ旨を典侍が申したのを御耳に止つて、度々入内あるべき由を仰せになるのだが、母后は

「お、恐しいことです。春宮の御母の女御の意地悪さに、更衣が露骨に辱められたさういふ厭な話も聞いてゐるものを」を躊躇していらしたつたが、その中に母后もおかくなつて、四の

宮は頼りない身になられたのを、兄兵部卿の宮たちの勸めもあつて遂に入内を定る。お住みになるお部屋の名によつて、この宮を藤壺と、これからいふ。

帝は藤壺を得て更衣のごことは忘るはなけれど、心は此方に引かる。天成の麗質は自らなる氣品と相俟つて誰ぞて貶しめいふ者もない。源氏の君も父帝に伴はれて藤壺にも逢うたが亡き母に佛通ふと聞くより「常にお側にゐてお馴染みしたい」と思ふ。帝も藤壺に

「源氏をかあいがつて下さい。不思議にもあの母親さういひたい程あなたに死んだあの母とは似てゐますので、源氏もあなたを母と慕うてゐるのですよ」なき仰る。こんなことから弘徽殿の心に昔の妬しさが甦る。世間では比びないこの二人の氣品をたへて、源氏を「光る君」と、藤壺を「赫く日の宮」と申してゐた。

かくて源氏が十二の年、元服の式を擧げられた。その儀のものくしきは先年の東宮の場合にも劣らぬ。角髪に結へる童形の愛くるしさ、美しさ、帝は今更に亡き人偲ばれて涙のせき來るをおし休へていらつしやる。

大人になつた源氏はやがてその夜加冠の左大臣家に掣ぎられた。奥方になられた女君は源氏には四つの年上である。大臣は君の御覚えもめでたい上に今この君を掣ぎしたのを家門の光榮と思ふ。北の方なる宮にはこの女君の他に一人の男子があつて、今藏人少將だが、右大臣——弘徽殿の父——の四の君の掣ぎなつてゐる。

さて源氏は左大臣の掣ぎはなつたが、父帝の御鍾愛の餘り宮中に居られるこみが多く、宮中では亡母の曹司をそのまゝ桐壺に住み、昔の宮仕人たちをやはり召仕うてゐられる。もこより林泉の様も面白かつたのに、また新に手入をして世にもめでたい殿の様である。こんな所に思ふまゝの人を住ませたらなご今はもう自由に近づき得ぬ藤壺のこみがそゞろ慕はしく思はれるのであつた。

帯 木

源氏は長じるとつれ、好色の聞えが立つ。左大臣家の北の方へもこもすればこだえがちな

で、外にかくし妻もやなご疑うても見られる。もこく世間並みの蕩見さいふ型ではないのでさうしたこみはないのだが、でも非常に無理な戀に熱中する癖もあつて、爲に超ゆべからざる埒をこえるこいつたやうなこみもあつた。

ある霖雨の頃、長く簾中に籠つてゐたこみがあつた。しめやかに降り暮した宵の雨に自ら人少なの折柄中將——源氏の義兄で前に藏人少將こいつた人——が来て、厨子の中のいろくくの艶書なき取り出して何かの物語がつゞく。この中將は右大臣の掣で、その方で厚遇されるにも拘らず、他の女達を語らうたりする浮氣者である。源氏に譲らぬまでに、學問にも音楽にも身を入れて、當代の風流才子である。二人はきこへゆくにも形影相伴ふこいつた風で、大さう仲よく、自然遠慮もなく思つたこみは何でも話すやうな仲なのである。

「この女こそこ思ふやうな批のうち所のない女つてないものですな。つくづく日頃の經驗でさう思はれます。一廉の才藝を持つたやうな者でも、よく觀察して見れば嫌らない所が多い。評

判だけ聞いて近づいて見れば案外なまやか、ものが多いんですからね。」

「全く才のない女さいふものがあるでせうか。」

「そんな者には誰が近づきませう。一體世にはさうした下品の女は、こよない上品の女の少いやうに少く、中位の所が一番多いやうに思はれます。」

「こんなことを言つてゐるころへ、左馬頭・藤式部丞の二人も來あうて、この品定の仲間入りをする。話は好色者三名を得た二人が加はつてますます進む。白い衣の上にゆるやかに直衣を重ねて物により臥せる源氏のおでやかさ、ほんに男でもほれなくせずにはゐられぬ。この君のためには上品の上の女を配しても猶足るべくも見えぬ。」

「種姓貴い家の女で品の悪いのは爪弾きされるのはいふまでもないが、品格がよくてもそれは當然のこゝです。がそれは私共には思ひも及ばないこゝ。淋しく荒れはて、門も葎に閉ぢられ人住むべくも思はれぬ家に、意外にも可憐な女が世にも知られずに居るのは珍しう思はれて、妙に心がひかれるのであります。」なき左馬頭がいふ。そしてなほつゞける。

「すべてよそめに完全に見えても、いざわが妻を擇ばうとするこゝ、さて無いものです。男でも國家の柱石なるべき人は澤山はないでせうが、政務は上下相扶けて圓滑に運轉するもので、家政は主婦單獨で背負うてゆかなければならないのです。足らぬながらこれ位なら思ふ程なのものです。私どもの妻選みでさへさうですから、況して貴方達に見るに迎もまあさうした女を採し當てるのは絶望でござりませう。まあ一向に大様な柔順な女を、わが思ふにほりに仕立て上げるほかじやうがないでせう。さうすれば少し氣に入らぬ所があつてもまだ直すこゝも出來ようし、不十分だといつて、一所に居ればその女の大様で可憐なが爲めに他の缺點を見直すこゝが出來ませう。がこれは常に同棲するこゝしての話で、離れてゐるこゝすれば又格別です。常に餘所々々しい態度の女も、事ある時に際して明快にそれを處理するこゝいふ例も多いこゝです。だから、種姓も、容顔も二の町でも、拗くれてさへ居なければ忠實で靜穩な女を妻としなければなりません。その上學才があつたら思はぬ拾ひ物と思ふべきでせう。又こんな女達があります。内氣で恥かしがり、情ない男の行をも色に出して云ふこゝもせず、思

ひつめては出家遁世なきをしてしまふ。ほんまにいけない心がけです。たゞ勘ねて知らぬふりなきせず婉曲に男に仄かしたなら却て男の愛も増りませう。さいつて男のするまゝに怨みずにするておくのはまた却て男から疎まれるでせう。」

かうした長話の末、おのくの経験談にうつる。まづ左馬頭の話――

まだ若く下臈だつた頃、哀れさ思つた女があつた。容顔なきもよくはなかつたので浮いた心にはその女だけに心は寄らず、外にも通ふ女はあつた。處が女は自分に眞實をつくしてはくれるが、嫉妬深く常に疑ふのがうるさく、悪女の深情なき、有難迷惑に思ふこゝもあつた。さうかしてその性情を矯めやうと思つて、

「もうお前には逢ふまい。もし末長く思ふのなら、少しくらゐる情無さは俵へておいでよ」
なきいへば、女は少し笑つて

「あなたの立身の折を待つのは寧ろ氣樂なんですが、情無心直るのを待つのは張合のないこゝで、逆も堪へられないから、いつその事今お別れする方がようございます」なき憎さけに

いふので、つひ癩癩まぎれに思ふ存分随分甚い事をいうてやるこゝ、突然自分の指を引き寄せて喰ひついたので、

「唯さへ卑しい私が、かうした疵さへ附いて見ればこの上官途の昇進は思ひもよらぬ。あゝ、もう遁世でもしなければならぬ」さ嚇して、

「もう逢はないからね」さいつて痛い指を屈めて歸つた。

實は自分の心ではそのまゝに絶え果てやうさまでは思はなかつたので、暫く消息も絶つておいて、加茂の臨時祭の豫行演奏で夜更けて退朝の歸途、雲は雪ミ降りかはつた中を行つて見たが、親の家へ行つたさして留守だつた。その夜女の許に新調された自分の装束なきのあるのをさすがに忘れてゐるのでもなかつたさ思つたので、復縁する心はないかなさ消息するさ返事には「今迄のやうなら厭ですが、お心さへ直つて下されば」さあつたので、またそのまゝにしておく中に死んでしまつた。何でもよく相談相手になる女で染織裁縫の道にも勝れてゐたので、ほんまにその死は惜しいこゝであつた。

又その頃通つてゐた別の女は前の女よりも人品もあり、歌も字も、琴も上手であつたが、ここ心が許せない。十月のある夜さる殿上人と同乗して退朝するに、その殿上人がこの女の家の前で車を下りた。折しも築土のくづれから池の水影見えて月さへ宿る住家のさまもおもしろい。自分は何を彼がするか見てゐるに、笛を吹き澄ますに、内で女は琴を合せた。はら／＼と散る紅葉は月影にきらめき、庭上の菊花の晩秋の霜に赤めるもおもしろけき、すつかり興ざめて女を疎む心になつてしまつた。――

頭中將はついで「數ならぬ女の話」にて語る。――

嘗て密かに逢ひそめた女があつた。容顔もかなりだつたので、心ひかれて絶え／＼ながら忘れぬ者であつた。親もなく心細けなくらして、一途に自分によりかゝつてゐる様のいちらしさ。自分も女を忘れるさいふでもないが、暫く逢はずにゐる中に、妻から女へ随分ひきこきをいひ送つたらしい、その事は後でわかつた。女はもうその頃もう子まで産んでゐたので、心細さに撫子の花にそへて、

山賤の垣は荒るさも折々にあはれはかけよ撫子の露

さうして来た。自分もあはれさ思つて女を訪うたが、その後また暫くさだえた中にさこへ行つてしまつたか行方がわからなくなつてしまつた。まだ生きてゐるなら随分みじめな境遇にゐるさこだらう。さうかして尋ね出したいと思ふが、まだわからない。――

人々にすゝめられて、式部丞も語り出す。――

まだ文章生だつた頃、ある博士の所へ物を習ひに行つてゐたが、そこには娘達が多かつた。その一人にふさ言ひ寄つた處が或日先生は私を呼んで盃を侑めて、白氏文集なる「聽我歌兩途。富家女易嫁、嫁早輕其夫。貧家女難嫁、嫁遲孝於姑。」の句をひいて、自分にその女を許した。その女は中々の傑物で、學問は下手な博士を凌ぎ、辯論は必ず敵手を緘黙せしめる底の女であつた。で、自分も随分そのお蔭をうけたさこもあつたが、さて妻にさこは思はなかつた。久しく訪ねずに、或日行くに衝立を隔て、逢つて、

「近頃、風病の重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して、口が大へん臭いので、ようお目にか

りませんが、物越しながら御用があつたら承りませう」こいふので、匆々逃げて歸つた。かうした話をきくにつけ、あの藤壺女御のやうな方をこそ、足らぬ所もなく、さりまて出過ぎた所もない理想の女性こいふべきだらうと、人しれず思ふ。かくて今宵の品定めは何とも結末もつかぬ中に枝葉から枝葉へ分れていつて、こりこめもつかずに果て、しまふ。

翌日はすつかり晴れた。久しく訪はなかつた左大臣家へ思つてゐるこ、今日その方は塞つてゐるこ告げる者がある。二條院も同じ方向にある。ここに方違ふべきかと思ひ迷つてゐるこお出入の紀伊守の中川の邊の家は、近頃泉水なき設けて涼しけであるこいふ者があつたので、紀伊守を召してその旨を傳へる。

「實は父伊豫守の家に取込があつて、女達が私の家へ來てゐるのだから手狭で、もし失禮なここがあつては恐縮ですが……」なき密にいふのを「ちつこも構はん。人氣無い所より賑かで結構だ。女達の几帳の後へでも寝せてもらへばい、」と言つて、供の者も氣心の知れた者だけつれて忍んでそこへ行つた。

寢殿の東面を明け放つて假の設備をした。泉水の趣もおもしろく、田舎びた柴垣に前栽の丁合なき擬つたものである。風涼しく初夏の蟲の音かすかに、螢の飛び交ふ様も風情に富んだ庭の様である。杯を舉げながら、伊豫守の女達が來てゐるこいふがここにかこ氣をつけてゐるこ西の方の部屋に人あるけはひがして、さやくこ衣摺れの音がして若い女の忍びやかに物言ふのもきこえる。源氏はゆかしくしてその方へ寄り添うたが、ここにも隙はない。たゞわが上を噂してゐるここだけがそれこ聞かれた。やがて紀伊守も出て來て何かこ御饗應申す。

やがて人々も静まり、源氏も端近い御座所で寢につかうこして、そこにゐた子達の上を紀伊守に問ふ。その中に十二三の子をさして、

「これは故衛門督が愛してゐました末子で、幼い頃父親に別れて、姉なる人の縁でここに來てゐるのでござります。殿上の御奉公もこ思ひますが、しつかりした後見もありませんのでここいふ。

「ぢやこの姉さんが其方の繼母だね」

「若いお母さんだね。お父さんは大切にするだらう。——一體今日女達はどこにゐるの。」

「勝手の方へいいておきました。まだ行かずにゐるかもしれません。」

源氏は目が返えて中々ねつかれぬ。

「どこにいらつしやるの」といふのはあの少年の聲だ。

「こゝよ。お客様はもうお寢み？」

「え、庇の間に。ほんこにお綺麗な方ね。」

「晝だつたらそつとすき見でもするんだつた」

なき睡さうにいつた聲も少年に似てゐた。

「中將の君は？一人は怖い様だわ。」

「お湯に参りました。もうすぐ戻りませう」と隣室と思しき方で聲がする。

源氏はそつと襖をあけて見るこゝ、事もなく明いた。ほの暗い灯影をたよりに女に近づいてゆく。女は中將が来たこゝ、思つてゐるたがふこゝ氣がついて見るこゝ男であつたに驚いた。

「あッ」と叫んだが衣を顔にかぶつてゐたので、それに籠つてきこえぬ。人を呼び立てるもはしたなしと言つて夫ある身のあさましく、やつと

「お人違でせう」といふのもか細い聲であつた。

「何の人違でせう。さあ私の心の中をあらで」

と言つて女を伴れて御座所へ歸る。女は恐しさに汗にまみれながら、力強くその誘惑にうち歸たうこしてゐる。

さうしたこゝがあつてから源氏はその女がいさしく思はれてならぬ。女はあゝまでやさしくされてもさうしても源氏を愛さうといふ心にはなれぬ。唯心に浮ぶは夫のこゝばかりである。没趣味な厭な人と思つてはゐるものゝ、今はわが心のすべてを占めるのはその人である。昨夜のさまを夫は遠い任地で夢みてはゐないだらうか、そんなこゝを思へば心はたゞ重くなる。源氏は女の弟——小君と呼ぶ——をせめての慰として傍近く使ふこゝ、した。そして消息をあの女に送るが女は返事もしない。また方違にこゝよせて中川の宿に行つても、惱みがはげしいこゝ

て女は逢はぬのを、源氏は世にも稀な物堅い女かな、こんなに手厳しくされては我身が恥しくなつたなき思つて、

帚木の心も知らず蘭原の道にあやなく惑ひぬるかな

さひ送ればさすがに

かすならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

このみ返した。かうして源氏の戀々の心はますます度を加へてゆく。

空　　蟬

源氏は思へば中川の夜のこゝが無念に思はれて、小君にしみじみと述懐する。女もまあ事なくて済んだと安心はしたもの、これぎりになるこゝかと思へば何だか物足りなくも感じられてつくづく詠め暮しがちである。小君は源氏にせめられて、いつしか姉に手びさしように折をうかゞうてる。

かうしてゐる中に紀伊守も任國に下つたので、この折にこそ小君は源氏を案内して行つた。まづ君を東の妻戸にお待たせしておいて、南の方から内に行つた。その時紀伊守の妹は繼母と碁を打つてゐるのだが、源氏は小君と女房との會話にそれを知つて、つゝ歩み出て、ものゝ間からその方を見る。

暑いので几帳の帷も巻いて、奥の方もよく見える。灯をつけて、母屋の中柱の邊にゐるのがその人である。濃紫の綾の單重に、頭つきも小さく、見所もなき様ながら、向ひ居る人にも見られまいと心を遣うてゐるやうである。それに反しても一人は東向きに居るのがあらはに見える。白い單重に二藍の小桂らしいのをしきけなく着て、胸もあらはに、色白によく肥えて丈高く顔立てから目鼻だち口も愛嬌つき美しい。髪も房々も、長くはないが肩のあたりにこぼれかゝつて、批のうち所もない人の容である。たゞこゝこなく騒々しいのが缺點だ。碁がすんだめをつめるにしても、いかにも手早い。母は落ち着いて數へやうこしても、娘は「いえ今度は負けました。」なきいつて隅の地を十、二十、三十なき、指折り算へる敏捷さ。母より少しは

劣つて見える。かうした打ちまけた女達の様を源氏は珍しと思ふ。やがて小君が出て来るので何氣なくそこを立ち離れてゐた。

その中にあちらの方で碁もやめて人々は寢所に入るやうだ。小君は

「私はこの入口の所で寢よう、風がよう通るから」言つて、戸を開けたまゝ暫く空寢をしてゐたが、皆の寢静つた頃起きて火影を避けて源氏を内に案内した。女はいにし夜のこゝろが忘れられぬまゝに熟睡しかねてゐたので、和かな衣ずれの音にそれぞ察してやをらすべり出た。源氏はそれとは知らず、入つて見れば女はたゞ一人寢てゐる。前の女よりは太つてゐるのだが源氏には氣がつかない。傍によりそうてもよくねてゐるのに、やゝ變だと思ふ。管玉だつた今更氣がついたがもう遅い。人違だつた女に氣取られてはなほまづい。あの女を探し出したつて、自分を避けてゐるのだから、却てこつちの愚さを思はせるに止まらう。もしこれがあの碁の相手の女かも知れない、それなら………：こゝろのかはるのが例のこの君の悪い癖である。やつと目ざめた女は意外の事にたゞ途方にくれたものゝ、敢て騒ぎも立てない。

「今迄方違に言よせて来たのも皆あなたのためですよ」なごいへば、女も疑はずにそれをうけ入れる。

「昔の人もかうした中こそ殊に思深いもの云うてゐます。さうぞ私をお忘れなさるな。でも私もさう思ひのまゝにも出来ない身ですから、心に任せぬこゝろもありませう。又親御のお許しもさうでせう。あれやこれやと思へば心配にもなります。氣永に時の來るのをまちませう」

「人目にかゝつても何ですから、わざとお手紙もあけません………」なご女もいふ。

「小君でも使にして消息はしませう。でも人に氣取られないやうになさい」なご言ひおいて、かの女がぬぎ捨ておいた薄衣を取つてそこを出た。

小君を起せば、さうかと思つてよくも眠れなかつたのですぐ目を覺して、戸を明けて出ようとする。

「そこをお開けになるのは誰方？」老女房がいふ。

「私ですよ」

「この夜中に何御用ですか」と言つて見に来さうなので急いで源氏を押し出して自分も出た。女房は月の光に二人の姿を見て、他の女房だらうと思つてそのまゝ内へはいつた。

二條院へ歸つて一伍一什を語つて、「はんこに私は伊豫介以下なんだね」なき怨じながらも例の薄衣を身にそへてお休みになつたが、眠れぬまゝに、

空蟬の身をかへてける木の下になほ人がらのなつかしきかな

と書かれたのを、小君は懐に入れた。あの女へもと思つたが念じかへしてやめた。

小君の來るのを待ちうけた姉はひびく彼を叱るのであつたが、小君は例の源氏の歌を姉に渡した。さすがにあの見苦しいであらう薄衣が恥かしかつた。こゝへ嫁しなかつた前だつたら小女は源氏の心をなつかしみつゝ、あの歌の紙の奥へ、

空蟬の羽におく露の木がくれて、しのびしのびにぬるゝ袖かな

娘は小君の來たのをきいて、お手紙もやと期待してゐたのがなかつたので物足りなく胸さわぐのであつた。

夕 顔

こゝに源氏の通はれる人に六條御息所といふがある。桐壺の帝には皇弟で春宮で亡くなられた方の御息所で、女王一人をつれて六條邊に佗しく住んでゐる。そこへの途中に、病み臥せる乳母を見舞はうとて五條の家へ車を枉げた。門が鎖してあつたので、惟光——乳母の子で、源氏の家司である——を召して門を開かせようとして、そをまつ間にあたりを見るに、この隣に女の美しい透影の見える家がある。さうした家か覗けば板塀のやうなものに蔓草は這うて白い花をつけてゐる。

「あの花は？」と問へば

「夕顔と申します」といふ。

「一枝」と所望すれば、門に入つて折らうとするに、奥から童女が招いて、

「これに載せて」といつて薫物くゆらした白い扇をさし出した。折から惟光が出て來て、それ

を受け取つて源氏にさし上げて、長くお待たせした詫なきいうて御案内申した。乳母の喜は思ひやられよう。祈禱のこまなきいうて、さて出ようとしてあの扇を見るこ

心あてにそれかきぞ見る白露の光そへたる花の夕顔

こある。惟光に隣の主を誰ぞ問へご知らない。なほ尋ねて、揚名介——名のみ國司だが地方の實務に關しないもの——の家で家人は地方に下り、女たちだけ残つてゐるのだこいふことがわかつた。返歌せずにおくのもをかきなもので、

よりてこそそれかとも見め黄昏にほのほの見ゆる夕顔の花

こ疊紙に書いて返させて、六條へ行つたが、行つてからもなほ夕顔の宿のこまが深く堀に刻まれて忘れられない。今まで氣附かなかつたあの家のこまが、今はここにゐても大きく心にうつる。

あの伊豫介の妻のこともつれなくもてなされたもの、どうしても心から消えたい。その中に伊豫介が妻を任國に同伴せんがために思ひもかけず上洛した。下らぬ中にも一度と思つて小君

を促すけれき、むつかしいこいつて、さうしても源氏に従はない。

秋になつた。源氏は左大臣方へも容易に足をむけない。六條へも始めの中こそ頻繁に通うたけれき、今はやうく足も遠のいた。御息所は年上なので、もしやこのま、捨てられてしまふのではなからうかきぞろ嫉ましさには堪へない。

惟光は隣家の様子を窺ふやうに源氏から頼まれたが、或日

「誰ぞ慥かに分りませんが、人に隠れて住んでゐる風でござります。徒然な折には南の半部ある長屋に来て人々が車の音がする毎に外を覗いてゐますが、時々主と思はれる女も来るやうでござります。はつきり見ないのですが美しい人のやうでござります。先日は例の車を見てゐた童女が「右近様、御覽遊ばせ、中將様のお通りですわ」こ申しますこ、「まあやかましい人」なきいひながら女房達も出て見たやうでしたが、お供廻りで頭中將こ知つたやうでござりました」こ申し上げたのをきいて、その女こそあの雨の夜に頭中將のいうた女ではないだらうかと思ふ。惟光もその家女を語らうてゐるのだが、時々行つて様子を見るこ、同輩のものこ見せかけ

てはゐるが、實はその女達の主人らしい美しい女の居ることを知つて源氏にいうたので、「ぢやお前のお母様を見舞ふ時、私にもその人を見せてくれないかね」なき頼まれて、拒りきれずに源氏をその女に通はせるやうになつた。源氏はさうした佗しい住るにも思ひがけない美人を見ることもあらうかこの心からである。

女の素性も知らないので、源氏も深く自分を包み隠して、もしやと思ふので隣りの乳母の家へも立ち寄らないやうにしてゐる。女はそれを心もさなく思つて、使が來ればそれに人をつけてやつたり、朝の歸り道を窺はせたりして男の住るを探らうとして苦心するけれど、源氏もその心しらへをしてなかく、にそれさうち明けない。でもこの女に離れてゐるさすがに氣にかゝるので、道の不便を忍びつゝも通ひつめてゐた。女はかうして身をやつしては人の靜まつた夜更に來ては顔も見せずに朝早く歸つて行く男を、昔物語の變化のやうに不氣味に思つてゐた。

もしこの女によそへ行かれてはと思へば、早く二條院へでも源氏は思ふ。「氣樂な所へ行つて、心長閑に暮しませんか。」

「何だか人竝違つたお振舞に、恐しうて……」

「ほんまに、さちらか、狐でせう。まあ誑されてゐらつしやい」なき源氏はいふ。女もさうした心持になつてゐた。

八月十五日のこみである。見馴れぬ賤の家の様も珍しく思はれるに、もう明方近いのだから隣の人達はおき出て

「何て寒いこみだ。それに今年の不景色こいつたら、仕事もなうて困つちまう。どうですお隣の大將」なきわめくのも手に取るやうに聞える。女はかうしたこみをお耳に入れるのを恥しと思つてゐる風である。こんな所に住みながらも大様に上品なのを源氏はうれしと思ふ。こみ、雷の鳴るやうな音がごろ／＼聞える。碓の音は知らぬので、たゞ殺風景な音ばかり聞いてゐる。砧を打つ音も遠く、雁も空を鳴き通る。戸を開けて見れば狭い庭に竹を植ゑて、その葉に露は葉中こ同じく置いてゐる。蟲が亂がはしく間近くすだくのも珍しい。女は白い袷に薄紫のなえばんだ衣を重ねて、つゝましやかな姿は、たゞむやみに愛し覺える。

「つい近くで、氣樂にくらしませう。」なさいつて、右近さいふ女房を召して、準備にかゝる。鶏の音もせず、まことの老人か御嶽精進らしい勤行の聲もあはれけである。朝露のやうな世に何の祈ぞきけば「南無當來の導師、彌勒菩薩」なま拜んでゐるのだつた。

「まあお聞きなさい、現世の福だけ祈るのぢやありませんよ」なま言つて、ためらうてゐる女を促し立て、車に乗せた。

車はある廢院の門を入つた。茂り合つた木立の様も凄い所である。朝の光の中にしみじみ男の顔を見た右近はほんまに美しい人だと思つた。そして院の留守居の人達の態度や何かで、きつゝ源氏に違ないま心にうなづかれた。女を扶け下して、留守居の人に堅く口ごめをして、差し上げた御飯をすましておやすみになつた。

日高けて、源氏は自ら格子を上げる。長く来たまこもなかつたので、荒廢しきつた池塘の様も恐しげに、人住む方もまこには遠く離れてゐるので一しほ淋しい。何かま物語なまして女の氣を紛らさうとする中に日も暮れがたに惟光が来てお菓子なまを差し上げた。暗い奥の方を避け

て端の簾を上げてしめやかにうち寛いでゐる。女はかうしたことこんな所へ来たことを不思議には思へど、すぐれた男の様子には歎きも忘られて、少しうち解けて来た。黄昏が迫るにつれて、廢院の内外は凄凉の氣に包まれる。源氏は格子を下し灯火を近く點して

「私はこれほどあなたを思うてゐるのに、まだ何だか分け隔てをなさるやうなお心が苦しい思はれます。」など怨みつゝ、帝は今日も姿を見せぬ自分をどんなにお探しだらう、又六條でも久しく訪ねないのを怨んでゐるだらうなど思ふ。

初夜少し過ぎたと思はれる頃、少しうとくしたと思ふ枕上に、

「深く戀しと思ふ私を顧みず、さまでにもないかうした女をお愛しになる恨めしさ。」と言ひつゝ、取り亂した姿の美女が傍なる女を揺り起さうとするやうに思つて、物に壓される心地に目を覺すと灯も消えてゐる。恐しさに太刀を抜いて右近を召せば、これも恐しと思ふ様で来た。「諸所にゐる人を起して灯をつけて来るやうにいうておくれ。」

「よう参りません。この暗さに………」といふので、源氏は手を拍てば、山彦の答へる聲もおそ

ろしく聞える。女も恐しさにふる／＼戰慄うて汗になつて正體もなくうつ臥してゐる。源氏は右近に

「私が行つて人を呼ばう。手を拍てばこゝだましていやだ。暫くこゝにゐてくれ」というて、西の妻戸に出て戸を明ければ廊下の灯も消えてゐる。殿の中人少なに、侍ふ人達は皆眠つてゐた。起して

「灯火をつけて。隨身たちには弦打して魔を拂ふ様いへ。惟光はどうした。」といへば、

「御用もないやうだから朝お迎に來ようとして歸りました。」といふ。女はどうしたらうと氣にかゝるので歸つて見れば、前のまゝの姿で臥てゐて、右近は傍に俯臥してゐる。

「まあどうしたといふの。こんな久しく空家にしてゐた所だから狐でも出て脅すんだらう。私が居るから大丈夫だよ」といひつゝ右近を引き起さうとすれば、

「私よりお姫様が」といふので、手で探つて見ると氣絶してゐる。引張つて見てもぐにや／＼して正氣もないやうである

そこへ侍の若者が手燭をつけて來た。こりよせて火影に見るに、不思議や、さきに枕上に見た女の姿があり／＼と見えたと思ふに、ふつと消え失せた。氣味悪さに女に寄り添うて見ればもう身も冷えて息も絶えてゐた。途方にくれた源氏は女の死骸を抱いて呼び生けようとはすれど甲斐もない。恐しさも忘れてたゞおぎ／＼と泣いてゐる右近をたしなめつゝ、源氏は例の若者をよんで

「五條へ人をやつて惟光を呼んで來るやうに。又兄の阿闍梨も居たら一緒に。乳母に知らさないやうに内密にいはすんだよ」と命じる。

もう夜半も過ぎたらう、風荒々しく吹いて松のうなりも物凄く、梟の鳴く音もかすかに聞える。こんな人氣ない淋しい所に來たこゝが後悔される。灯は仄かに瞬いて光の及ばぬ隈のあたりから、今にもわが方に寄り來る足音のきこえるやうな氣もされて、一夜を千夜に感じつゝ、惟光を待てど待てど來ない。鶏の音の遠きこえるにつけ、かうしたこゝから、わが浮名が世に立つこゝがあつたらなきも思はれる。漸う惟光が來た。右近は彼を見るに、はじめの時か

ら今日までのこゝが急に思ひ出されて今更ながら泣き臥してしまふ。こゝ、源氏はおし怵へくした涙が一時にあふれて暫しは物もよう云はなかつた。やがてかいつまんで事の顛末を語つて

「悪靈退散、蘇生本復の祈禱を思つて阿闍梨もさういふてやつたのに……」

「兄は昨日叡山へ歸つてしまひました。それにしても不思議な事でございますね、前からでもお悪くいらしたのですか。」

「そんなこゝはなかつた」といつてまた新しい涙のこみ上げてくるのをえ怵へぬ源氏のさまのいたくしき。惟光も思はず貫ひ泣きに泣くのである。こゝにかくこゝでは自然世に漏れるこゝもあらうとて、女の骸は今は尼になつてゐる惟光の父の乳母の庵へうつし、源氏は一先づ二條院へ歸つた。歸つても源氏はもし蘇生した時、自分を捨て、一人歸つてしまつた我身をさう思ふだらうなき千々に思ひ亂れて御帳の中に熱つほい身體を横へ暮す。

いつまでも起き出ぬ源氏を院の人達は怪しみ思ふ。晝ごろには内裏からも勅使が来る。左大臣家の誰彼も来たが、頭中將だけに難ごしにあうて、乳母の病氣を見舞うたところが、丁度

その日にその下男が死んだので、御神事のある時分こゝいひ、けがれた我身を憚つて参内もえしなかつたこゝいふやうな風にこり繕うて話して「それに今朝から風邪をひいたかして頭が痛むものですからこんな失禮なおもてなしをいたします。お許し下さい。」こゝいへば、頭中將は歸りかけて、

「さういふ穢れにおあひになつたんでせう。何だか今のお話はあてにならんやうです」といふ。源氏は心の中を見抜かれた心持がして、平氣を装ひながら何もなく惱しい氣分に浸されずにはゐられなかつた。

夕方惟光が來た。

「さう？　だめかね。」こゝいふく泣く。

「さうくお絆切れのやうでございます。長く死體をおくわけに参りませんから、丁度明日は日柄もよろしいので葬送さきめました」

「あの右近こゝいふ女は？」

「あの女もすつかり弱つてしまつて、今朝なごは谷へ飛びこまうこいたしましたが、よくすかしなだめておきました。」こいふ。源氏は自分もこの日頃の様子ではさうなるこごかと思ふなご心細く話される。そして

「不都合と思はれるかしらぬが、私はも一度あの女を見たい」こいつて、あの夕顔の宿へ行く料の狩衣を着て馬に騎つて惟光と共に院を出た。院の女房達は不審に思つてゐた。

十七日の月の影さす加茂川を渡るこて、鳥邊野の方を見やるにつけ無量の感慨にうたれて、例の東山の庵室に辿りついた。満目荒涼たる山里の板屋の傍に小やかな堂を建て、念佛の聲が細く洩れて来る。佛前の灯火が壁の隙洩れて、女の忍び泣く音も哀れである。寺々の初夜の勤行も濟んだ頃まで、あたりは閑寂として、遙かに清水のあたりに火影が明滅してゐる。堂内に入た源氏は冷く眠れる女をつこかき抱いた。愛らしいその容顔、あゝこれが死んだ人かあの廢院の夜の甘いさゝやきよ。

「あゝ短かつた私等の契りよ、あごに残つてこの悲みを味はされる私のみじめさ」こんなこご

を言ひながら泣きに泣くのを居並ぶ法師達は誰ごも知らず、皆貫ひ泣きに泣く。

やがて惟光に促されて馬に乗る。露滋き道を歸るにもかき亂される心は鞍の上にもたまたらず河原で馬からすべりおちなぎして、惟光に助けられてやう／＼二條に歸りついたがそれから病みついて二十日ばかり床についてしまつた。亡き人の形見にはかの右近を召して近く召し使ふこごにした。

ある夕方右近を召して、何かこ長閑に話した末、源氏は忘れるひまもないあの女の種姓をたづねた。右近の話によれば、彼女の両親は早く故人ごなつたが、父は三位中將であつた。彼女を此上なく愛してゐたが、その生ひ先を見ずに短命で終つた。やゝ成人した彼女はふごしたこごから頭中將——當時はまだ少將だつた——の愛を受けて三年ほご幸福の日がつゝいたけれど去年の秋頃男の妻の父なる右大臣家からいご恐しいこごを云うておこされたので、もこ／＼氣の弱い彼女は西の京の乳母の許へ潜み隠れ、更に山里へご思ふ中、今年はその方が塞つたので暫し五條の佗住るをする中に源氏に見顯されたのであつた。

「中將が赤坊があつたと言つてゐるが……」

「お子様は一昨年のお春にお生れになりました。それはおかはいお嬢さまでいらつしやいます。」

「その子は？」源氏はわが方に引き取りたく思はれて、こんなことをきく。

「西の京のお乳母さんの所におるで、ござります。」

晩秋の夕暮は静かに淋しい。庭の草は枯れて、蟲の音は恨み顔である。もみち初めた木の葉の風情、五條の陋巷と比べて右近は又なくめでたしと思ふ。竹藪の中に鳴く山鳩は廢院の巢を偲ばしめる。

「それはさうしてあの人はいくつぐらゐるだつたらう。」

「十九におなりでしたらう。」

かうした折しも空もつて風冷かにつくづく物思はれて

見し人の烟を雲と眺むれば夕の空もむつまじき哉

なき獨言たれる。あのうるさく聞えた砧の音も思ひ出されて、長恨歌なる八月九月正長夜、千

聲萬聲無止時といふ句を誦じつゝ、源氏は寢所に入つた。

あの伊豫介の妻の弟なる小君はその後時々源氏に伺候するけれど、源氏から何の消息もないのを女は物足りなく思ふ折から、消氏不豫の報をきいて消息したのを、源氏はあの女から珍しき思つて返事をする。女はそこに源氏がまだあの夜を忘れずにいるのを見てお氣の毒もをかいとも思つた。あの娘には藏人少將を掣きつたき聞いて、小君を通じて丈の高い萩に消息をつけて

ほのかにも軒ばの萩を結ばずば露のかごを何にかけまし

さいひ送つた。女は心苦しかつたが、でもよく忘れずにいらしたことを、思へばうれしくて返事を小君に托した。

かの亡き人の満中陰の法要は叡山で嚴修された。願文は自ら書いて文章博士に添削を命ぜられたが、博士も筆を加へる餘地がないまでにいみじき出来榮だつた。五條の宿では女の行方を

尋ねたがわからぬ。地方官の息子でも伴れて下つたものかとも思つてゐた。法會の翌晩源氏は夢にあの廢院の夜の怪しの女の姿を見たので、あの女の死もさうした變化のせいだつたのだと思はれる。

伊豫介は十月初旬に任國に下る。源氏は消息にそへてあのぬぎ捨ての薄衣を送りかへし、なほ饒別として立派な櫛・扇なごを多く送つた。その返事を見るにつけ人ごは異つて情剛い女でこのまゝつひに田舎へ別れ行くごよご思ひつゞけられる。

かうした中川の宿にあうた女ごいひ、廢院の夜にはかなくなつた女ごいひ、事情をわけて人にも語らふごも出來ず、慰めてもらふごも出來ず、わが心一つに秘めおけば、忍び歩きの心苦しきは今更ながら深く心の奥深く刻みこまれたごであつた。

若 紫

源氏は瘧を病んで種々加持祈禱の數をつくせごその驗もなきに、ある人の勧めによつて北山

のさる寺なる優れた驗者の僧を召されたけれご老人のごご、て山を下らぬに、やむを得ず自らの寺に微行しようごて、親しき供人を四五人つれて、夜をこめて都を出で立つ。寺は山深く入つた境にある。三月の末ごはいへご、山の櫻はまだ散りやらで霞たなびく風情もおもしろく都の外に出でならぬ人々には珍しい景色である。

聖者の坊は高き峯に巖を負うてあつた。それご名は明さねご、自ら知られる源氏の姿に聖者も恐縮して請じ上げ、然るべき御符をつくつて飲ませ、加持なごする中に日は高くなつた。坊を出てあちこち見渡せばあちらこちらに僧坊の屋根が木立の中に見える中にこの九折の下に置しく小柴垣をめぐらし、清けな廻廊なご立てつゞけて木立もよしありけな一構を誰がと尋ねるご、某ごいふ僧都が二年間の參籠をしてゐる所ごいふ。源氏の知れる僧である。その坊に童女や女房の出入するのが見える。それがかうした寺中だけに目立つ。時がたつにつれ、また瘧がおこりはしないかご源氏は心配するので、なるだけお氣持を紛らさうごて供の人達は源氏を庵の後山へ案内した。そこから洛中の景が手に取るやうに見える。人々はこごで諸國の物語など

したが、その一人が今明石の浦に隠栖せる播摩前司入道のこゝ、さてはその娘のこと、入道が娘にわが死後豫ての願が遂げられなければ海に身を投げてしまへなごいうてゐることなどを告げる。かうしてゐる中にも、幸ひ瘧の起る様子も見えないので、御供の人達は都へ歸ることをおすゝめしたが、

「御病氣は誰かの靈が祟つてゐる様でありますから、今夜も一度加持して、それから御下山がおよろしくありませう」こゝにふ聖者の語に、源氏もかうした旅寢は馴れぬものゝ、それも一興さ、その夜はこゝに一泊することになった。

夕暮の霞めるに紛れて、惟光と二人、源氏のかの小柴垣の下にぞむ。西面に持佛をすゑ花が供へてある。中の柱に倚り添うて、四十以上と見える上品な尼が脇息に經文を載せて懈さうに讀誦してゐる。清けな女房が二人、その他童女なきが出入する。そこへ十位の少女が走つて出たが、そんなに美しく生ひ立つだらうと思はれるまでにたちまさつてゐた。髪は扇を廣げたやうに房々ゆらめき、顔は泣いてゐたのか濡れつやめいてゐた。

「どうしたの、またお喧嘩？」と尼がいふ。顔だちなど、親子かと思はれるほどどここなく似てゐる。

「雀の子をいぬきが逃がしましたのよ。あんなに籠の中へ入れておいたのに」と口惜しげにいふ。よく見ると夢寢にもえ忘れぬ藤壺によく似通へる佛よと源氏は涙ぐましく思ふ。すると僧都が来て、

「はしたなき御端居よ。光源氏の君が山の兄上の坊へ瘧の加持にいらしたことをききましたのに。とも角私はこれからおうかどひして参りませう。」といふ。源氏はあの少女はどうした素の人だらう、女御の代りにわが傍に常に引き据ゑて見たらと思ひつゝ僧坊へ歸つた。

その夜僧都は源氏を訪うて、自坊へ請じる。源氏も垣間見し少女の姿も懐しさかの小柴垣訪ねて、物語の末に、かの尼君のこゝを問ふ。

「こゝに居るのは故按察大納言——と申しても早く死んだ人ですから御存じはありますまいがその妻で、私の妹に當ります。近頃病氣してこゝに参つて居るのでござります。」

「その方に娘が一人あつたと聞いてゐるが……」
「たゞ一人の娘も、もう十年ほど前に死にました。大納言は入内させようと思つて居りましたが、その歿後慮らずも兵部卿宮に思はれ奉りましたが、いろ／＼の物思ひになくなつてしまひました」などいふ。あの少女はその忘れ形見だつた。どうかして自分の許に引きとりたいと思ふ。僧都は中々に承諾する風もない。源氏はその夜尼君の所へ行つて直接わが思を述べた。

明くれば都から迎の者が來た。帝からも左大臣家からも。岩がくれの苔の上に小宴を張り、人々管絃を弄びなどする時、僧都の勧めに源氏も琴を弾じたが一山の僧尼どもそのめでたさに酔うてしまつた。かうした名残をとめて源氏は歸洛した。かの尼君の所の姫君も少女心に美しい人よと思ふ。

「あの方のお子におなりなさる？」などいはれては、それもよいやうに考へられ、それからは人形遊びにも源氏の君などいうて遊ぶのであつた。

その頃藤壺は病を得て里に出てゐた。かうした折でなくては、源氏は夜になるに、宮へ行つては王命婦を責めて、さう／＼ある夜藤壺にあうたが、ほんに夢のやうにはかなかつた逢ふ瀬を源氏は物足りなく思つた。藤壺も空恐しい祕密におのゝきつゝも、なほ源氏を思ひ切りも出来ぬ心の弱さ。初夏の夜の明け易く、逢はぬにまさるつらさを感じて別れた罪の二人よ。宮へは帝から度々のお使が内裏へ歸るこゝを促されたが、その頃懷妊を知つて煩悶してゐる藤壺には思ひもよらぬこゝである。すべてを知れる王命婦は宿縁のあさましさを思ふ。藤壺はますます加はる寵遇にいよ／＼罪の重さを感じて自責の念に堪へぬ。

山の尼君は一旦病癒えて歸洛したが、ついでまた病氣が出てさう／＼果敢なくなつたので、かの姫君は父兵部卿宮へ行くこゝになつた。源氏はそれをきいてかくてはわが望をかなへる時は永久になくなると思つたので、その前夜惟光と一緒に、兵部卿宮が迎に來たやうを眞似て、泣く姫君を乳母少納言と共に車にのせて二條院へ迎へてしまつた。西の對をしつらはせて、そこを姫君の部屋さきめた。姫君は恐しさに聲を立て、もえ泣かぬ。夜が明けるに、東の

對から童女を呼びよせ面白い繪や、いろ／＼の玩具なきを取り寄せて偏に姫君の心を引くやうにしむける。かう近くで見れば今までよりも一段立ち優つて美しく感じる。

かしこへは兵部卿宮が迎へに行つたが、残つてゐる人達はたゞ、「少納言がここかへお連れ申しました」云ふばかりで要領を得ない。山の僧都へ尋ねても更に知れないので、宮はがつかりしてしまつた。

西の對にはだん／＼女房達も集つて来る。姫君も住み馴れて、源氏の留守なきには亡き祖母を慕うて泣けど、父宮のこころはも／＼馴れ親しんだこころもないのでさして思ひ出すこころもない。源氏にはすつかり親しんで、他所から歸れば出迎へたり、傍に居れば懐に入つたり、實の子でもさうはあるまいと思はれるやうである。

末摘花

左大臣家の正室さいひ、六條御息所さいひ、いづれも打解けず、用心深い所のある人達まで

さう思ひ返しても、懐しかりし夕顔の宿の忘れるひまもなく、伊豫介の妻のこころも思ひ出しては妬しく、その娘をも亦懐しく時々は思ふ。

こゝに左衛門の乳母——惟光の母の次なる——の女に大輔の命婦さいふがあつた。内裏に仕へてゐるのだが、母——今は筑前守に嫁して國にゐる——の縁で時々二條院へも来る。ある時話の序に、故常陸宮の老後の御女が佗しく残つてゐるこころをいへば、源氏は例によつて耳傾けてなほ詳しく問へば、

「御容貌やお心ばへなきよくは存じません。たいへん恥しがつて人にもお逢ひにならぬので、時々几帳ごしに御意を得るだけでございます。唯琴だけをこよない友としていらつしやいます」さいふ。

「私にもそれを聞かせてくれないか。お父様はお琴が上手でいらしたから、その方もお上手だらう」なきいうて「この頃の朧月に行くから、お前もその時は御所を下つていらつしやい。」十六夜の月の光の面白い夜、果して源氏は來た。姫君はまだ格子を下さずに、庭上の梅を眺

めてゐた時であつた。命婦のすゝめるまゝに琴を弄ぶ。さして上手はなれど、さすがに父宮の御後まで聞き悪くはない。なほも姫君の様を見ようぞ、朽ちた透垣の許に立ちよるぞ、我より先に人影がある。誰とも知られじと拔足に歩み退かうとするに、その人はつゝ寄つて「途中で私をまいておしまひになつた情なさにご、までお送り申しました。」といふのを見るに頭中將であつた。その夜は一緒に左大臣家へ行かれた。

その後お互に姫君を挑みかけるのだが、こちらへもふつに返事もない。源氏は命婦を責めに責める。命婦はかりそめの話から源氏がかく熱心になつたのを見て、お互のためによしなことをいひ出したものだと思ふ。

八月二十日過のこころである。星光淡く、松吹く風も心細いある夜、姫君は昔偲びて泣く。よき折にて命婦が消息したのか源氏はいさ忍んで來た。月漸々さし上つて籬も破もあらはに見えぬ。姫君はそゝのかされて琴を弾じ初めた。源氏は入つて命婦を呼び出して、今宵逢はせよといふ。物恥する姫君も無理にいひこしらへられて、隔の襖を閉めきつて、そこへ源氏を請じた。

源氏が物いひかければ、侍従といふ乳母子が姫君に代つてお答する。じれ切つた源氏は遂に間の襖を明けて入つた。人々はどうすることも出来ぬ。恥しさに固くなつた女、それにしても意外な女の姿。與さめ心持に、まだ夜深きに源氏は立ち歸つた。命婦も出ては面倒とそしらぬ風をして寝てゐた。

頭中將が來て一緒に参内したりして、常陸宮の姫君に消息を書いたのはもう夕方だつた。返事は例の侍従が教へて書かせる。古風な紙に雅味はないがしつかりした書風であつた。

朱雀院の行幸の日が近づいて、源氏も毎日舞樂の練習や何やで暇もない。切に思ふあたりへは格別、常陸宮へもすつと御無沙汰である。一日そこへ行つて見た。すべてが古風で堅苦しさは前と變らぬ。音なへば格子は明けてくれた。空寒く雪さへ降つて來て、折しも吹き込む風に灯火も消えてしまつたが、そをとす者もない。かの物凄かつた廢院の夜の追憶が甦る。あの時より、家も狭し、人氣もあるが、こにかく眠れぬ夜のさまである。嵐の夜も漸く明けた。源氏は自ら格子を明けて前栽の雪景色を見ながら、

「来て御覽なさい。なぜそんなに引つ込んでばかりいらつしやるのでせう」など怨む姿を雪明りに女房達は美しと見た。姫君も人々にすゝめられて膝行り出た。それとなしに見れば、これはまた何としたことぞ、醜きはその鼻である。さながら昔賢菩薩の乗物とやらに似て、尖が少し曲つて、赤く色づいた工合は情ない有様である。たゞ髪のみは外の誰のにも見劣りせず、袿の裾になほ一尺ばかり残つてゐる。それに衣服の古代さ、殊に上にはおつた貂の皮衣。源氏はあまりのあさましさに急いで歸らうとして、歌をよみかけたが、たゞウフ、と笑うて口重げな様子 of 氣の毒さにそこを早く立ち去つた。そしてつれづれなひまに、

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん
など手習のはしに書きつけた。

かくて年も改る。二條の姫君——紫上といふ——はますます美しくなつて来る。こんな人を捨て置いて、なぜあんな醜い人に暫しでも心を寄せてゐたのだらうなど思ふ、そして一緒に遊遊などしてゐたが、やがて紫上は繪を描いて彩色しはじめたので、源氏もその傍に髪 of 長い

女を描いて鼻を赤く色どつて見る。繪ながら見苦しい容貌である。

「私がもしこんなになつたらどうでせう」さういひつゝ紅粉をわが鼻につけて笑ふ。

「まあいやだわ」と、でも、染みつかないだらうかと危む様も可憐である。そつと拭ふまねして、

「どうしてもおちませんよ」といへば、まことかと、紙に水をつけて幼げな手つきでおし拭うてあげる様の美しさ。ほんに似合の御夫婦のやうである。南階の下の紅梅、いと疾く咲く花でもう咲きそめた。

紅葉賀

十月十日すぎには朱雀院に行幸して先帝のために紅葉賀を行はれることゝきまつた。今年 of 行幸は例年のよりも面白かりさうなのを、後宮の方々は御覽になれぬのを残念に思ふ。帝は藤壺の爲めに御前で試樂を行はれた。源氏は青海波を舞ふ。相手は頭中將だつたが、かう竝んで

見るに、花の傍の深山木の観がある。帝を始め参列の人達も一同に感涙を催す。弘徽殿はそのめでたきにつけ不興さを蔽ふことも出来ず、藤壺はあゝしたことがなかつたら、どんなにか面白からうと夢心地に思ふ。その翌朝、源氏は藤壺が自分の舞をどう見られたことかと、消息に添へて、

物思ふに立ちまふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや
と書き送つた返事に、

唐人の袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き
とあつたのを、經卷を持つた様に大事さうに擴げて見てゐる。

行幸の日を東宮はじめ皇子達も皆お出ましになつて、池には例の樂船など泛べ、樂の聲・鼓の音に唐樂・高麗樂種々の舞も行はれた。木高い紅葉の蔭に微妙な笛の音が起る。と、淡く濃く染められた木葉が風のまに／＼吹き散る中から青海波の舞人がゆるぎ出た様の輝かしさ。挿頭の紅葉も御顔の艶さに氣壓さる心持されるので、後見の左大臣が御前の菊を折つて挿しかへる。

折しも暮れ方の空のはらく、時雨れかゝる空も、似る者ない姿を偲び顔である。今日の源氏の舞ぶりのまた立ち優つてゐたこと、人の世のものとも思はれぬいみじさであつた。その夜それ／＼加階の御沙汰があつて、源氏は正三位に、頭中將は正四位下に叙せられた。

その頃藤壺はまた里に下つてゐたので、源氏はさうかして逢ふ折もあれかし／＼かゝひあるいてゐる。それに二條の紫上のことにも左大臣家にきこえたので、葵上——これが左大臣家なる源氏の正室である——は近頃かれ／＼になつた夫の上に嫉ましさがいやますのであつた。でもそれ／＼打ち明けては怨みもせぬのを源氏も何だか物足りなく、自然こちらへはよそ／＼しくなつてゆくのである。

紫上は日にまし身も心も立派に成人される。源氏は誰にも當分知らすまいと思つて、秘めに秘めておく。父宮も御存じはなかつたが、かの僧都だけは仄聞いて、怪しきは思へき嬉しき思ふのであつた。少納言は思はずもめでたい世にも逢ふことよ、これも故尼君の姫君の行末を祈りおいた願ひ思ふものゝ、葵上の方の關係から後にうるさい事が起らねばよい氣遣はれる。

かくて年もかへつて、源氏は十八の春を迎へた。葵上との間は例のやうである。左大臣はそのこゝを欺けば帝も折々は源氏を戒め給ふ時もあった。

十二月に豫定された藤壺のお産はそのあくる年をこして二月の中旬に皇子降誕の慶事があつた。四月に皇子の初参内がある。源氏に生き寫しの面もちを、さる祕密のある事を知られない帝は世にも類なき者同志は自然に似通ふものだらうと思召される。藤壺はさすがに覚えあれば安からぬ物思に沈む。源氏も色變るほぎ驚かれたが、二月目位でもうに、こゝする若宮の美しさに、何こなう可愛らしく覺えるのであつた。

その頃ゐた典侍、年老いて自分もよく、氣も利いて、評判もよい人だつたが、ひびく軽々しく浮名をよく立てられるのであつた。そんなに年寄るまで、何であゝ浮氣がやまないのだらうなと思ひつゝ、源氏もその老内侍に戯言たがひごとな言ひひかけるのを、女はまた不似合なこゝ、は思はなかつた。惘れたこゝ、思ひながら時々あうてゐられたが、さすがに人間を憚つてこたえ勝たぬ女はつらいこゝ、思つてゐる。ある日内侍は帝の御髪上をすまして一人ゐた時、源氏は常よ

りも美しく装束してゐる女の後から裳をひいて驚かして見た。するに、女は大へん派手な顔で顔をさし隠して見返つた目もこにも深く刻まれた老の影を醸し、源氏は見るのであつた。かゝつた所を障子の隙から覗き見て、不似合な間柄よきをかしく思召した。

その後のある夕立の名残も涼しい宵である。歩むこもなく温明殿の邊をあちこち歩いてゐた源氏は、ふに催馬樂の「瓜作り」を諺ひつゝ、ひく琵琶の音を耳にした。きけばあの内侍である。「東屋」を小聲で諺へば、内から「おし開いて來ませ、われや人妻」を聲を合せる。すぐ立ち去らうと思つたが、それではあまりに女が氣の毒で、つゞ室へ入つた。頭中將は常にわが不品行をかれこれ忠告めかして批難する源氏の祕密をさうかして發いてやらうと思つて居た矢先き、かうした現場も見届けたのでうれしく思つて、夜もや、更け行く頃、そつゝ内侍の寢所へ行つた所が、源氏はふにその音をき、つけて中將は思ひもよらず、あはて、屏風の後にかくれた。中將はわれを知られじ、無言のまゝ、怒つた風に太刀を引抜けば女は手を合せて「さうぞ〜」と詫びる様子の可笑さ。源氏はよく見るに頭中將なので、馬鹿々々しくなつて、刀

を持つてゐる腕を烈しくつめつたので、泳へられずに噴飯してしまつた。

翌日は二人も殿上に伺候する。昨夜の事なき忘れてしまつた風に源氏は端正な態度を保つてゐる。人のゐない折に中將は

「祕密の好色はお懲りでせうね」

「そんなこゝごがありますか。でもあれは内證ですよ」なきそつこ耳うち交す。その後は何うかする度に、中將があゝの夜のこゝごをいひ出しては嘲弄ふので、わが軽々しさが後悔されるのであつた。内侍はなほうるさくつきまこふが、源氏は困つて避け歩く。

七月に藤壺女御立後の儀があるにつけ、源氏は參議に任せられる。こいふのは帝は御讓位の後は藤壺のお生みの皇子を東宮に召すので、それにしてもしつかりした外戚のない新東宮のために生母を動かし難い地位におかうこいふ叡慮に出たこゝごである。

「東宮の御生母で内後二十年にもなる弘徽殿女御をこえて、藤壺女御をその上にお立てになるのはなるほごをかしなこゝごだ」なき世間では風評し合ふ。

若宮は成長し給ふまゝにいよいよ源氏に似て來るのを藤壺は心苦しく思へどそれに氣づく者もない、后腹なるが上に、かゞやく若宮までゐますことゝて藤壺に對する百官の心寄せは重い。

花 宴

二月二十日過に南殿で花宴を催されて、中宮と東宮との御座が玉座の左右に設けられる。弘徽殿女御も不快の心をおし包んで列席する。空麗かに晴れて、空の氣色、鳥の音も快い春である。親王以下文才のある人達は韻を賜つて詩作に耽る。源氏は春さいふ字を賜つた。舞樂も行はれたが、日も山に春く頃に春鶯囀が奏せられた。東宮は去年の紅葉賀の折を思ひ出して、挿頭を賜うて切にお勧めになるので、辭みかねて末の一節を舞うたが、そのめでたさ譬ふる方もない。頭中將も促された柳花苑を、豫めかうした仰せもあらうかこ用意して來たものが面白く舞ひをさめた。それから人々入り亂れて舞うたけれぎ、夜に入つて巧拙も明に判り得なかつた。詩の披講なきがあつて、宴のはてたのはもう夜もいたく更けた頃である。宴の中にも中宮は源

氏の姿に目がみめられて、弘徽殿があれほぎまでに憎むわけが不審に堪へぬにつけ、わが心が忘れかねるのもつらいことだと思ひかへされるのであつた。

人々が退散してしまふと、あたりはひつそり静つて二十日すぎの月が朧にさし出たこの良夜を寝るには惜しくて、源氏は酔心地に、こんな時こそ思ひもよらぬ隙こそ藤壺のあたりを歩みまはるけれぎ、きこの戸も皆鎖しこめられてゐる。うち歎きつゝ、もしよい事があらうか。弘徽殿のお廊下に立ち寄つて見るに、その三の口が開いてゐる。女御は上にお宿直で人少な様子である。源氏はそつと室内へ入つて様子を窺ふ。皆もう寝てしまつたと思ひ込んで、した御殿の中で、普通の人とは思はれぬ若い聲で

おほろ月夜に似るものぞなき

三口誦みつゝ、こちらへ歩み来るやうである。うれしくて、ふと袖を捉へる。女は恐しと思ふ風情で

「まあ氣味が悪い。誰方？」といへば、

「さうお疎みなさるな」といひつゝ、靜に抱き下して戸を閉ぢた。恐怖にわなゝく、

「こゝに人が……」といへば、

「私は皆に許された者ですもの、誰を呼んだつてだめですよ。まあぢつとしていらつしやい」といふ聲に源氏に聞き知つて落ちついた。あわたゞしく明けゆく空に思ひ亂れし女の様。源氏はその名をきへぎ、こたへぬ中に、局の人達が起き出る様子なので、せん方なく扇だけを後の證據にこりかへて歸つた。

朝早く歸り來た源氏を見て、もう目をさましてゐた桐壺の人達は

「絶間ないお忍びだこゝ」なまひ合ひつゝ、空寢をしてゐる。源氏はわが室へ歸つても、昨夜のこゝが心頭を去來する。弘徽殿の妹だらうが、まだ世馴れてゐないところを見るに五の君か六の君だらう、六の君は東宮妃におなりになるといふ話だが、もしその人だつたら氣の毒だ。あのまゝ絶えてしまはうとも思つてゐない様だつたのに、文通のてだても教へておかなかつたことは我ながら手落だつたなき、あれこれを思ふ。その日は觀櫻の後宴で心もまぎれた。宴が

すめばあの女は退出してしまふだらうと思へば氣がもめて、惟光・良清の二人をつけて様子を窺はせておくに、御前から下つて来た所へ来て

「今、朔平門から車が澤山出てまゐりますが、そのお見送りの中に女御様の弟御様達も見えましたが、たしかにその方から御退りの車のやうでござります。三輛ほど立派な車がござりました」といふ。あの女もきつこその中にあるのだと思へば、何か胸さわぎがする様である。あのさりかへて来た扇は色の濃い方へ金泥で月を描いて下の水に影をうつした有りふれた繪様ながら何もなくつかしく思はれて、

世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて
書きつけておいた。

葵上の所へも大分行かなかつたこは思へぎ、あの紫上の可憐な姿がまづ偲ばれて、まづ二條へ、それから左大臣家へ行つて管絃なご遊ぶ。

あの朧月夜の君は、かの淡かりし歡會の夢を追うても思ふこごが多い。春宮へはこの四月

頃こ内定されてゐるので、千々に思ひ亂れる。源氏も、消息しようこ思うても、五の君か六の君か、判然しない上に、我を惡むこご深い弘徽殿の一族に縁を結ぶも面白くないなど思つてゐた。

三月の末に右大臣家で藤花宴が催された。源氏は行かずに居たが、わざこ四位少將を使として招かれたので、日暮頃に行く。皆はものくしい束帶姿の中に只一人櫻の直衣に葡萄染の下襲の裾を長くひいた皇子姿に、花の色も氣壓されけである。や、更けゆく頃酔ひしれた風で宴席をそこはづした源氏は寢殿の方へ行つた。そこの東口に近く藤はあるので、人々は格子をあけて袖口なき色めかしく簾の上に出してゐる。そこへ寄つて、あの女もこごに思つて、心をきめかせつ、それでもこほけた聲で、

扇をこられてからきめを見る

こ催馬樂の「石川」にここよせて物に寄りつ、諂へば

「まあ、風變りの高麗人よ」なきいふ女達の中に頻りにため息をつく人のあるのを、それよこ

心あてに几帳ごしに手を捉へてものいひかければ、かすかにいらへた聲は正しくあの夜の君であつた。

葵

桐壺帝御位を東宮朱雀院に譲り給うてから、源氏は物憂く思ふこと多い。東宮には藤壺のお産みの若宮がお立ちになつたので、源氏はその後見をする様になり、大將に任せられた。それやこれやで、今までのやうに軽々しい微行も慎まれて、ために六條邊りをはじめ物思ひに沈む女達も多かつた。御代替りの例として伊勢の齋宮・加茂の齋院が更つて、六條御息所の姫宮は前者に、弘徽殿の三宮は後者に治定された。御息所は源氏の情なさを怨んで姫宮のいわけなさに托言^{たくごん}けて共に伊勢に下らうかなと思ふ。かうしたことを聞くにつけ、朝顔の姫君——嘗て源氏の戀を拒け、今猶ほ拒みこぼしてゐる——は、その轍を踏まぬやう一層疎々しくもてなし、たまに返す消息にも當りさはりのない文を書いてゐた。

葵上はその中に身重な體になつたので、氣の毒なほご惱みがちである。源氏は珍しく哀ご思つて嬉しくはあるもの、又氣づかはしく、種々ご安産の祈禱なごせられる。

かうした中に齋院の御禊の日が近づく。當日は御供の上達部達も綺羅を飾つて奉仕する。殊に源氏も特に宣旨によつて供奉の列に加はるごこち、なつてゐる。當日の一條の大路の雑沓は甚しいものである。葵上はかうした物見には出た事はないのだが、若い女房達に無理に勧められて、仕方なしに日がたけてから目立たぬ行装を整へて行く。もう物見の車が一ぱいで、ごこにも立てるべき所もない。車添の雜人ごもの居ない車をおし退けてわが車を立てやうとする。さうしておし退けやうごした中にやゝ古びた網代車の下簾の様なご由ありけなのが二輛あつた。甚く忍んだ風で、鮮かな袖口・裳の裾、さては童女の汗疹なご微かに見えて、よき人の忍び姿に窺れて來てゐるのだごはそれご知れる。その車添の者が

「これはさう容易く差しのけるべき車ではない」ご云ふのを、やがて車の主を六條御息所ご知つた若者は

「さう威張らすな、大將様の後楯を頼んでゐるのだらう」なきいひながら亂暴にも押し退けてしまつた。御息所はよしない物見に来て恥を見たことよき歸らうとすれど、立ちこめた車に曳き出す術もない。彼此する中に行列は近づいて来る。かうした恥辱の中にもわれに情なき人の渡るのも心待ちに待たれるこいふのもさすがに弱い女心である。かうした争を後に聞いた源氏は六條へ行つて御息所を慰めやうとしたが齋宮のこゝに言よせて對面はなかつた。

祭の當日は源氏は紫上と同乗して物見に行つた。姫はもう十四五になつたので、髪を出して髪を結ぶ。

はかりなき千尋の底のみるふさの生ひゆく先はわれのみぞ見ん

なき詠じて、さて同車して馬場の御殿の邊に思つて行つて見るに、もう立錐の餘地もないまゝで立てこんでゐる。さうしように困り果てゝゐる所へ、人多く乗りこほれてゐる女車から扇を出して、場所を譲らうとこいふ。誰だらうと思つてゐるに、女が扇の端を折つて差し出したのを見るに、あの老典侍の手で

はかなしや人のかざせる葵ゆゑ神のしるしの今日を待ちける
こあるので、

挿頭しける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

さ返したのを女は恥しと思つた。

御息所は車争の日から更に物思ひ亂るゝ事多く、源氏はなれて下らうとするにも、さすがに心細く、さりこめて留つてゐるやうにするに、あんなに皆から辱しめられのが心外で、みつおいつ、心も宙に浮動するやうに悩ましう思つてゐる。

葵上は物怪に苦しめられるやうなので、源氏も時々見舞ふ。懐妊中のこゝに、殊に修法なき厳しく行はず。死靈や生靈やいろ／＼出て名乗る中に、さうしても他にはつかず、ひきく悩ますはなけれど、寸時も離れないものが一つある。おしなべての物怪ではないに驗者達も困じてゐる。葵上はさめ／＼泣いて時々胸に塞ぎ上げては堪へられぬさまに身を悶へる。

六條御息所も氣分がすぐれないので齋宮と同宿を避けて他所へ移つて祈禱なきしてゐるに

いて源氏はそこへ訪ねていろいろ歎談したのに心も解けてやはり伊勢へ下るのはよさうかなき思ふ。

袖ぬる、戀路さかつは知りながら下り立つ田子の自らぞうき

なき暫く源氏の音信がたえれば詠まれる。ある夜なきは、葵上と思はれる人の所へ行つて、そこら中をひつかきまはし、恨み晴さではこいふやうな心持でその人に掴みかゝらうとする夢を見て、それから幾度も同じ夢を見たので、思ふに任せぬはわが心である、この身をすて、魂が浮れ出たのかみそら恐しく感じられた。

葵上は急に産氣づいたので祈禱を一層厳しく修する。例の怨靈だけさうしても離れない。しかし激しい調伏に葵上は苦しげに泣きわびて「大將殿をお呼び下さい」と云ふ。源氏は几帳の中に入り、葵上の手を取つて

「さうしたらいい、私でせう。ほんきに辛いめをお見せになる」なきいへば、けだるさうな目でちつと源氏を見おこす女君の涙に溢れた顔、衰れを催させずにはおかぬ風である。何か慰め

る源氏の語に

「いえ、たゞあまりに調ぜられる苦しさに、暫し祈禱をやめさせようたためにおいでを願うたのでござります。ほんきに物思ふ人の魂は身を離れるものでござりますね」泣く聲は六條御息所であつた。あさましいこころよき源氏は思ふ。

間もなくお産があつた。若君である。左大臣をはじめ源氏の歡びはたゞへ方もない。御息所はこのこころを傳へ聞いて面白くはない。「われながら怪しの心や」思ふに、衣も芥子の香に染んでゐる。「我身ながら愛想もつきるのに、まして人は何ぞ思ふだらう」思ひつゝ、人にいふべき事でもないから心一つに秘めておく。

折から秋の定例叙任の日にて、左大臣も源氏も参内してゐる留守に、葵上の容態は急變して遂に敢なくなつてしまつた。急を聞いて人々が宮中を退下して來た時はもう絆切れた後だつた。前にも物怪のため氣絶したこころもあつたので、もしや三日までおいたが、蘇生すべくもないので、涙の中に鳥邊野におくる。いつか親しくなるだらうと思つてゐたのに、なぜかう疎しく

しただらうと源氏は思ふ。若君を見るにつけ、まじした形見もなかつたらさ、せめてもの慰安にしてゐる。母宮は泣き沈んだまゝ、病床に臥すのを人々はまた騒いで祈なごする。かうした混雜にまぎれて源氏は二條へも還らず、一向佛事に専念してゐる。七々日は左大臣家に淋しく籠つてゐる。そのつれづれを慰める者は例の中將である。

さうした悲みの中にも中陰も過ぎたので、源氏は院の御所へ行つて、更に藤壺をも久しぶりに訪ねた。無紋の袍に鈍色の下襲、冠の纓を卷いた喪装、また一しほの艶しさである。

二條院へ歸つて西對の紫上を見る。久しく見ない中に大人びたのをうれしと思ふ。

「お別れしてゐた中のお話をゆつくりしたいのですが、忌々しい事なんですから今日はあちらで休んで又参りませう。これからは始中終お傍にゐるから、却ていやがられるかもしれませんがね」なごいふ。かうした中にまだ離遊びに餘念ないやうな紫上もだん／＼女になつてゆく。三日の夜の祝の餅は例の惟光が奉仕した。少納言は源氏の頼しい心ばへを有りがたく思ふ。

今は御匣殿になつた朧月夜の君は、源氏にのみ心ひかれてゐるのを父右大臣は丁度葵上も死

んだこゝろ、この縁談を纏めてもと思ふのだが、弘徽殿は飽くまでも宮仕を主張する。源氏も他の女の同列には思はないのだが今は紫上より外の事には心をむける餘裕もない。

悲しい、そして嬉しい年は暮れた。元旦に禁裡春宮なごに参賀して、さて左大臣家へ行つて見るに、こゝはまた新年さはいへ陰惨の氣に満ちてゐる所へ、源氏の入り来るに更に涙が新になつて堪へられない。若君はよく成育して、もう笑ふやうになつてゐる。目元口つき、たゞ東宮そのまゝである。室内の調度なごは昔のまほり、たゞ衣架にわがご竝んで女の装束のないのが目立つて淋しい。母宮は源氏に恒例の装束を一襲を贈るのも涙である。

新しき年をもいはずふるものはふりぬる人の涙なりけり

これは母宮の詠である。

神

齋宮の下向が近づくに従うて六條御息所は何もなく心細く思ふ。葵上の死後は、御息所こゝ

時めくこと、我も人も思うてゐるが、さうしたことのありやうもない。齋宮に親がついて下る例はないけれど、年はもゆかぬ宮を唯一人伊勢へやるのは氣の毒だといふ口實の下にいよく下る決心をきめた。

源氏は思はぬではないが、折から院が御不例で、時々お悩みになるので、度々訪ねることもえしない。その中にだん／＼齋宮下向の日は近づく。九月七日頃である。遠く野路を分けて嵯峨の野の宮へ源氏は御息所を訪ふ。秋草の花も色衰へて、枯れ／＼の淺茅が原、かほそい蟲の音に松風凄く吹き合せて、その音も聞き分かぬ程に樂の音が、だ／＼聞えてくるのもあはれ深き野の様である。かうした趣ある所を何故今までに通ひ來なかつたことか、源氏は思ふ。それにしてもはかなげな野の宮の様よ。結びまはせる圍の小柴垣も粗笨まぼに、板葺の假屋めいたものがそこ／＼に立ち竝んで、黒木の鳥居が神さびてゐる。北の對でおして御息所に逢うて下向を思ひこまるやうにすゝめて見た。御息所もさすがに逢へば女の心弱く涙頻りに催されて、今までの怨も忘れて決心も鈍りさうになつて來る。夜一夜語り明して歸る。歸りの道も、袂も

露けき朝である。

いよくその日が來た。帝に御暇乞のため齋宮は參内される。帝はその美しい御装に今更ながら愛戀の御心も動くのだが、已むを得ず別れの櫛をお授けになる。齋宮は今年十四になる。母君も同道していよく遠く伊勢路に下つてゆく。

十月になつて院はますます御重態におなりになる。帝も宸襟を惱まし給うて、行幸になつた。院はかへす／＼東宮のこゝ、源氏のこゝを御遺言になる。さうかうしてゐる中、遂に院は崩御になる。院におはすまゝに萬機を親してゐる給うたこゝ、て、天下は恰も闇夜に燈火を失うたやうに悲み惑ふのであつた。かうした悲みの中に年も改つた。

二月には朧月夜は尙侍になつて、今は里がちなる姉太后のゐられた弘徽殿にゐる帝の寵を集めてゐる。例のくせから源氏は却て甚深く祕密な文通なごは絶えなかつた。左大臣家なる若君もだん／＼成長する。二條院の紫上もいやましに幸福の日を送るのを父宮は嬉しいこゝに思ふ。たゞ繼母北の方はさうした事を聞いて一人いやな氣がした。

院の喪に居て齋院はかばつて、あの朝顔の姫君が代つた。孫王が立つ例はないのだが、他に人がなかつたので、異例である。院の崩御の後、帝は御遺誠を忘れ給ふことはなけれご、外戚の威におされて、源氏はすつかり勢力を失墜してしまつた。

藤壺中宮は東宮の事も氣になるので、参内もしたいと思つても、何ごなく氣怯がしてそれも臆劫である。頼む人ごてもないまゝに源氏を力ごするのだが、その人はかの困つた心が直らない。院がこの祕密を知らずに崩御になつたのさへ空怖しいのに、今更さうした噂が立つたら我身は犯せる罪の報ごしても東宮の爲めにおいごしいごごご、思つて祈禱までして源氏の仇し心をこめる様苦心し、なるだけ遁れてゐたのにごごした隙があつたか、源氏は三條宮へ来て人知れず中宮の御座所へ近づいた。宮は餘りの淺まごさに氣を取り失つてしまつた。人々が騒ぎ近づくと、我にもあらず塗籠の中へ隠れてゐる。加持の僧召せなご言ひ罵る中、御惱もおいついて人々も歸つて日は暮れかゝる。

「大そう胸が苦しい。もう私の命數もつきるのだらうか」なご言ひつゝ、外を眺め出してゐる横

顔いた／＼しいまで日頃の苦惱の佛が見える。頭つき、髪具合なご紫上によく似てゐるご、塗籠を出て屏風の間からこちらへ出た源氏は思ふ／＼、ふご寄り添へば、中宮は恐しさに俯伏してしまつた。かくて惱しい一夜は明けた。中宮はこんなごごから出家の決心をして、せめて東宮を一目見てからご思つて忍びやかに参内した。

「暫くお目に懸りませぬ中に、もし私の姿が變つたらご思召すごごごでせう。」かう言ふご、ぢつご母宮のお顔を見ていらしつた東宮は笑つて、

「式部のやうに？ 何でそんなにお變りでせう」

「いえ、あれは年寄つたからでござります。あゝでなしに、髪も短かく黒い衣を着ますご、お目にかゝるごごも今よりは遠くなりませう。」

「暫くお逢ひしないごあんなに戀しいのに」ご眞面目に仰つてお目も濕うるんで來るのを、中宮も涙ながら懐しご思ふ。

源氏も暫く紫野雲林院に生母桐壺更衣の兄律師を訪ねて滞留したが、歸京して久しぶりで参

内して藤壺へ伺候しようとして二十日の月影を踏んで行くに、弘徽殿の兄の子頭辨が妹麗景殿の方へ行かうとて、それを知つて

白虹日を貫けり。太子畏ちたり。

さいふ句を長々し諡ふ。無禮は思へき、源氏も大勢の我に非なるを思つて慄然たらざるを得なかつた。

中宮は十一月の初旬の故院の御一周忌からひきつゞいて十二月中旬に御父なる先々帝御母なる后、並に故院の御ために八講を行はうと思ふ。そしてその果の日に出離の旨を發表したので満座の人々は驚いてすゝり泣きの音があちこちに聞えた。源氏は二條院へ歸つて一間に籠つてつくづくさあぢきなき世を思ふ。

諒闇もはて世の中華になりゆけき、源氏及左大臣の一族の上に投ぜられた暗い陰影は取り去るに由もなく、左大臣は致仕の表を奉り、三位中將も右大臣の掣ははいへ、これも司召には洩れて世は右大臣の意のまゝである。

夏の頃である。臘月夜尙侍は瘧を病うてゆつくり療養しようとして里に下つた。祈禱、禁厭なきの力で平癒したのを皆はうれしいことに思ふ。源氏はかうした折をうかゞうて強ひて對面するこゝも度重なつた。ある曉雷鳴はけしく、俄に雨がひきく降り出し、人々が立ち騒ぐので、源氏は几帳のかけにかくれてゐる。雨も小止みになつた頃右大臣が見舞に來た。やをら膝行り出た尙侍の衣にまつはり出た帯の二藍よ。そして几帳の邊におち散れる手習なきした疊紙よ。右大臣は取り上げた疊紙を持つて、折ふし里に居た弘徽殿にそのことを告げる。大后の激怒は譬へん方もなく、言ひ出した右大臣も持て煩うたぐらゐだつた。自分等がかう離れもゐないのに源氏が忍び通うたことを非常な侮辱を感じて、この際に然るべき策を講じて、源氏を朝廷から葬つてしまはうと決心するのであつた。

花 散 里

自ら求めてする苦みの外に、今は一般の世情我に非なるにつけ出離の志はありながら、さて

こなれば流石に心にかゝるこも多くて、源氏は心細い時を送る日が多かつた。

こゝに故院の後宮に麗景殿女御といふがあつた。お腹の宮もなく、院崩御の後には、源氏の庇護の下に淋しく暮してゐた。妹三の君と源氏は曾て宮中ではかない契を結んでから、見棄てることはないが、特に愛を注ぐこともなかつたが、この頃あらゆる世の辛酸を味ふに共に、かうした女達のこととも思はれて、五月雨の珍しく霽れた雲間に、かの三の君を訪ねる。

前驅なきもない微行である。中川の邊を通つた時、風流な小家から面白い琴の音がもれる。思へば唯一度通うた宿なので、覺束なく思ひながら懐しさに惟光をして折しも音なうた郭公によせ歌を贈つたが、はかしくしい反響もないのを源氏は近頃のわが境遇に思ひ比べて、女のかうした態度をしかたがないに淋しく諦めて、三の君の許へ行つた。

推量通りそこは人少なに心細けに住んでゐた。女御の許で物語なきする中に二十日の月もさし上つた。縁近い橘の香が昔偲ばせて漂ふ。故院を思ふ涙に浸つてゐるこ、また郭公が鳴く。

橘の香をなつかしみほこぎす花ちる里をたづねてぞこふ

なき低吟しては、この女御のしほたれて住む様を、久しく訪れなかつたのがしみくくと後悔される。

三の君の方へ行つては、わざとらしくもなく忍びやかにうち覗いて見る。かうした源氏のめでたさには久しき途絶えのつらさも忘られるこであらう。いろくこまやかな物語のあるのも單な氣休めのみではあるまい。源氏が通ふ女達は普通の分際ではないからだらうが、いづれも一かきある人達だから、お互に憎けもなく情を通はし通ふのだが、さも思はぬ女はあの郭公の垣根の女のやうにふつこ絶えてしまふのであつた。

須 磨

世上の風雲は日に急で、萬事我に非であるこ見た源氏は、いつそ愚になつて知らず顔に過さうこは思つたが、さうしてゐる中にも、なほ形勢は悪化しさうに見えたので、今の中に此方から身をひくに如くはないこ決心した。で彼處此處こ落ち行く先を考へて須磨を物色し得た。そ

こは昔こそ人の住家もあつたれ、今は人里離れて凄じく、海人の家さへ稀々だき聞いては、さうした所がおちつきがあつて却つてよからう、それに都からも程近いからと思ふ。かう決心して見るこ、さて萬感交々胸に迫つて来る。世は憂きものと思ひ諦めてはゐるもの、いざこなれば千々に物思はれる。紫上のここ、花散里のここ、さては藤壺中宮のここなぎ、それからそれへその心頭を去來する。

かくて二月二十日すぎにいよく門出まきまつて、唯近う仕へ馴れた七八人のみを供して誰にも出發の時を知らせず、忍びやかに都門を出てゆく。

その二三日前に左大臣家へ女車に變して行く。若君の乳母、さては葵上の頃から居残つてゐる女房達は珍しがり集つて、かう悲運に沈んだ源氏を涙を以て迎へる。若君は美しく生ひ立つて、いよく走つて来る。大臣にも、面會して昔今の物語をしてその夜はそこに一泊した。

翌朝まだきに起き出で見るこ、盛は過ぎてなほ咲き残れる花の木の下、そこはかきなく霧りわたつて、あはれは秋の夜にも勝つてゐる、月光を浴びて物思ひに沈みつ、歸る艶な風姿には

虎狼さへも哭すであらう。初冠以來見馴れてゐたその人が、今はたかうしたおち目になつたのを人々は痛々しく思ふ。

二條院へ歸れば、侍所の人達も各々私の別を惜むために出たのか人もない。西の對へ行つて見るこ、昨夜は睡らずに涙に浸つてゐたこ見えて格子も下してない。

「あなたが都をお去りにならなければならぬやうな辛い世になつたこは、まあさうしたこでせう。」こんなこを紫上はいふ。父宮も近頃は世間を憚つて手紙さへよこさず、繼母は繼母で悪態をついてゐるのであつた。

「それは私も辛い、今はこれも前世の因縁を諦めてゐる。不幸にも私の運が開けない曉にはあなたを須磨へでもこへでもお呼びしよう。この際あなたを伴れてゆくこなるこ、こんな大事が起るかもしれません」なき、源氏も不憫と思つていひ慰めてゐる。かれこれする所へ、弟帥宮や三位中將なきが来た。位無き人はさて源氏は無文の直衣姿で逢ふ。髪を梳るこ鏡に向へば、面瘡せた我影に驚かれる。

その夜更けてから花散里に別れを告げんきてゆく。池廣く木立ものたれる庭の様、住み離れやうとする須磨もこんな淋しい所だらうかき、そんな事が思はれる。あはれに語らふ中に明方近くなつたので急いでそこを辭した。

さて世に阿附せぬ限りの人々の中から須磨へ伴ふ人数、留つて二條院に奉仕すべき人数を選び定め、彼處へ持つて行くべきものもなるべく手輕に、書物など入れた匣一つと琴一張だけを持つてゆくこゝし、立派な調度や花やかな衣服などは皆残しておくこゝにした。所領の莊園牧場をはじめ所々の地券などはこれを皆紫上に渡して、さて準備は略整つた。朧月夜藤壺にもそれ／＼別を惜み、出發の前日故院の山陵に謁しては、御在世の折のこゝが偲ばれた。あれほご院が遺しおかれた御言葉も崩後にはもう何の價値もなく踏み躪られてしまふ。陵前に平伏して拜んでゐた時、故院のお姿があり／＼とお見えになつた時には全身に水を浴せられたやうに思ふ。明方に二條に歸つて東宮に御消息して別れを告げた。

一日しめやかに語り暮して、月出る頃に二條を立つ旅装をこゝのへて

「月も出ましたね。せめてもつゝ端近くまで、も送つて下さい。もうあなたに話すことが積つても、お話することも出来なくなるのですね。一日二日お別れしてゐても不思議に滅入るやうな氣持になるのだに……な」どいひながら簾をまき上げる。道すがら紫上の俤が目の前に立ち添うて胸も塞がる心持で、舟に上つて、やがて須磨に着いた。

住むべき所は、昔行平が謫居の近くである。海岸から少し離れて、哀れに淋しい山の中である。垣の結び様からして珍しい。萱屋、葦葺ける廊など面白く建て、ある。所相應の家の様、かうした折でなかつたらどんなにか面白く眺められただらう。泉水や木立など手を入れて暫しの住むに設備ひなほした。國司は嘗て源氏の家に奉仕してゐた男なので、密かに何かと心を付けてゐた。

須磨の謫居におちついた頃に梅雨の節に入つて、京の事が走馬燈のやうにあれこれ頭に浮んで来る。京なる女達へ消息が飛ぶ。紫上へ、藤壺へ、朧月夜へ、及びその他へ。京ではこれを得て思ひ亂れる人達が多かつた。二條からは旅先での夜の物、直衣・指貫など新調して送るに

つけてもさても今までと變りはたお召物などを見るにつけ、源氏のありし姿がつと儼に添うて、いと戀しう思はれる。死別といへば、そこに一種の諦めも湧かう、須磨といへば近いとは、いつと期限のない別居であると思へばその悲しさはとどめ得ぬのである。

藤壺からも、朧月夜からも、紫上はいふも更なり、左大臣家からも消息が來た。伊勢の御息所からは白い唐紙四五枚に筆蹟も美しく書いて來た。

朧月夜尙侍はあの事以來參内もえせずにおたが、大臣は愛娘のために太后に説き、帝にも個願して、七月になつて再び入内する。ある夜御樂遊の序に帝は尙侍に、

「あの人が居なくなつたのは淋しい。院の御遺言に違つた私だ、罪を得るだらう」と仰しやつて涙にお咽びになつた。

須磨ではいとゞ物思はする秋風が吹き荒んで、浦吹く風に浪は荒れ狂ひ、夜に入ればまことに近く聞えて比もなく悲しい。御前に侍る人もなく、皆眠りにおちてゐる中に、たゞ一人目ざめてこの浪音に耳傾ける源氏の心は一向に寂寥を感ずる。琴を弾じると、あたりの寂寥を破つ

て凄絶、弾きさして中止する。その音に目ざめた人々も思はず貰ひ泣きをした。

前裁の花色々に咲き亂れて面白いある夕、沖見やられる廊に出てゆるやかに「釋迦牟尼佛弟子」と名乗つて經文を誦しつゝ、はふりおつる涙をかき拂うてゐる手つき黒い珠數に映じて艶に美しい。人々歌よみなどしてゐる折しも華かにさし出た月を見て、今宵は十五夜だと思ふにつけ宮中の御遊も戀しく、都でも人々は自分を思うて悵然たることゝ思ふ／＼、白樂天の詩句

三五夜中新月色。二千里外故人心。

を朗詠して、よゝと泣き入る。そしてやがて菅公の、

恩賜御衣今在茲、捧持毎日拜餘香。

と誦しつゝ寢所へ入る。

その頃太宰大貳が任滿ちて歸洛したが、眷屬も多く殊に女も大勢だつたので、北の方は舟で岸傳にあちこちの景色を賞でつゝ須磨に來かゝつた。よそよりは殊に目止るこの浦の景色の上に、今は源氏が謫居してゐることゝ何となく心も改るやうに感じられる。中にも五節の君は

嘗て源氏に逢うた夜のことと思はれてなつかしんでゐるさ、風のまに／＼漂ひ來る琴の音に、場所柄さういひ、人の境遇といひ、樂の音といひ、種々の感情は交錯して心ある限りの人達は皆泣いた、大貳は子筑前守をして消息を奉る。源氏はその好意を人懐かしい心に喜んだ。

月日が経つにつれ、都では源氏を思ふ心が帝以下に湧く。まして東宮は常に思ひ出しては忍び泣くのを乳母たちは悲しと見奉つてゐる。入道された藤壺も東宮の行末のみ心にかゝつてゐたのに力と頼む源氏がかく流離の身となつたのを思ひ歎くのであつた。初めの中こそ源氏と消息や詩文の贈答をした人達もあつたが、太后はそれを聞いて大そう悪しざまに言うたので、うるさいことに思つて自然さうした事も絶えてなくなつた。紫上が源氏を思慕する情はいやますと兵に、源氏も紫上なしに日を経る事が堪へられなく淋しく感じる。

明石の浦は程近いので、良清はかの入道の娘のことを思ひ出て消息をやれど返事もなく、却つて父なる入道から會ひたい旨をいうて來たが、女にわが心を受け入れられぬ自分がをめぐると行つて、空しく歸る時の事を考へると行く氣にはなれなかつた。入道は高い衿持に生きてゐ

る。たゞ者に娘は娶すまいと思つて良清の戀をも許さなかつた。今良清の主なる源氏の須磨謫居の事を聞いて、わが窺うてゐた機會が來たことを思はずにゐられなかつた。北の方は夫入道の考を危みつゝ、中々に同意しないのを、さうした我から我を貶しめるやうな心は持つまじき事ぞと、入道は一人はやり立つてゐる。娘はさして勝れた容顔さではないが、さういふ人々をひきつける所があり、氣立も誠に立派な女であつた。「われらごときはとても貴人は物の數にも思ふまい。さりとて身分相當の端邊なき思ふだにいやだ。親のない後は尼になるか海に入るかしよう」なき思つてゐた。父入道は年二度住吉に詣らせて神の靈驗を待つてゐたのであつた。須磨にはかうした歎きの中にも春はかへつた。日永につれ／＼を感じる頃、若木の櫻が仄かに匂ひをめる頃、回想の絲をくりかへし／＼ては泣く日が多かつた。

いつさなく大宮人の戀しきに櫻挿頭し、今日も來にけり
なき歌うた。ある日所在なきに苦しむ折に三位中將——今は宰相になつた——が不意に訪ねて來た。この事が聞えて罪におちようとも思へば、もうちつこしてゐられなくなつて來たので

あつた。源氏はこの訪ひをきんなにか喜んだことか。積る思に終夜語り明して宰相は歸つてゆく朝開けの空に雁の一行がうちつれて鳴き渡る。

三月初の巳の日、かうした物思ある人は祓をする日だきて、海岸に出る。人形ひとがたを舟に乗せて流すのを見ても、我が身の上が思はれる。折しもうらく、風ぎ渡れる海の面に俄に風吹き出で、空もまつ暗に曇つて、俄雨が降つて來た。歸らうとするが、笠の用意もない。例なき暴風に、ありある物皆が吹き散らされる。大浪が恐しく寄せる。足を宙に漸く人々は歸りついてほつ息をつく。雷鳴はけしく、かうして世の滅びる時が來るのかと心細く狼狽する人々の中に源氏は泰然として經を誦してゐる。夜になつて雷鳴はやんだが、風はやまぬ。

曉方に皆寢た。源氏も少しころりとしたと思ふと、妙な形のはつきりしない人が來て、「宮から召すのになせいらつしやらぬ」といふ。龍王が自分を魅つたのだと氣が付く氣味がわるく、もうこゝにじつと住んで居られぬやうな氣がした。

明 石

雨風止まず、雷鳴も靜まらず、かうした荒天が四五日も續いて、人々は不安の中に日を送る。都に歸るこゝも勅勘の身には思ひもよらず、さりきてこのまゝ出家なきも出來ない。眠る夜毎にかの怪しの者の姿が夢枕に立つ。かく小やみもなく荒れ狂ふ此頃の空に、都の人々の消息も氣にかゝるが、戸外へ頭も出すことの出來ないやうな大時化だから、見舞に來る人もない。只二條院からだけ賤しい姿に扮装つた使が、づゝに濡れて來た。

「都でもこの時化は神佛のお告だきて、仁王會なき行はれるさうです。參内する公家達もなく政務も取れない風です、なき不作法けに語り出す使の語を、源氏は漏れ聞いて、京の事さしいへばい、暮はしいまゝに御前に召して問ふ。使は

「たゞ雨が數日前から隙なく降りつゞき、時々風も吹き加はるのを、皆が未聞の事と驚いてゐるのでござります。このやうに大地の底まで突き通るやうな電交りの雨が降つたり、雷が鳴り

つゞくやうな事はござりませぬ」こゝの甚しい荒模様にはた怖れに怖れてゐる。かくて世の終の日が来るのかと思つてゐるこゝ、その翌曉からまた風吹き募り、怒濤は巖をも山をも咬み盡さんず氣色である。人々は生きた心持もなくなつた。惑亂するのであつた。源氏は正しき身のこゝに命を墜すこゝはあり得ないこゝ、思へぎ、なほ安からず、幣を捧けて住吉の神に祈る。人々も我身を犠牲にしても源氏の無事を念じるのだが、その驗もなく、遂にこゝに落雷して廊は焼けてしまつた。あはれ、人々のそのおそれよ。

一日荒れ狂うた空は夜になつてやう／＼收つたが、殿の中はぎこもかしこも吹き荒されてしまつた。もの凄くさし出た月の光になほ荒天の名残をこめてよせてはかへす浪がしらが光る、浦の海人がそのあたりへ集つて来て、

「ほんにこの風がもう少し續いたら、この家なんか浚はれてしまつたのだな。これも神様のお助けか」なごいふのが聞える。

疲勞の爲めにころ／＼眠つた源氏はまた夢を見る。そこには故院が在世の時のまゝの姿で

立ち現はれて、

「何故かうした浦住るをしてゐるのか」こゝいひつゝ、手を取つて「住吉の神の導きのまに／＼早く船に乗つてこゝを去れ。朕はこの序に京へ行つて内裏に物申すこゝがある」こゝ仰つて立ち去られる。後を追ひ参らさうとするこゝ夢がさめた。あまりの懐しさに、またや見んこゝ眼をこぢやうこすれぎ、目が近えてしまつて眠れない中に夜はほの／＼明けはなれる。

するこゝ渚に小舟を着けて二三人の人がこちらへ来る。何人だらうこゝ訪へば

「明石の浦から前司入道の使者として光君をお迎に参上致しましたのでござります。良清殿にお會ひして詳しく申上げませう」こゝ云ふをきいて、良清は何か變事でもあつたのかと思つたが源氏に促されて舟に行く。

「去る朔日に入道が不思議な夢を見ましたので、その夢に從つて、今日こゝいふその日にお迎に参つたのであります。もしやこちらの君にも何か思召し合すこゝもおありではないでせうか。一度御意を得て下さい」こゝ使がいふ。源氏はその旨を聞いて、不思議なこゝ、思ふ。龍王に求

められた夢、院がこゝを去れし仰つた夢、そして今明石入道の靈夢、又この現實の世にありとも思はれぬ大時化、そしてその風ぐ即ち明石からの舟が追風をうけて無事こゝまで來た不思議かうした種々の事を思ひめぐらすにつけ今後の身の處置をさうつけよう。やはり明石へ身を寄せて萬事を入道と談合しようなき、何かと思ひめぐらした末、こゝを引き拂つてかしこへ移らうと決心した。この決心は使者を喜ばせたこゝは無論である。やがて夜の明けきらぬ前にきて例の親しき侍臣四五人と共に舟に乗る。

舟は飛ぶやうに明石の浦に着く。濱の景色はよい、たゞ人目繁きのみが願ひの外である。入道の領する家はあちこちに散在して、海邊の小亭、山際の佛寺、さては稻倉に至るまで折々の趣を味ふやうに作りなしてある。先日來の高潮に怖びて女達は山の家へ移つてゐるので、源氏は海邊の館に落着く。舟から車へ乗り移る折に入道はちらと源氏の端麗な容姿を見て、老も忘れて喜び、住吉の神を拜し、心を盡して待遇するのであつた。

源氏は少し心も靜つたところで、さて京の紫上へ返事を認め、藤壺への消息なき一緒にかの

使に托してやる。

入道は折々娘のこゝを源氏にそれになしに仄かせ、源氏もかういふ謹慎中であるこゝを思ひ、又京なる紫上にいひおいた言を思つてつゝこゝめて入道の娘に心ある氣色は見せない。入道の昔氣質の律義さを賞で、折々召しては昔の事何くれと問ひきくのであつた。

四月になつた。長閑な夕月夜に靜かな海上を見渡して、暫く手も觸れなかつた琴をこり出して高陵といふ曲を心をこめて弾けば、かの岡の家にも松の響濤の音に交つてみんなにか心ひかれたこゝだらう。入道も感に堪へて參候したが、琵琶や箏を取り寄せて、入道は琵琶をこつて秘曲を二三弾じて、箏を源氏にすゝめるので少し弾いたが、そのいめじさはたこへん方もない。「琴は女が投げやりに弾くのがいゝものだね。」

「あなた以上に人をひきつけるやうな上手な女がありませんか。私は延喜の帝から三代相傳の秘曲をうけた者であります、折々弾き試みますのを、不思議に真似る者がありますが、その手が自ら先代によく似て居ます。さうぞその一手をお聞願ひたう存じます。私の老いほれた

耳が松風の響を勘違したのかもしれない。入道はかういつて打ちふるひ涙を流してゐる。かうした事から、入道はしみじみわが身のこし方からわが學生の心願として、娘をさうかした貴人の配さしたいこゝを述べて、

「父は大臣の位にゐましたが、私の代になつてかく零落してしまひました。私の子孫はさうまゝで落魄するかと思へば生ても立つても心が落着かないのでござります。娘の事から随分人の恨みも買ひましたが、私はそれは意に介しないのでござります。たゞかうして私が死んでしまつた後の娘の事だけが氣にかゝります。」なごいふ。源氏もあはれな父子に同情の涙を惜しまない。その翌の日、源氏は岡の家へ消息する。女はかう甚く隔つた身分の者の間の戀はさうせ破綻に終るのだらうと思ふに、かう手紙なき贈られるのを却て心苦しう感じる。でも二度目の消息にはせき立てられて恥しながら返歌した。源氏はかうした中にも京の事戀しく、紫上を迎へやせましなき思ふ折もあつた。

都ではかの十三日に帝は夢枕に立たれた院に御目を見合せられたが、それから眼疾を病ませ

給うた。外祖大臣も薨去になる、年からいへば惜い年ではないが何やら氣味悪い事である。太后も御惱に罹る。帝はかうした不可思議も畢竟源氏につらい報に召還の議を仰るけれど、太后はそのお心弱さを叱して聽かない。

秋になる。獨寝のつくづく物淋しくて、源氏は入道に娘を此方へさしつけられ、女はさても協はぬ縁さ思つてたゞ消息の贈答のみに止めやうと思つてゐる。源氏は入道に

「女の琴が聞きたいね。でなくてはつまらない」なごいふので入道は誰にも相談せず心構して十三日の月のさし出た時、迎の消息を贈つたので、馬に乗つて出掛けた。例によつて惟光が同伴である。かの家は三昧堂の近く松風は鐘聲に通ひ前裁にはかごごがましい蟲の音が頻りである。

源氏はこゝでの事を紫上にかくしてゐてもし知れては思つたので、消息の序に

都にゐた折は、あのそゞろ歩きを、よくあなたに咎められたこゝが今でも醜く私の心に生きてゐますのに、また妙にはかない契りをこゝでも結んでしまひました。かう打ち明ける

問はず語りにも、隔心のないことを知つて、何卒私の罪をお許し下さい。
なき書いておいた。返事は

うちなくぞ思ひけるかな契りしを松より浪は越えじものぞき

さあつた。それから源氏は暫し女に近かなかつたので、女はさてこそ思ふ。源氏はつれづれの餘り繪日記をはじめ。

やがて年も變つた。帝の御惱の爲めに人心は騒然としてゐる。承香殿女御の御腹に皇子はあつたが、まだ二つにしかおなりにならぬ。無論御讓位があれば東宮であるが、それにしても後見される源氏があんなでは思召す。その中に御眼疾も重るので、太后の御同意なしに七月の末に源氏に歸洛を促す宣旨が出た。源氏はこの宣旨を拜して、さうせかうはあるべきだが、無常の風がいつ吹くことかと思つてゐたので嬉しく思ふのだが、さてこの浦に別れることにもまた何さなき愛着を覚えるのであつた。

その頃は殆ど毎夜女を訪ねてゐた。女は六月頃から懷妊の様子で惱しけにしてゐた。かうし

た女に別れて上ることを物憂く思ふ。女はましてある。明後日出發といふ日、源氏は岡の家を訪ふ。常の浪の音も秋風には響殊に、塩焼く煙かすかにたなびいて明石の秋はあはれ深い。

この度は立別ることももしほ焼く煙は同じ方になびかん
源氏がいへば、

かき集め海人の焚く藻の思ひにも今は甲斐なき怨みにせじ

女は答へる。源氏は京から持つて來た琴を取りよせて名残の曲を弾く。深更の夜氣にひびいてえもいはぬ音がすみ上る。また逢ふまでの形見に琴を残し、この調子のかはらぬ中になき契りかはす。

出發の朝は未明に起きて騒しき人間に女の方に消息なきして、さすがに願みがちに船出する。難波について住吉へ代拜を立て、入洛の道を急ぐ。二條院へ着いて、お伴の人々も久々の歸洛を喜びあふのも夢心地である。紫上は暫し見ぬ間に美しくもう立派な女になつてゐる。心勞のために少し落ちた髪も却て美しさを添へる。

源氏はやがて本の位に復して、員外の權大納言に任ぜられ、他の人達も大方は舊官に復した。召によつて参内して帝をさしめやかに語り交す中夜になつた。折から十五夜の月かけ靜に照り映ふに帝は昔の事何くれと回想して愁にお沈みになる。宮中では先帝の爲めの八講の準備に忙殺されてゐる。

添 標

須磨の夜にさやかに夢に見てから故院の罪障消滅のために八講を行はうと源氏は思つてゐたが、今や歸洛したので、その準備をすゝめて十月にはいよいよ法會を行つた。人々が奉仕する事は以前に變りはない。太后はまだ病氣が平癒はしないながらに、源氏を遂に失ひ果てなかつたことを飽かず口惜しく思ふ。帝の御眼疾は源氏を召還された事によつて御心の重荷が去るに共に御なほりになつた。

翌年二月に東宮御元服。お年は十二といへど、お年の割にお身大きく、お顔も源氏そのまゝ、

なのを世人は立派なこゝろ、思つてゐるが、御母中宮はさうした噂を耳にする毎に心を痛めてのみ居られる。帝も限なく東宮を愛で給うてやがて御讓位あるべき御内意をお申し聞けになり、何かと即位後の注意なきお示しになる。

急にその二十日過の頃に讓位の儀があつた。太后は驚いたが、帝はたゞ

「ゆつくり世を送りたいからです」と仰るのみであつた。東宮には承香殿女御腹の皇子を御治定になつた。源氏は内大臣に遷る。新帝幼少にまします故に、源氏が後見をして政を聽く筈だが、さういふ煩雜な事に堪へないといふ云ひ立て、前左大臣が攝政することとなり、太政大臣に任ぜられた。年六十三。今まで政權に離れて淋しく暮してゐたにひきかへ、この一族は時を得て、宰相中將は權中納言になる。かの四の君腹の姫君は十二になつたが入内させようと思ひ侍づく。若君も元服し、その他子達多く賑々しいのを源氏は羨しく思ふ。かの葵上腹の子は美しく生ひ立つて、内裏・春宮の殿上をゆるされる。かうしたわが家の時に遇ふにつけ大臣は死んだ葵上を惜む。源氏は二條院の東なる御殿——そこは桐壺院の御料だつた——を拜領して

立派に改築しようと思ふ。

明石上の妊娠の事なき心にかけて、公私多忙に取紛れて無沙汰をしてゐたが、三月初此頃がお産だと思つて使をやつた所が、十六日に女の子を安産した旨返事があつた。何故京に迎へて産をさせなかつたらうなき今更思ふ。曾て星占に占はせた所が、帝位・后位に上るべき子、及太政大臣として人臣の極位を踏むべき子、かう三人の子があるだらう、そして后となるべき姫君は最も卑きお腹に出るを考へたこゝが當つたやうである。明石へ乳母一人を下して育てさせよう求めて宣旨の女を得た。下る時守刀その他何やかやと一緒に持たせてやつた。明石でも有り難いその志を涙ぐましままで喜んだ。五月五日は姫君の五十日に當るので特使を以て祝儀を贈る。明石でも厳しくその設けはした。

院は退位の後心長閑に管絃の御遊なきに日を送り給ふ、承香殿女御は東宮の生母として、かつては朧月夜に氣壓されてゐたにくらべて甚い幸福を感じて、常に東宮の方にのみ引き添うてゐる。東宮は梨壺においで、ある。源氏の曹司は従前通り桐壺なので、近い所から自然東宮の

後見も源氏がするやうになつた。藤壺入道宮は太上天皇に準じて待遇せられ、院司なきも任命されたが、宮は一向佛道にのみいそしんで餘念もない。權中納言の姫君は八月に入内した。

その秋に源氏は須磨での願を果しに住吉に参詣する。公卿殿上人我もくゞ子供に立つ。折しもかの明石上は例年の参詣を去年も今年も障あつて果さなかつたお詫を兼ねて舟で参詣して來た。岸に着けやうとするに境内が騒がしいので問へば下衆共は

「内大臣様の御参詣を知らずにゐるほんや、りも居たものだ」を笑ふ。月日もあるに選りに選つてこの日に参り合せたはさうしたこゝか無下に賤しいわが身の程が口惜しく思はれた。松原の深緑の中に花紅葉をかき散したやうに濃い淡い袍の色々數知らず、明石で見た人々は皆出世して物思ひもなけである。明石上は御車を遙に見やれき、姿は見えず、昔の河原左大臣の例に任せて童隨身を賜つてゐたが、その耳鬘に結うて紫裾濃の元結艶しく、十人それぐゞに異つた様子も華やかに今めかしかつた。

明石上は参詣もえせず、今宵は難波に舟を止めて、せめて祓だけでもしようを決心して、舟

をその方へやつた。源氏はかくも知らず夜一夜幾々の行事があつた。一寸拜殿から源氏が出て来た時、惟光が明石上の舟の事を申し上げたのを、源氏もあはれと思ふ。さて歸途につくまで、

みをつくし戀ふるしるしにこゝまでもめぐりあひける縁は深しな

と下人を使ひして難波へいひ送る。女はかうした消息を下すつたことを限なく有難く思つて

數ならでなにはの事も甲斐なきになごみをつくし思ひそめけん

と返歌した。翌日は幸吉日だつたので、明石上は住吉に詣で、今までの願はごきはしたが、慙ひ源氏の行装を見たので、物思ひはいや増すのであつた。源氏からは其の後京へ引取らうとの消息も来たが、まだ思ひ切つて行く決心はつかず、父入道もそれを今更ながら心細く思つて勸める事もえしなかつた。

御代毎に齋宮は更代する例にて、前坊の姫宮は母御息所と共に歸洛した。その中に御息所は病を得て急に重り行くので、これも今まで佛を疎んだ報だと思ひなつてしまつた。源氏は病床

に御息所を見舞うて齋宮の事を幾重にも頼んで、それから七八日経て遂に亡くなつてしまつた。源氏は後の事懸に後見して、齋宮の將來についても種々考慮する。

さて院も齋宮下向の際その濃艶な容姿を見てからは忘る、隙もなく母御息所に入内の旨を仰せられたけれぎ、その事は御息所の承諾がなくて終つたのだが、今でもまだそのお心はあるのを、源氏は院へよりは帝の後宮に思つてゐる、こはいへ、無下に取計ひかねて藤壺入道宮に相談した所が、宮も今の帝のお相手なる弘徽殿女御——權中納言の女——は帝と同じ程の年配なので、齋宮のやうな少し年嵩の人がゐて、しつかり帝のお世話をしてくれるやうだつたらぎんなにか好都合だらうと思つて源氏の意見に同じたので、紫上にもいふて齋宮入内の準備を急ぐ。

蓬 生

源氏が須磨明石に佗住りしてゐた頃には朝夕に思ひ歎く女達が多かつた。その中でも末摘

花は父常陸宮薨去の後にはまた親身に後見する人もなく心細く住んでゐた折から源氏と相知つたが、源氏は深くも心にかけて離れぬになる月日が多かつたのを女はいさ悲しと思つてゐた。その中に源氏は謫居の身となり、歸洛しても絶えて訪ねることもない。何さいふ因果な御宿世か、思ひもかけぬお幸福を喜んでか喜んだことだらう。それにこれがまあ世間さはいひ條、かうしたまた悲しいめにあふことよなき老女達は思ふ。さうした人達だけをのこして若い女達は散り／＼になつて、元より荒れてゐた家は狐の棲家さ荒れ、茂りあうた木立に梟の聲物凄く魑魅なきいふ怪しの者も姿を現すやうになつてしまつた。けれど末摘花はこゝを亡父の形見に守つて、裕福な地方官が、つてを求めてこゝの邸宅を望むのにも耳をかさず、古代の調度もそのまゝに淋しく日を送つてゐる。誰も訪ねる人さでもない、たゞ兄の禪師だけが稀に京に出る折なきに立ち寄るのみである。この禪師も他の法師たちとは違つて俗事には疎い聖僧だから、實家の手助けなきは思ひもよらぬ。

かくて蓬は軒さ文を争ひ、菴は門を鎖せき、築垣は崩れて春夏には馬や牛をこゝに放牧する

童もある。去る八月の大時化には廊や下屋も吹きまくられてたゞ残骸を止めてゐる。盗人もこゝは見限りて寄らないから、さすがに母屋だけは昔ながらの裝飾が残つてゐる。かうした所も住む人に風流心があらばまた慰む事もあらう、佛道に心よせる人ならば觀念のたよりさもならう、しかしそれはこゝの主には求むべくもない。

末摘花は餘り親しくない叔母に今は太宰大貳の妻である人がゐた。この叔母が末摘花をわが娘の召仕さしたいさ思つて何かさいうてよこしてゐたが、近い中に夫の任地へ下るさて

遠くの國へかう下らうさするのですが、心細い御様子が、常にお訪ねしないで近くに住れば何かのお力になれるのに、ほんさに氣にかゝりますので、御一緒にさ存じます。

なき體よくいうてよこすけれさも、さうしても承諾しない。その中に源氏が歸京したのだが、更にわが方へは消息がないので女はすつかりがつかりして泣きそほつのみである。その中に淋しい冬になつて陰惨な氣が荒廢せる宮の内外を包む。

大貳の下向の日は近づく。ある日叔母が突然來て、さうしても下向を承知しない女——源氏

の情を思ひ頼める女に

「大將様が造り磨き給うたなら、今に引きかへ玉の臺にもなり代らうこは頼しいことですが、今は兵部卿の宮の姫君より外には心を分けようこはなさらないのですよ。況してこんな藪の中の貴女をお訪ねになることなんかさうしてありますものか」なき云ふのをきけば更に涙が新に流れる。かくて叔母は筑紫へ下つた。この宮に残つてゐた唯一の彼女の友なる若い侍従もその戀人が大貳の甥だつたので一緒に下つて行つた。老女までが

「侍従さんの行つたのも道理だ。私達だつて、いつまで辛抱しきれよう」なき云うてゐる。

「あの女はまだ生きて居るだらうか。」こんなことを源氏がそれでも思ひ出す事もあつたけれどさう急いで人に問うてもみないでゐる中にその年も暮れた。

四月頃に花散里を訪ねやうとて源氏は出かけた。日來降りつゞいた名残の雨が少しそゞいだが、やがて月がおもしろく出た。道々昔のそゞろ歩きなき思ひ出てゆくこ、見るかけもなく荒れ果てた家の、森のやうに木の茂つた所を通る。大きな松に藤が咲きかゝつて、月かけに靡い

て、風のまにまに匂ひを送るに、車から少し身體を出してよく見るこ、さうやら見たここがあるやうな木立の趣である。惟光を召して

「こゝは故常陸宮のお邸だつたね。」

「さやうでござります。」

「こゝにゐた人はまだ居るだらうか。わざと来るのも臆劫だから、この序に寄つて見よう。人達してはばからしいから、様子を見て来てくれ」こ源氏はいふ。折しも晝寢の夢に父宮の佛を見た末摘花は端近に出てつくづく物思ひに沈んでゐた時であつた。惟光は侍従を呼んでこ思つたがもう居ないので、老女房にあうて

「姫君はもう他に御良縁がありましたか」こいへば、

「さうしたここなら、さうしてこんなにお邸が寂れませう」こ女は淋しく笑ふ。源氏は惟光の話をきいて、なぜこんなにまで捨ておいたここだらうこ、今更ながら女が氣の毒になる。草の露を惟光が馬の鞭もて拂ひつゝ、雨後の雫が秋の時雨めいておちかゝるので、傘をさゝせて行

く指貫の裾はしみに濡れた。あはれに語らうて、やがて源氏は歸らうとする。

年を経て待つしるしなきわが宿を花のたよりに過ぎぬばかりか

と忍びやかに誦じて身じろぐけはひも袖の香もかつて逢ひし時よりはうち勝つて感じられた。さんなに日來の疎遠を悲しく思つたことだらうと思ひつゝ、花散里の方へ行く。

その翌日から人を遣つて、常陸宮の修繕をさせ、やがて造營成るべき二條院近き所に移さうと思つて、今からその準備をしておくやうに消息する。そこへ移つたのは二年ほこの後である。叔母は上洛してその變化に驚き、侍従もさすがに嬉しかつたものゝ、今暫くかここに居候へて今の榮華に與らなかつたことを恥ぢ思ふのであつた。

關 屋

前に伊豫介だつた人はその後常陸介になつて、妻空蟬を伴れてかの國へ下つてゐた。空蟬は源氏が須磨へ行つてゐることを遙に聞いたけれど、消息奉るべきすべもなく人知れず思に沈む

日も多かつた。常陸介の任期満ちて歸洛したのは、源氏が京に歸つた翌年の秋であつた。

介の一行が逢坂の關を越す日は恰も源氏が石山參詣に出で立つ日であつた。京から迎へに來た子息等がその事を告げたので、道の騒しくならぬ中に、曉方から入洛の準備を急いだけれど、打出の濱へ來た頃もう源氏は粟田山を越されたにて先供の者が來逢うたので、車を關山に止め、女車は松の木蔭なごへ行き込んで、源氏の過るのを待つてゐた。十餘りの女車の簾を洩れる袖口の色なきも田舎びてもゐず、齋宮の下の折なきの物見車も偲ばれる。九月の晦日のこと、紅葉も下草も色づきわたりて美しきに、關屋からさゝ零れ出た人々の旅裝束なきも、また面白く見渡される。何か云ひやりたい事もあるが人前を憚つてえいはず、女も昔の記憶が心の中に甦つて來て涙ぐまれる。

石山參籠からの歸りに右衛門佐——昔の小君——が迎に來た。彼は昔の縁から位階を得る頃までは源氏の庇護の下にあつたのを、かの世の騒に禍の身に及ぶことを恐れ、源氏に背いて常陸へ下つてゐたので、源氏は不快に思つたが、また家人の列に加へておくのであつた。紀伊守

今は河内守である。その弟は右近將監だつたのを、官を退いてまで須磨のお伴に参つたのが今は特に出世してゐるので、守や佐は今更にわが心の及ばなかつた事を後悔してゐる。

右衛門佐は空蟬への源氏の消息を賜つて、まだあの古い事を忘れずゐることに驚いた。

「こないだは宿世の縁ご嬉しく思ひましたが、あなたもさうはお思ひでしたせうね。

なご書いてあつた。佐は姉へ持つて行つて、

「やはり御返事をお上げなさい」こいふ。女もえ堪へて、

あふ坂の關やいかなる關なればしけき嘆きの中をわくらん

ほんごに夢のやうに思はれます。

ご書いた。その後も時々消息はあつた。

さうしてゐる中に、常陸介は老病でもう長くは生きられさうにもなくなつたので

「私が死んでも今まで通りお母さんに仕へなくてはいけないよ」なご明け暮れいつてゐた。女も悲しく、この人に後れてはさうした様になり行くわが身だらうと思ふ。

「魂だけでも残しておきたい、あなたのために、子きもだつて頼まれないもの」なご介はいつてゐたが、さうして亡くなつてしまつた。長男の河内守は前から繼母に思ひをかけてゐたが、「数ならぬ私ですが、さうぞ隔心なく何でも仰しやつて下さい」なご追従めいた事をいふ陰にはいさ淺ましい心が仄見えたので、空蟬はますます世に交ふこゝがいやになつて、誰にも知らせずに尼になつてしまつた。河内守は腹立たしく尼になつたまで、さうして自分の助けなしに行かれようなご思ふのであつた。

繪 合

前齋宮入内の事について源氏はさすがに院の思召を憚つて表立つて肝煎もしなかつたが、目立たぬ程度で萬事を心配してゐた。院は失望されたが、それきり齋宮の消息もお絶ちになつた。入内の當日に立派な装束、御櫛の箱その他名香なご數多の御贈物があつた。丁度源氏が來あはせたので女別當がお見せした。挿櫛の箱の

別れ路に添へし小櫛をかごにてはるけき中こ神やいさめし

こ書いて結んであつたのを見て源氏は院のお心がおいこしく、何故こんなこを思ひ謀つたこ
こかこわが心の程も恨しい。齋宮も昔思しては涙ぐまれるのであつた。

帝は大人の女御にあふのを恥しいものに思召してゐたけれど、さて逢つて見れば小柄な優し
けな王女御を懐しく感じられる。權中納言は源氏が自分の娘に對する競争者を入内させたこ
を安からず思ふ。齋宮は入内して梅壺にゐる。

院は源氏が參つてのまかに物語した序に、話が齋宮下向の下に及んだので、わが戀してゐた
のだなき明白あかしには仰しやらなかつたが、あの時の事なき懐しけにお語りになるのを源氏は心苦
しく思ふ。

帝は大そう繪がお好きで、御自らも彩管をおこりになる事もあつた。齋宮女御も繪をよくお
描きになるので、それがお氣に召して益々寵幸し給ふので權中納言は甚だ心穩かでない、名手
を物色して揮毫させて弘徽殿に贈つて寵をわが娘に專にせしめやうとする。で、源氏もこれに

對抗するために二條院の扇子を開いて、あれこれを探索した須磨明石での繪日記なきも取り出
して紫上にも見せる。その中から特によく出来たのを一帖づゝさすがにかの浦の様のよく見え
たのを選ぶにつけ、かの明石上の事が心に來る。かうして源氏方で繪を集めてゐるこ聞いて、
權中納言はいよゝ心こころを盡して軸や表紙や紐なきにまで心をくばる。

三月十日の頃、空もうらゝかに、人心も長閑に物面白い時である。禁中には恰も行事の際な
時で、かうしたこで人々は目を送つてゐるが、同じ事ならすぐれた繪をさし上げやうと思
つて源氏は特に心を入れて名畫を集めてゐる。梅壺の方では物語繪も古物語に材を取つたのが
多く、弘徽殿の方には新しい文學を畫いたものが多かつた。こんなにして人々が思ひくくにそ
の優劣を論じ合はうてゐるが、折しも女院も上つておいでの時だつたので、たいそう面白いこ
に思召して、女房達を左右に分けて繪合の遊をしようこ仰しやる。梅壺方には平典侍・侍從内侍・
少將命婦なき、弘徽殿方には大貳典侍・中將命婦・兵衛命婦たちを方人こして互に批判し、辯難
するを興ありこ聞し召す。竹取に宇津保の俊蔭を、伊勢に正三位を合せたりしてゐる所へ源氏

も来て、

「同じ事なら御前で勝負をきめたらさうでせう」といつて、さういふことになつた。院もこの噂をお聞きになつて梅壺に繪を贈つたりなすつた。古の名匠の筆になる年中行事繪卷に詞書は延喜の宸筆になつたもの、又わが御治世の繪卷には特に畫家に仰せてかの大極殿で別の櫛をお授けになる様を美事にお描かせになつた。

當日になつて、源氏も中納言も召によつて參内し、なほ源氏の弟帥の宮も來られたが、勅命で今日の判者の任に當られた。時々判に異議を挿む源氏の態度も事々しからずめでたい。その日の勝負が定らずして夜になつてしまふ。いろ／＼の繪が合されたが、最後に左方から須磨の卷が出たので、中納言ははつ、こ思つた。右方にしても最後には特に心を籠めた名畫を残してはおいたのだけれき、かうした物の上手が、精を籠めて靜かに描いたこの卷にさうして及ぼう。艶なるが中に悽涼の趣ある浦のさま、まして草書きに折々の歌なき交へて書かれた一巻よ。今まで優れてゐたこ見た繪もこの前には顔色もない。論ずるまでもなくこの日の勝は左方こきまつ

てあこはしめやかな小宴に移る。

「さうかして心ゆくばかりの繪をこ思つてゐましたがあゝしたここから思はずも流離人（なごりびと）となつて、深い大自然の心をも見ましたやうなもの、さうしても筆の運びが思ふやうに参りませんでした。それもだしぬけにお目にもかけられませんのでこんな機會（きかひ）に……」

「あなたが何の道にも堪能でいらつしやるここはもう隠れもないここなんです、繪はたゞ筆の序にお弄びの事こだけ思つてゐましたが、ほんこに昔の上手も及ばないすぐれた技を持つていらつしやつたのには驚きました」なき帥の宮も仰しやつて、さては故院のここなき思ひ出ては座も濕りがちであつた。

かの須磨明石の卷は女院の仰せでお手許へさし上げた。かうした一寸した事でも中納言は源氏に氣壓されがちなのを口惜しう思へき、帝の寵がなほ弘徽殿の上にあるここを見て竊に心を慰めてゐた。

源氏はなほ世を憂きものと思つて、帝がも少し成人なさるのを見て隱遁しようこ思ふ。自分

のやうに、齡若くて高位高官を辱うしてゐる者の末はきつこよい事はあるまい。靜かに籠つて後世を念じ、且つ現世の命を延べやうと思つて、嵯峨の山里に地を占めてそこに佛寺を經營する。

松 風

東の院の造營成つて、かの花散里を西の對に住ませ、東の對には明石上を移らせやう、さうして北の對にはその他哀れみ行末かけて契つた女達を住ませるために、殊に廣く部屋々々を隔て、設計してある。寢殿は明けておいて、時々來る時の居所としておいた。

明石へは絶えず消息して、上洛を促すけれど、わが身の程を思ふにつけ、自分よりずつと身分ある女達さへ、源氏の心を深くも繋ぎ得ない事なきを思ふにつけ上る心も起らぬ。といつてわが子の生ひ先をかうした田舎に埋めておく事も堪へられない事であつた。母方の曾祖父なる中務宮さいつた方の別莊が嵯峨大井川の邊にあつたが、今はそこは入道の妻の有なつてゐる。

が、住む者とてもなくなつて荒廢し切つてゐる。ある日入道はその別莊守を呼んで、

「私はもう世に望みを絶つて、かうした田舎へひつこんで來たのだから、急にまた京へ出なければならぬ事になつた。就ては市中へ出るのも厭だが、今お前の居る別莊を住めるやうに修繕してくれないか。お前の住む所は貸しておいてあげるから」といふ。

「近年誰方もお住みにならないので、もうすつかり荒れ切つてゐますので、私は下部屋の方に手を入れて住んでゐますが、この春頃から内大臣様が近くに立派なお寺をお建てになるといつて人も大勢入りこんでゐます。閑靜な所といふお望にはどうでござりませう」

「内大臣様とは丁度御縁續きだからいゝでせう。さにかく急いで大體の修理だけするやうに願ひます」と妻なる尼はいふ。なほ別莊守の男は費用の點なども心配したが、とに角多分の金を入道から受取つて、急いで修理にかゝつた。

源氏はかくとも知らず、女が上洛するのを臆劫がるのを心得ぬことに思つてゐた所へ、やがて大井の莊の修理が出來てからその旨源氏へいひ送つたので、さてはさうした心構からかと、

心にくい用意のほぎを感じ入つた。例の腹心の惟光をそこへやつて何かの用意をさせた。河に面してかしの海も思はれる所だ。惟光はいふ。源氏の寺は大覺寺の南にあつて瀧殿の有様なごもめでたく、この莊は川岸の松蔭に質素な建物である。

源氏は親しい人達に旨を含めて明石へ迎にやつた。住み馴れた浦を離れやうとする人達の悲しさ、なほ入道はかうした事を熱望してゐた思が協ふのは嬉しけれき、たゞ一人残る事を考へてはいひしれぬ心細さに打たれる。

「小さい姫君を見ないで生きて行かれようか」

なご同じ事を朝夕いひ續け思ひ續けてゐる。

折しも秋の事にて殊に物哀れを覺えて、その日さいふ朝、風涼しく蟲の音もあはたゞしきに明石上は海の方を見出してゐるに、入道は常のやうに後夜から起きてすゝり泣しつゝ、勤行してゐる。皆も誘はれて泣く。

行く先をはるかに祈る別れ路にたへぬは老の涙なりけり

入道がいへば、尼がかへす。

諸共に都は出できこの度は一人野中の道にまごはん

一行は事々しい車行を避けて、辰の刻に舟で出發した。入道は放心したやうに浦がくれ行帆影をいつまでもく眺めて立つ。船は追風をうけて豫定さほりに京へついた。所がら他所へ移つたやうにも覺えない。たゞ徒に紫上の氣を兼ねて自分を訪ねてくれないのが悲しく、却つて物思がましたやうな心で、かの形見の琴を取り出して弾くこともある。松風にひゞきあうて微妙な音を漂はす。

桂に營んだ別莊、さては嵯峨の寺なごの用事なごもあり、旁々訪ふべき人もその近くに来てゐるからさいひおいて、源氏は二三日の豫定で、でも忍びやかにある黄昏に明石上を訪ねた。見なれた狩衣姿に引きかへた直衣姿の源氏を、世にも艶しく思はれて、久しくかきくらしした心の暗も晴れる心地がする。姫君のいたいけな様を見るにつけ、葵上腹の若君も物かはと思はれて、今まで離れ住んでゐたことを、あさましいまでに口惜しく思ふ。夜一夜こまやかな物語に

語り明して、なほあちこちの修理の事なきを新しくこの別荘附にした家人に云ひつける。母なる尼にも逢うて懇に語り合ふた。

その日源氏は寺の方へ一寸行つて、何か指圖して、また明石上の所へ戻つた。折からさし込む月影に、女はかの形見の琴を出す。源氏はあの明石の別離の夜を思つて、おもしろく弾きませば、たゞその時のこゝが心の中におもひおこされて、

契りしにかはらぬ琴のしらべにて絶えぬ心の程を知りきや

こんな事を源氏は口誦むのであつた。源氏は嫌君を見るにつけ、このまゝにこゝにかうして大きくなるのが悲しまれて、二條院へ引取つて心ゆくまでかしづいたらと思ふのだけれど、今そんな事を云ひ出しては又物思はせる種と思ひ返してだまつてゐた。姫君ももう馴れて源氏に抱かれるやうになつてゐた。

翌日こそ歸洛さ思つてゐる所へ、源氏の後を追つて殿上人達が太勢桂院へ來たので、源氏は是非その方へ行かねばならなかつた。

「昨夜の月にお伴に後れた残念さに、今朝霧を分けて参かいたしました。山の紅葉はまだ色つきませぬが、野邊の秋は今が盛りでござります。それにしても小鷹守に汽をこられて後れた人達はどうしたことせう」など云ふ。その日は桂の院で饗應に鶉飼などした。やがて鷹守の人達も來て、晝は詩歌に興じ、月出る頃から管絃がはじまつた。物の音に川風も吹き合せて興はつきない。月區く上る頃帝の御消息を奉じて四五人が來た。

二條院に歸つた源氏は、機嫌をそこねてゐるのを知らぬがほに昨夜の寝不足に暫く書寝して固方に参内すると大急ぎで人目を避けて大井への消息を書く。折を見て、かの大井の姫君を此處へ引取つて紫上に相談する。もとゞ子供好きで紫上はわが子にして抱きかしのばやと喜ぶのであつた。我が言ひ出した事ながら明石上の心をも察して、さてどうしたものかと源氏は思ひ惑ふ。かの御堂の念佛などの様を見て、月に二度ほどづゝかしては通うてゐるのであつた。でも織女の契りにはまされど、その程の待遠しさ、物思はしさ。

薄 雲

冬になるにつれ、河近い大井の莊では心細さもまして悲しく明し暮すを、かくては住み果てる事も難からう、例の東院へと源氏も度々勧めるけれど、どうしてもその氣にはなれずにおゐる。「では小さい人だけ京へお遣しなさい。かうした川舎に埋れさせておくのは可哀さうではないか。紫上も始終育てたいといつてゐるのですから、袴着などもあちらで盛大にしたいと思ふのです」と源氏はいふ。そして「繼母にかけるのを不安に貴女が思ふのも尤もだけれど、あちらには子供もなく淋しがつて、もう大くなつていらした今の女御をも子として見てやつた位ですもの、この姫のいたいけなを悪まう筈ありませんよ」などいつて勧めるのであつた。母なる尼もかうした山里で、蔭のやうに育つ姫君をいと思つて二條院へ預ける事に賛成するし、とつおいつ考へぬいた末、袴着の事はどうする積りかといつて來た返事に、思ひ切つて、私のやうな何事にも至らぬ者と共に大きくなる愛兒の行末を思へば、ほんとにかあいさう

だここの頃思ふやうになつて参りました。でも物皆の足り整へる都の方々に立ちまじつて
ごんなにか人の物笑になるわが子でござりませう。

こんな事を書いた。

源氏は吉日を占はせて、表だ、ぬやうにすべての準備を整へて待つてゐた。大井でも別離の日の迫るのを哀に思へき、これも愛兒の幸福の爲に念じかへす。乳母も思はずもこゝに仕へて明石上の優しさに忘れ難い感銘を受けてゐるので、又新に知らぬ人達に立ち交るのを憂き事と思ひつゝ、涙に日を送る中、十二月にもなつた。

雪が降り積んでやがて解け初めた頃に源氏が來た。常ならば嬉しがるべきその事も、いよいよお迎かき思へば胸もつづれる。來春から延す黒髪が肩の邊でゆらめいてゐるのも美しく、まみ口つきなきのめでたさ。姫君は無心に車に乗らうと急ぐ。そして抱いて出た母に片言まじりに

「母ちやまも一緒に、ね」なき衣の端をひくにも涙がまづこたへてくれる。

末遠き二葉の松にひき別れいつか木高きかけを見るべき
これが明石上の別の歌であつた。

二條院に着いた時姫君は途中で眠つてしまつてゐたが抱き下す時に目を覺したが泣きもしなかつた。母の居ないのを捜す悲しさうな目元、乳母がいろ／＼あやしてゐる。西側の方にこの姫君の部屋は設らはれてゐた。人なつこい子ですぐに懐いたので、紫上も膝に抱き上げたり可愛がつて、美しい子を得たこゝを喜んでゐる。

年も改つた。七日も過ぎて源氏は大井へ行くまで殊にきらびやかに装うて出た。姫君が裾を控へて後を慕ふのをさすがに哀れと思ふ。紫上は内に嫉妬の心も起らぬではないが、小さい人をふみ抱いて乳を含めたりする中に、いつかはなしに却てかの母なる人に同情の心が湧いて来る。

明石でも入道は常に使をよこして都の消息を聞いて或時は喜び、又或時は胸を冷したりしてゐた。

その頃に故葵上の父なる太政大臣が薨じた。國家の柱石も重きをなしてゐた人だつたから帝も哀悼し給ひ、天下の人々も心からその死を悲しんだ。又この頃日月星も異様な光を放ち、人心競々として天下騒然たる有様であつた。

春の初からお床についてゐられた女院の御惱が三月には大へん重らせ給うたので帝の行幸なさもあつた。源氏もお見舞申した。御自も死の近づいた事をお覺りになつてゐたやうだつたが遂に灯の消えるやうにおだやかに往生の素懷をお遂けになつた。御年は三十七。まだ若く、お心も立派だつた女院の死を惜まぬ者はなかつた。殿上人なごおしなべて一つ色に黒んで、ほんまに物の榮えない春の暮である。源氏は二條院の櫻を見てもありし日の花の宴なき思はれる。華やかな夕日をうけた山際にうすくかゝつてゐる雲の鈍色なのが目にこまつては、

入日さす峯にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる
こ忍びやかに口吟むのであつた。

こゝに女院の母後の頃からの祈禱僧があつた。今の帝も深く歸依してゐ給ふ聖僧であつた。

宮中に召されてゐたある曉、帝と二人だけの時、ゆゑしい秘密がこの聖僧から帝に洩らされたのである。帝は夢かまばかり驚かれて、いろ／＼と思し亂れる事が多かつた。知らぬ事はいへ現在の父を臣下におくこの恐しさ。皇子が臣籍に下つて納言、大臣なきになつて更に親王の宣下あり遂に實祚を踐む、かうした例は日本にもある。さうだ人がらの優れてゐるこいふ事に言よせてなき、お考になつた。で、ある時秋の定例補任の時に太政大臣に任すへき由、内意をお傳へになつた序に、聖慮をお漏しになつたけれ、源氏は桐壺院の仰せに引いて堅く辭退したので、たゞ位だけ一級をお進めになつた。そしてなほ親王宣下の事も仰るのだけれ、今さうなつては萬機を關白すべき者もない旨を奏して、權中納言の今は大納言に陞進して右大將を兼ねてゐる、この人が大臣になる時を俟つて心靜かに隱退しようと思ふのであつた。それにしてもあの秘密を誰が洩したらう、女院がこも思つて例の王命婦にきけば、

「萬一その事がわかつた場合みんなか帝が御心配になるだらう、その事ばかりをお歎きでしたのに、さうしてそんな事がありませう、こいふ。そんな事を聞くにつけ一方ならず深いお考

だつた女院がそゝろに懐かしく思はれるのである。

齋宮女御は源氏の保護の下に、その後宮に於ける地位は確乎たる者であり、帝の寵幸も並ぶ者はなかつた。秋の頃二條院を里こして下つてゐた。ある秋の雨がしめやかに降る日源氏は女御の御殿へ来て、昔今の話をしてゐる中、何こもいひしれぬ胸の高鳴りを覺える。ふこ氣づいて源氏はまた話頭を轉じる。

「一つ家に四季折々の趣を見知るばかりに、春の木、秋の草なき移し植ゑたいなき思ふのですが、貴女は春も秋も何方がお好きですか。」

「私のやうな者には分りませんわ。でも秋の方が……」なき女御は答へる。源氏は懐へきれず

君もさはあはれをかはせ人知れず我身にしむる秋の夕風

なきいはれるのだが、さすがに理性に目ざめては思ひかへして我方へ歸つて來た。大井へは例の念佛を云ひ立てにして行つた。この頃は暇な頃なので例よりは長い滯留である。」

朝 顔

桃蘭式部卿宮も女院についで薨去になつたので、その喪にあたつて朝顔の君は齋院を辭した。例のくせで源氏はこの人のこころを思ひ絶つこころは出来なかつた。書く消息は喪中の見舞ではあるが、あの煩さかつた昔を思へば朝顔は打解けて返事もあまりしなかつた。九月に桃蘭宮に移つたときいて、そこなる叔母五の宮を訪ふにかこつけて源氏は行つた。宮の薨後何程もないのに、もう彼處此處荒れ初めたやうな氣がして哀れである。叔母宮と暫く話して朝顔を訪ねる。鈍色の御簾のかけに黒い几帳の影が夕闇の中に見えるのも悲しい。女房の取次で思を叙べる源氏、そして人傳にまた情無い返事を聞く源氏、そして二十年間の拒まれた戀を抱いて淋しく歸つた源氏は、翌朝枯れたる秋草の中にあるか無きかに咲ける朝顔の一輪を摘み取つて、手紙に添へておく。返事にはたゞ

秋はて、霧のまがきに結ほ、れ有るか無きかにうつる朝顔

なきあつた。源氏はさうかしてこの切ない戀を叶へたいとあせるのだけれど、女はどこ迄もこれを拒み通さうとするのを、珍しくも又悪くらしく思ふ。かうした事が世に漏れて源氏は朝顔を得んが爲めに五の宮に親切を盡すのだなき、善悪ない者共はいうてゐる。

紫上はかうした世評なきを最初は氣にも止めてゐなかつたけれど、日を経るにつれさうしても氣にかけずにもられないやうになつて來た。もし源氏の愛が朝顔にすつかり移つてしまつたらさうしようなき種々思ひ亂れる。妬みもそれが輕ければ自然怨する事も出來た、目下のやうなさし迫つた惱みがあつては却て口も重くなつて來る。源氏は近來宮中に宿直する夜が多く勤めのやうに手紙ばかり書いてゐる。

冬になつた。

「叔母の五の宮の御病氣を見舞うて來よう」とさういって、雪に黄昏れる頃源氏は二條院を出た。姫君をあやしつゝ見送る紫上の目にはたゞならぬ涙が宿つてゐるのを氣の毒さは見たが、もう五の宮に消息した後だつたから出かけて行つた。老人のくせで、少し話す中に欠伸をして何か

いうてゐられたと思ふこもう、駟の聲が聞えてゐた。座を立たうとするこ年寄りけの咳拂をして來る人がある。かの源典侍であつた。こゝの宮に弟子入して尼になつてゐるこは聞いてゐたが、今まで尋ねても見なかつたのだ。女院やその外あの頃に時めいてゐた人達の多くは死んだり又は有るかひもなく淋しく世を過してゐるのに、この老人がこんなのにのんきけにしてゐるのを見るこ、一しほ世のはかなさを感じるのであつた。それから朝顔の方へ行つたけれぎ、やはり強情にも自分を容れてくれないのを悲しく思った。女房達も何こいふ氣の毒な事だらうこ同情してゐる。

紫上は源氏が近頃二條院へ歸らずがちなのをつらしこ思つてゐる。その心をあらはすまいこつこめてゐるけれぎ、折にはその氣色の見える事のあるのを、源氏は早くも氣づいて、いろいろこ云ひ慰めるのであつた。

「何か思ひ違ひしてゐるのですね。齋院へ折々行くのもたゞお父様のお亡くなりになつたお淋しさを慰めるだけなんです。何も後めいたここはないのだからね、機嫌をお直しなさい。」こん

な事も云つた。折しも降り積つた雪の上に冬の月が物凄じく照り添ひつゝ、花紅葉の盛よりも身にしみて哀れを覺える景色である。源氏は女童を庭に下して、雪轉しをさせる。種々の色の襦せむぎに袴もしどけなげな風をして、丈に餘れる髪を白い雪の上にひいてゐるのも美しい。雪丸を大きくしようと慾ばつてゐるが思ふ様にもならないので弱つてゐる。東の妻戸の所で笑うて立つてゐる童女達もあつた。

かうした庭の様を打見やりつゝ紫上としめやかに故女院のこと、さてはその他の人達の事など何くれと語つてゐる中に漸々更け行けば、月いよ／＼五えてげに靜な夜であつた。

水とち石間の水はゆきなやみ空澄む月のかげぞ流るゝ

と低誦して外を見出してゐる紫上の美しさ、髪や顔つき、戀しく思つてゐた女院に生寫しなのを源氏はなつかしく見てゐた。

寢所に入つてからも思ひは故女院の上に止つてゐた。ふと氣がつくとそこに女院のありし佛が現れて、

「人には洩すまいと仰つた秘密がすっかり露れて苦しく恥しいめを見ることがつらい事です」と仰る。何か答へやうと思ふけれど、どうしても聲が出ない。と、紫上が

「まあ、どうなさいましたの」と云ふのに驚けば今は夢だつた。胸の動悸はなほ止まぬ。

翌朝は早く起きて、その事とはなしに、所々の寺で誦經をさせた。女院は生前の勤行の功德によつて、罪も輕げにおはしたとはいへ、たゞこの一事にはなほ世の濁をお雪ぎになれぬのだらうと思ふにつけ、どこなりとお後を慕うて、その罪に代りたいなどつくづく思ふ。そして自らも専心阿彌陀如來を信心して一向に念佛に餘念もない。

源氏物語 上編 終

中編

新源氏物語 中編

乙 女

年代つて女院の諒闇も過ぎて世は花やかな初春になつた。加茂祭の頃ともなれば空も晴れて心地よげではあるが、父宮の喪に居る朝顔にはたゞ物憂き世の様である。さうした中にも源氏からの消息は度々あつた。女五の宮へもその都度消息はあつた。宮は

「ほんとに此頃まで稚兒と思つてゐたのに、もう立派な大人になつて」などいふのを、聞く女房達は笑うてゐた。

「源氏の大臣がこんな親切に訪ねてくれるのは今更の戀心ではありませんよ。お父様も貴女とあの方の結婚を望んでいらしたのに、貴女がどうしても承けひかないでゐる中にお蔭れに

なつてしまつたのです。今は葵上もいらつしやらぬ事ですし、結婚してはさうなまじ、朝顔にあふ時にすゝめるのだけれど、今更源氏に従ふでもあるまい、やはり今迄の態度を持ち通す外あるまいと思ふ。五の宮も無理にこは強ひもしない。

葵上の忘れ形見の若君も、もう元服する年になつてゐた。二條院で花々しく舉式しようと思つてゐただけれど、祖母君の意中をも考へてやはりその方で式を行つた。年十二。四位に世人も期待してゐるが、源氏は思ふ所があつて六位に叙せられるやう奏請した。祖母君は淺ましい事と思つて、源氏に逢うた時に怨む。

「實は大學に入れて暫く勉強させたいと思ふのであります。若い身で思ひのまゝの榮爵を受けずには、自ら心驕つて修養もつこめず、末には人に笑はれるやうになりませう。當座こそ位低く本意のやうではありますが、末には天下の柱石たるべき修養がその間に積れたらごんなにいでせう」源氏はいふ。でも愛孫が今まで見おこしてゐた従弟達が加階して出世するのを六位で辛しと見てゐるのが不感だと思ふ。けれど源氏はさうした恨も學問して物の道理が分つて

來れば消えてしまふだらうと姑の心を慰めるのであつた。

東の院にその書齋を設けて月に三度だけ祖母君の所へ行く事を許された。祇めるやうにかあいがる祖母の手許では充分勉強は出来ないと思つたからである。眞面目な若君はこんなになしなくてもよさうなものとは思へど、怵へかへして早く規定の學科を卒業して、世の交ひをしよう熱心に勉強した甲斐があつて四五ヶ月の中に史記を讀了した。試験を受けてもよからう先づ自分の前で家庭教師の大内記をして試みさせて見た。申し分ない成績を祖父關白が在世だつたらなど人々は思ふ。大内記もすっかり面目を施した。若君の學は日に月に進む。

中宮冊立の議が禁中にある。梅壺・弘徽殿、そして式部卿宮——前の兵部卿で紫上の父——の女王、この三人の間に競争があつたが、結局源氏を後楯とせる梅壺女御が后となる。即ち秋好中宮である。源氏は太政大臣になり、大將が内大臣を襲うて政務を關白することになつた。

今の内大臣には子達も多かつた。娘は弘徽殿女御の外に某女王——今は按察大納言の妻になつてゐる——の腹にも一人あつた。これは内大臣の母の許で、源氏の若君——夕霧——と共に

育てられてゐる。雲井の雁といふのがそれである。内大臣は女御ほどは愛してゐないが、性質も容姿も優れてゐた。夕霧と雲井の雁とは同じ祖母の許に撫育せられて、互の心にはもう戀の芽生はあつたのである十をこしてからは部屋も別々にされ、相見る折も稀になつたが、夕霧はなほ事につけつゝ遊び相手になつてゐたが、やがて東の院に移されては折々幼い消息にわが心を托してゐた。女はまだ心幼くその手紙などを落しておく事などもあつて自然女房達は氣取つてゐたものゝ自分達の心一つに收めてゐた。

時雨して萩の葉渡る風もたゞならぬ夕暮、大臣が母宮の御殿へ来て雲井の雁をも呼んで琴をひかせて遊ぶ。大臣は弘徽殿女御を出し抜いて梅壺が中宮になつたことを不快に思ひ、東宮の元服も近づいたにつけ、今度こそこの雲井の雁をと思つてゐるのに、また源氏のあの明石上の姫君が東宮妃の候補者となつてゐるので層一層源氏に對する悪感が咬られるのであつた。で今もその事を母宮に告げると、宮もこの事については源氏を恨んでゐる。そして無心に箏を弾じてゐる孫姫の手つきを限なく美しと見てゐる。かうした所へ夕霧が來たので、几帳を隔て、こゝへ通した。

「久しぶりですね。大へん勉強に精が出るんですつてね。偶にはこんなもの吹いて見るがいゝでせう」など云つて大臣は笛を渡す。その若やかな音色よ。大臣は夕霧に雲井の雁の琴の音も聞かすまいとこよなく隔てるのを老女達は氣の毒に思つてゐる。大臣も二人の中を似合の縁と思はぬではないが、身内同志の結婚も面白くなし、殊に立後の事についてもあゝした仕打をする源氏の子を掣とする事が躊躇されるのであつた。

二日ほどして又母宮を訪ねて、若い二人の間を知りながらそれを制するやうにしなかつた事について母を責めるのだけれど、母宮も二人の間のこと何れも知らなかつた事とて、却て人の噂を濫に信ずる事は二人を傷ける結果になるだらうとたしなめるので、大臣も不機嫌に、

「何が浮いた噂でせう。女達にまで嘲笑の目で見られてゐると思へばほんとに残念です」と云つて雲井の雁の所へ行つて、

「若いからさいつて、さう道理が分らない人とは思はなかつた。ほんとに情ないことだ」など

云つて、乳母達をも責めて、その内に自分の方へ引取つてしまはうと思ふ。宮には大臣の云ふ事が無理に思はれた。東宮妃にと大臣が思ふやうになつたのも自分の丹精の結果だ、人臣を掣にするなら夕霧以上の者はあるまいなど思つてゐると夕霧が來た。

「あなたの事で大臣が怒つてゐますよ、とんでもない事をして心配させるんだね。」

「どうした事ですか。東の院へ移つてからはそんなに怨まれるやうな事はしませんのに」などいつて恥かしさうな孫を見ると氣の毒で、

「これから氣をつけなさいよ」云つて異の事へ話を移してしまふ。その夜はこそ泊つて、女にあひたいとは思つたが、中隔てが例になく嚴重で開かない。園生の竹に風が渡つて、ほのかに雁の鳴き行くのがきこえると、あちらで、

「空行く雁も私のやうに悲しいのか」戀人のらしい聲のいふのが聞えるのも悲しい。

大臣は強ひて帝に申して女御をお里に迎へた。そしてその相手として雲井の雁をわが方に呼ばうと思ふのであつた。尤も内心には次第に依つては二人の結婚を許してもよいが、それにし

ても男の官位がもつこ進んでから、その心の深さ淺さをもよく見定めてから、なき思ひもするのだが、又絶對に中を割くにしても、こゝではそれが出來まいと思ふので、さてこそ女御のお伽を口實に假るのであつた。宮は雲井の雁を呼んで

「今まで始終一所にゐるあなたが行つてしまつたらみんなに淋しい私だらう。私も年取つて、さうせあなたの行末を見届けることは出來ないのだが、こんなに早くお別れしなければならぬ日が來ようとは、まあ何こいふ悲しい事だらう」といつて泣く。姫君も泣くより外はなかつた。

その夕方、乳母の宰相の計ひで、さきに來てゐた夕霧は戀人にあふ事が出來た。

「伯父様のお怒りがきついたので、もう思ひ切らうとは思ふのだけれぎ、やつぱり戀しい。今まで逢はれる時になぜもつこ逢うておかなかつたのだらう。」

「私だつてそんな氣がしますわ。」

「私を戀しいと思つて下さる？」夕霧がいへば、女はたま點頭く。大臣が來たのだらう、あちらで人の騒ぐ音がする。あゝ、かくて雲井の雁は父と共に車を列ねて新しい家へ出て行つて

しまつた。

新嘗祭當日の五節の舞姫を以て、源氏は惟光の娘を選定して、その前日に二條院へ伴れて來た。夕霧は痛んだ心も慰められようか二條院へ來て、人々の忙しくしてゐるのに紛れて舞姫の部屋へ來てそつと覗いて見た。暗いのはつきりは分らないが、わが戀人によく似てゐるやうなので、ふと寄つて物をいひかけたが、女は不意にきく男の聲に恐れて答へもせぬ中に人が寄つて來たので夕霧は心を残して去つた。

夕霧はあの夕に見た人の傍が忘れられぬ。やがて典侍になさういふ話を聞くにつけ、つとめてはゐられない。その人の弟はよく夕霧の所へも來るので或日手紙を托した。姉弟で綠色の紙に書いたその消息を讀んでゐる所へ不意に惟光が來たので、二人は隠しをほせず、一切を告白した。惟光は源氏が多くの女を愛して、しかも一人も捨てない事から夕霧に一そ娘を許さうかとも思はぬでもなかつた。

夕霧は月日がたつにつれて、さうかしても一度雲井の雁に逢ひたいと思ふ。その頃は夕霧は

同じ東の院にゐる花散里を假の母として、やはり時々祖母宮を訪ねてゐた。年の暮にそくき宮は自分の春着を作つてゐるのだが嬉しくもない。まだ若い自分ながら老人じみになる。

二月に帝は朱雀院に行幸し、故院の御時の花宴なき思はれて、院は源氏をお召しになつた。今日は大學の優良學生十人を召して式部省で行ふ試験の問題に擬した題を賜うた。夕霧の才を試みる爲であつた。種々の御遊があつて還幸の序に太皇太后もお訪ひになつた。源氏も。太后は嘗て源氏達を咄うたわが淺ましさを今に至つて悔いられるのであつた。

夕霧は行幸の日の成績で進士になつた。及第した人は只三人だけだつた。秋の更迭期の折に任官して侍従になつた。かの人を戀ふる心はかはらねき大臣は堅くそれと對面を許さぬ。たゞ折にふれて消息だけ通はしてゐる。

源氏は六條京極邊に新邸を經營してゐる。多くの思ひ人達をそこに住ませようといふのである。さうした中にも來年は父式部卿宮の五十の賀なので紫上は準備を急いでゐる。八月には六

條院が出来た。西南は中宮の舊館跡なので中宮のお里とし、東南は源氏と紫上との常の住る、東北は花散里、西北は明石上の居所に定めた。紫上の方は春の眺を主とし、中宮の庭は秋を基調として造る。花散里の方は夏景色を、明石上の方は冬景色を、それごとく面白く弄ぶべく造りなした。さて彼岸の頃に移った。まづ紫上と花散里とが渡り、中宮は四五日遅れてお里下りになった。九月になつて中宮の御方の紅葉が美しく色づいた。

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ

こんな歌にそへて春の町なる紫上に中宮からお送りになつたのも興ある事である。大井からは人々が落ついてから十月に移つて来た。

五 變

源氏はいろ／＼の女に接するにつけ、ありし昔の夕顔の死が今更ながら惜まれる。そのゆかりでかの右近は今では二條院で古參の女房の一人として、紫上に仕へてゐるが、六條院の今の

有様を見るにつけ、故主の上が偲ばれ、その遺兒瑠璃君の行方をさへ知らずなつた事を思ふのであつた。

瑠璃君はその乳母の夫が太宰少貳になつたので一所に九州へ下つた。それまでも乳顔の行方を心にかけて神佛に祈つて捜してゐるがさうしても知れぬ。云つて遠い田舎君を伴うて行くのを苦痛に思つて、父君に外所ながら知らせたいと思ふのだが、そのつてもなかつた。舟に乗つても、幼い人は母の許へかなき無心に問ふのを聞けば涙がこぼれた。

五年の任期も果て、なほ少貳は上洛を躊躇しつゝ、日を経る中に重い病に罹つた。姫君は十歳ほきになつて大そう美しいのを見るにつけ、自分までが死んでは誰がこの方を養育するだらういつか京へお伴して世にお出し申さうと思つてゐる中にかうして死に行くのが悲しいなき思つて、

「この姫君をさうぞして都へお伴れ申せ。それが私への此上ない供養だ」なき三人の子息達に遺言して死んでしまつた。少貳の子達も父の遺言を思つては早く京へ思へき途中の難を思へ

ば恐しくて。日一日と日を延してゐる中に、瑠璃君はだん／＼美しく品も備はり性質もほん／＼に立派に大きくなつて行つた。我は思ふ田舎人達がその噂を洩れ聞いて縁談を申込む者が多いけれど、乳母達は不具の娘だから尼にするのだと云つて一々の申入を拒絶してゐた。さうした中にも京へ歸る事は忘れるではないが、だん／＼土地に係累なごも出来てその日は近く來さうには見えなかつた。瑠璃君は物心づくにつれて世を憂きものに思つて、たゞ讀經念佛に日を送つてゐる。もう今年二十歳の春を迎へたのである。

こゝに數ある瑠璃君に對する求婚者の中に大夫の監といつて肥後に強大な勢力を扶植してゐた豪族があつた。そんな不具だつて辛抱しようなき云つて迫つてゐたのだが、さう／＼自身でやつて來て少貳の子息を語ふに利を以てして、二人をわが味方にしてしまつた。彼等は今この大夫の監と結ぶこゝの有利なき、若し彼を怒らせたらそれこそ大變だらう、姫君には歴々とした父君がある云つても公然と親子の名乗も出来ないのだから彼に従ふ事がされ程幸福か分らないといふやうな事を云つて母親を説くやうになつた。たゞ長兄豊後介だけは忠實に父の遺言

を實行しようとする肝膽を砕くのであつた。

二人の者の同心によつて監は直ぐにも姫と結婚しようとする急ぐのを乳母は賺してその一時を逃れた。監は已むを得ず四月二十日頃を約して歸つたので、その間にこゝを去らうとするのである。妹達もこの地の係累を捨て、姫のお伴をしようといふ。たゞ姉嬢だけは子供も多いので不本意ながら残る事になつた。年久しく住み馴れた土地ながら、さして心も残らないが、松浦の宮の渚と姉嬢に別れる事だけが後髪を引かれるやうな氣がする。監が追つて來る事を恐れて早船を選んで乗つたので、折からの順風に危いまでに船足は早かつた。難波の川尻に着いて漸く安堵の胸を撫で下す。妻子を捨て、殆んど知らぬ他郷に來た豊後介は殊に無量の感慨に打たれずには居れなかつた。

京へ來て九條に知る人があつたので、一先づ其處へ落着いた。神佛に立願して姫の前途を祝福しようとし八幡に詣で又初瀬に籠つた。初瀬に詣でた時である。瑠璃君は習はぬ徒歩路に足を疲らして四日目の晝頃初瀬の麓橋市へ着いて、ある僧坊に宿つた。するこそこへまた他の參詣

者が相宿を取つた。後の一行の主人はかの右近で姫君の行方を求むべくこの御佛に願を立て、時々参詣するのであつた。ふと隣りの方の様子を窺ふと、折敷を取つて食事を勧める男は見事のあるやうな顔である。又三條と呼ばれて出て来た女の顔にも見覚えがある。さてはあの人達は姫君の行方を知つてゐるかも知れないと思つて三條は云はれた女を呼べば

「筑紫へ下つて二十年も経た下種を御存じの都の方があらうとも思へませぬ。お人違でせう」云ふので、顔をさし出して

「見覚えがありませんか」といふ。

「おや、右近さんでしたね。——まあうれしい。——どこからいらしたの？——おく様は？」とたゞみかけて問ふ。

「乳母さんもお出なの？ 瑠璃君様は？」

「皆いらつしやいます。お身大きくおなりになつて——」云つて彼方へ行く。かくて間の隅なごも取り去つて、話より先づ涙が先に立つのであつた。夕顔の死が右近の口から話された時の

皆の歎きよ。日暮れて御堂に急ぐ。右近の局へ姫君以下の女達を案内する。大和守の妻なきもすばらしい勢を見せて参詣するのを、三條なきはもう膽をつぶしてあゝした身に姫君もおなりになれかしなき祈つて右近にたしなめられるのであつた。三日をこゝに籠つて晝は知れる僧坊の一室に心ゆくまで語りあふのであつた。乳母は早く父内大臣に知らせたいといふけれど、右近は源氏が瑠璃君の事を聞き知つて居て、さうかしてわが子として育てたいと仰しやるので、これはやはりさうした方がよくはなからうかなといふ。右近はいかに容貌が優れてゐても、物ごしが田舎びてゐたらさんなにか玉の瑕なるだらう、それにしてもさうしてかう上品にお育ちになつたであらうと乳母の心盡しをしみじく有難く思ふ。参籠の日限も過ぎたので、お互の住所なき聞き交して立ち別れた。右近の里は六條院の附近にあつた。

歸京した翌日右近は源氏の前へ行つた。

「大へん長い里居だつたね。面白い事でもあつたのか」なき戯言をいふ。

「實は旅をして氣の毒な人に逢つて参りました。」

「誰なさいうてゐる中に人々も来たので、それ切り口を嚙んだ。やがて灯火の影に源氏と並んでゐる紫上を見れば、瑠璃君を劣らじと見たのは僻目であつた。源氏はまた前の話を繰り返して見た人を問ふので、右近は初瀬で瑠璃君に逢うた顛末を語つた。源氏はこゝへ引取らう、内大臣家へ引取られても彼處には子達も多いから却て氣苦勞だらう、外に置いてあつた子を呼び寄せたのだと披露しようなと思ふ。右近も有難い事と思ふにつけ死んだ母夕顔の事が頭に浮んで来る。源氏は消息に添へて衣服や何か、女房達のまで氣をつけて贈る。瑠璃君はこれが實父からのだつたらなと思ふく勧められて返事を書く。源氏は久しい田舎住の事なと考へるこゝ。あの末摘花の苦々しかつた事なも思はれて、もしあゝした風だつたらなと思つてゐるたけと返事を見てその上品な書きぶりに安心した。さて瑠璃をこゝに任せよう、紫上の方はもう空いてゐる對もなし、中宮の方は静でいゝのだけと、侍女と思はれるかもしれぬと思へば不本意なので、花散里の西の對が書庫になつてゐるのを外へ移してこゝへと思ふ。

瑠璃君は九月に右近の家へ来て、そこで萬端の準備を整へて十月に院へ移る。

相知つた女の子で行方が知れなかつたのを捜し出したのだというておいた。花散里はその大やうな心から快くその世話をする事になつた。心を知らぬ女房共はかくて花散里の寵が衰へるのではなからうなと思ふ。

その渡ましの夜源氏は瑠璃君の所へ来た。源氏はすっかり親らしい心持になつて種々の物語をした末、右近に何かの注意をして歸つて来た。田舎者らしくないその様子が何より嬉しく、かうした人の居るのを知つたら、世間の人達がなにかもと騒ぐだらうとそんな事までも考へられるのであつた。源氏は――

戀ひわたる身はそれなれと玉鬘いかなるすぢを尋ね來ぬらん

なま物の端に書きつけた。夕霧にも姉としてその人を紹介しておいた。何も知らずに姉と思へる夕霧のまめくしい様子をわけを知つてゐる女達は氣の毒に思ふ。

源氏は豊後介の志を感じて、わが家人にして使ふ事になつたので彼も面目を施した。

年の暮になつて春着の用意も出来た。源氏は多くの女達への贈物を今紫上の前でその女達に

似合はしいものを選ばうとする。かうした事にまで細心の注意を源氏は拂うて相應はしい贈物にその人々の美をいやが上にもあらはさうといふのである。

初 音

春になつた。雪間の草も若やかに色つき、氣色だつ霞に木の芽も煙り、人の心も自ら長閑な春である。朝の間は人の出入も騒しく、身も暇もなかつたので夕方人々の許へ行つた。紫上を訪ねてから姫君の御殿へ行つて見るに童女達が御前の山の小松を引いてゐる。けに今日は子の日だもの、千年の春をかけて祝はうにこよなき日であるなき源氏も思ふ。明石上からお菓子や何かを盛つた鬚籠なきの贈物があり、五葉の枝に作り物の鶯をこまらせたのに、

年月をまつにひかれて経る人に今日鶯の初音きかせよ
なきいふ歌が結んであつた。源氏はあはれと思つて

「この御返事は自分でお書きなさい。遠慮なさる方ぢやないのですから」云つて硯を引寄せ

て書かす。今までもう五六年も母の手からこの愛らしい子を離しておいたのだと思ふと重い罪を犯してゐるやうにも思はれる。

引別れ年はふれども鶯の巢立ちし松のねを忘れぬや
など書いて、なほ幼い心地に管々しく書きつゞけるのであつた。

それから花散里の夏の御殿へ行つて、瑠璃君を訪ねる。細々した道具など整はないけれど、清らかなあたりの有様にも人柄が偲ばれる。心配してゐた頃の名残か髪の裾がすこし細やかなのもあはれと見られる。

「あちらへも偶にはいらつしやい。近頃琴を習ひ始めた小さい人もゐますよ。何も氣のおける人達ではないのですから」など云ひ置いて、明石上の住む北の町へ行つた、時はもう夕暗も近づいてゐた。

戸を押し開けるよりなまめかしい薫物の香が漂うて、明石上はゐなかつた。見れば硯の邊を取散して小説などが置いてあるのを徒然のまゝに取つて見てゐる。東京錦の縁とつた茵の傍に

琴が置いてあつた火桶に名香が薫してあつた。また手習した紙などもあつたが、筆蹟も美事にくづし書にもせず眞面目な書きざまである。姫君の返事を嬉しと思つたのか、

「珍しや花の塀に木づたひて谷の古巢をとへるうぐひす

など書いてあつたのを、ほゝゑみつゝそこへ何か書かうとする所へ明石上は出て来た。つゝましやかなその物ごしを、源氏は特にめでたしと見るのであつた。

翌日は臨時客で忙しく立ち暮した。若い公子達はいつの年よりも殊に六條院に来るのに氣を張つてゐるのはどうした事か。花の香誘ふ夕風も長閑に、一二輪旋び初めた黄昏に樂の音も面白く花やかに聞える。

東の院に離れ住む女達は源氏に繁々逢ふ機會こそなければ、それを外にして何の不足も感じない。で、或人は佛道に心を入れ、或人は文學に身を入れたりしてその日を送つてゐた。忙しい頃を過して源氏はこゝを訪ねた。

末摘花をまづ見舞うた。此方は何にせよ女王だからそれだけの體面を落さぬやう常から氣を

つけて待遇してゐるのだ。曾ては見事なりし髪ももう衰へてしまつた。すつかりわれに頼りきつてゐる様子を源氏はあはれと思ふ。寒さうな聲で話す女を見兼ねて、

「着物の世話などする女達はゐないのですか。容姿などにかまはず何枚でもお重ねになればいいのに」など云ふ。

「醍醐の兄様の衣の事で私のが出来ませんでしたの。それにすはらも表も兄様が持つて行つたんですもの。」

「表などはいゝですよ。白い衣をうんとお重ねなさい。私が氣附かなかつたら、どんくゝ云うてよこして下さらなくて……」など云つて、倉を明けさせて絹や綾などを贈つた。

そこから空蟬の尾を訪ふ。ちんまりした局に佛を飾つて勤行三昧に世を送つてゐる様も哀れを誘ふ。曾て戀した女をかうした形で見る事の悲しさよ。かくて何かの物語をして、なほ外の女達をも訪ねて、

「心では忘れてゐる時はないけれど、思ふ様にもあなた方を訪ねられないのです。」など云ひお

くのであつた。

今年には男踏歌がある。内裏から朱雀院へ、それから六條院へ来るのであつた。道が遠いのでこゝへ来た時はもう夜明け方だつた。月は曇なく澄んで雪が薄く庭上に降り敷いてゐる。殿上人なども樂に妙な人が多い頃で、殊に六條院では入念に奏すのであつた。明石上以下も此方へ来て見物する。瑠璃君は寢殿の南へ来て、こちらの姫君に對面した。影すさまじき臘月夜に、雪は次第に降り積む。そこに青色の袍に白の下襲、何の飾りもないとはいへ、所から面白い見物である。簾の裾を洩れる女達の袖口の色のはでやかさ。踏歌の人達は例の纏頭の綿を戴いて歸つた。見物の女達もそれ〴〵の方へ歸つて行く。

「さあ音楽をして遊ぼう。内宴を開かう」など云つて、日長けて人々が集つて来たので秘藏の琴など袋から出して塵拂ひ絃を引しめなどする。

胡

蝶

三月も末になつた。外の里には別れを告げつゝある春もこゝのみは立ち去り難てに、花の色鳥の聲もめでたく見え聞えるのは紫上の春の町の此頃である。折から源氏は新造船の進水の宴を催し、雅樂寮の伶人達を召して船の樂を奏す。中宮方の女房達を乗せて龍頭隘首の船は此方の南庭の池に泛んだ。池にかけ出した東の釣殿には紫上附の女達が集つてゐる。柳は緑いや深く、よそには散れる櫻も今を盛に匂ひ廊を繞れる藤、池に影落映す山吹、岩陰に遊ぶ水鳥の群すべて繪筆も及ばぬ美しさ。暮れかゝる頃、樂の音のゆかしさに誘はれて女達は舟を上つた。夜を徹しての遊樂を秋の町にゐる中宮はそゞろゆかしく思ふ。

六條院の榮華を慕ひつゝ、たゞ一つ物足りなく思つてゐた或物を若人達は瑠璃君を見出した。内大臣の息中將などもこの君を得んとする若人の一人であつた。兵部卿宮も年頃連れ添うた夫人に死別して、三年程の獨身生活にこの姫を得たいと眞劍になつて思ふのであつた。

今日は中宮の御殿で佛事を修せられる第一日である。昨日からこゝの宴に列した人達の多くは宿へも歸らず、控室で束帯にかへて晝すぎにそちらへ行つた。源氏以下公卿殿上人一同その

座に列する。紫上からの志とて、烏蝶に装した八人の童女が、烏の方は銀の花瓶に挿した櫻を蝶の方は山吹を金の花瓶に入れて捧げる。童女の船が霞の中をわけつゝ南の山際から御前へ漕ぎ出た頃、さと吹く風に櫻の花びらがひらくとこぼれた風情のなまめかしさ。紫上からの消息を持つて来たのは夕霧であつた。

花園のこてふをさへや下草に秋まつ蟲はうとく見ららん

去年の紅葉の返歌かと中宮は微笑まれ給うた。正月紫上にあうた後、瑠璃君と紫上とは睦じくつき合せてゐた。方々からその人へ縁談もあるが、源氏は軽々しくそれを定むべきでないと思ふ。自分にしてもいつ迄も親らしくなりきれさうにもない、いつそ内大臣に實を明してなどと思ふ事もあつた。夕霧は姉と申うて時々簾の所へ来て話し合ふ事もある。内大臣の子息がいひよるのを瑠璃君はほんとうに心苦しく思ふ。源氏も時々来てはその手紙など見る事もある。兵部卿宮もある。その焦々した心のあらはれてゐるのを源氏は興味深く見て、「少しでも優れた女がいひ交す人といつてはあの宮より外はありますまい。あなたも返事を上

げたらいいでせう」などと云ふ。まじめな右大將のもあつた。さうしたものゝ中には青色の舶來の紙に

思ふとも君は知らじなわきかへり岩洩る水に色し見えねは

など細々と美しく書いた消息もあつた。誰のと問へど、はつきりとも答へない瑠璃君の風を見て、右近をよんで、男から手紙の来た時の心得などを諄々といひ聞かすのであつた。そしてこの姫君に對する戀心がそゞろに動く。右近からあの手紙が柏木——といふのは内大臣の息で今は中將になつてゐる——のと聞いた時は氣の毒な心も動いた。そして内大臣に知らず時機はやはり瑠璃君が人の夫人になつてからと思ふ。掣の候補者として源氏は眞面目な右大將、年上の妻をもて餘してゐる彼が最も適當だらうと考へるのである。

かうした中にも源氏の心は次第に瑠璃君の方へ引きずられてゆく。それは間違つた考だとわが心を叱つてみてもどうする事も出来ない雨上りのしめやかな夕方、楓や柏の若葉の茂つた快い庭の様を見るにも瑠璃君が思はれて、源氏の足はもうその方へ向くのである。初て見た時は

さうもなかつたが、此頃一しほじき母の佛に似て來た若い姫君を見た源氏は、もう何もかも忘れてその手を捉つてしまつた。肉づき豊かなその手の感觸、源氏は忍んで思うてゐる。つぶくみ語り出す。女は餘りの意外さにたゞ慄ふのみであつた。愛されぬにしても、親の傍にゐるのだつたらかうしたいやなめは見ないでもよからうになき姫君は思はれる。

「私はあなたのお母と思つてこんな事をあなたに云つてしまつたのだ。これで私を疎外なさらぬやうに」なき源氏はいうて歸つて行つた。瑠璃君は惱しさにそのまゝうつぶしてしまつた。いろくくの戀人からの手紙はその後もつゞいて來る。

螢

源氏がかう重々しい身になつたので、こゝにゐる女達は何の物思もないのだが、たゞ瑠璃君だけはあの夜の事があつてからは物思ふ事が添うた様に思はれて佗しかつた。それは筑紫で大夫の監に懸想された時とは比べものにならないのだが、人に打明けて相談すべき筋の事でもな

く、心一つに籠めて、とつおいつ考へると、一しほじき母が慕はしく思はれるのである。源氏も一度云ひ出してからは却て忍ぶ事も出來ぬ様に思はれるのだけれど人目を憚つてまた云ひ出しはしなかつたが、戀しさにやはり折々その方へ出かけては行つた。

瑠璃君を戀してゐる多くの人の中に例の兵部卿宮は殊にまめだつた一人で、五月雨の時も近よつて見舞を書いた末に、姫君が少し近よつてお話する機を與へてくれたらわが思ひの片はしは晴れようなど書いて來たのを源氏は見たが、氣分がすぐれぬといつて返事しない姫君の代りに自分で文章を口授して女房に代筆させたりした。瑠璃君もこの宮の熱烈さに動かされる折もあるのであつた。さてこの返事を得た宮は喜んで、あの夕方この御殿へ來た。源氏も蔭で親らしく何かと氣をつけてゐる。宮は妻戸の間にしつらへた櫛にゐて、宰相といふ女房を介して瑠璃君と話すのである。かうした待遇をあまりに隔てた事と、

「直接のお話とはに角、もつと近くへお出になつたらいゝでせう」など源氏もいふので、少しそちらへ膝行り出て、その几帳のかけにゐる。源氏はつとそこへ寄つて、几帳の帷を一枚上

げた時、さき光がさした。薄絹につゝんでおいた蓋を隠し持つてゐたが、急に放つた源氏の仕業であつた。たゞわが娘とのみ聞いてゐる宮が、まことの瑠璃君の美しさを知らさうとのたくみであつた。宮は近くへ出て来た女の氣色に心ときめいてゐる時、さとさした光に覗くと、その拍子に女は扇で顔をさしかくしたが、その艶な光景は深く心にきざまれて、姫君を思ふ心はいや深くなるのであつた。

鳴く聲も聞えぬ蟲の思ひだに人の消つには消ゆるものかは

こんな歌を宮はよんで贈つた。夜深く宮はよそ／＼しく待遇す女を恨みつゝ歸つた。

五日は騎射の儀がある。馬場殿は花散里の御殿の近くにある。源氏はそこへ行くとして、西の對に瑠璃君を訪うて、さて花散里方を過つて、

「今日は中將が友達を伴れて來るとかいうてゐたから、その用意をさせておいて下さい。それに宮様達もいらつしやるかもしれませんから」などいふ。騎射が終つて例によつて宴會となる。若い宮様や殿上人達や大勢集つてその一日を楽しく遊んで、散會した時はもう夜になつてゐた。

かうした遊なきをも他所に聞く事の多かつた花散里は今日の遊樂を嬉しく思った。その夜は源氏はこちらに泊つた。

今年梅雨は例年より雨勝ちで、晴れるひまもない日頃を皆はいそ徒然なあまり、小説なきに讀み耽るのであつた。明石上はかうした方の創作の才なきもあつて、姫君の方へ自作を贈つたりしてゐる。瑠璃君は小説なき讀むにつけ、わが運命の數奇が轉た欺ぜられるのである。

「さうした小説の中にも私のやうにまじめな戀をする人はないでせうね。と同時にあなた見たいに情ない人も……」こんな事を源氏は小説を讀んでゐる瑠璃君にいひかける。やはりあの事が忘れ兼ねるのであつた。

夕霧は紫上の方へ出入する事は認められてゐるが、小さい姫君の方へは許されてゐたので、時々行つてはお雛様遊びの相手なきするのだが、昔あの雲井の雁さうした遊びをした事もあつたのだなき思はれて、戀しさがこみ上げて來る。

内大臣は源氏がさ、こから昔別れた娘を伴れて来た事を聞くにつけ、若かつた頃にあつた事から女に別れた事が思はれ、あの女に出来た子が居たらと思ふ時が多かつた。子息達は皆よく出来たけれど、長女は立後の事に漏れ、而も東宮に思つてゐた次女はあんな経緯になつたので、なほ行方のわからぬ娘を思ふのである。もし私の娘だ名のある者がありはしないか氣をつけて呉れ」なき仔細を打明けて子息達にもいふのであつた。夢にもその子を見て、夢占に問へば、年頃心にかけてゐる子が人の子になつてゐる事を聞くのではないかなと占ふ。女の子が人の養子になつてゐるなき考へられぬ、さうした事だらうなき、近頃はその子の事ばかり考へてゐるのである。

常 夏

暑い夏の日、源氏は夕霧一所に釣殿に出て涼を納れてゐる。若い殿上人なきも大勢居て、西川から献上の鮎や、近い加茂川の鯉なきを調理させてゐた。そこへ内大臣の子息達が夕霧を

尋ねて来たので、源氏も

「淋しくて眠くなつた時だつた。よく来たね」など云つて、酒をすゝめ、氷や水飯などを食べるのであつた。風は吹くけれど、眞夏の西日が烈しくさすと、蟬の聲も汗を誘うて鳴き頻る。「水の上に居ても堪へられない暑さだね。失敬しますよ」と云つて源氏は横になつて、皆にももつと寛いで話すやうにすゝめて、

「お父様は外で生れた娘さんを邸へ引取られたさうだね。本當ですか」など、辨少將——内大臣の二方に問ふ。

「え々今年の春頃、夢を見られて、さうした話をされたのを傳へ聞いた一人の女が、さうだと名乗つて出たのがあるんですが、委しい事は存じませぬ」と云ふ。噂だけでないのだと源氏は思つて、

「お前はその人を貰つたらどうだね。獨身なんて外聞悪い名を残すより、前の戀人の姉妹で辛抱しておくさ」など云ふ。仲達はしてゐないのだが、夕霧から戀を奪うた事を面白からず思ふ

ので、かういふ皮肉もいふのであつた。今實を打明けて瑠璃君を内大臣に逢はせたら喜んで彼が狂喜するだらうなごも思ふ。

源氏はそれから瑠璃君の所へ行つた。夕霧もその後兄弟達も隨いて行つた。前裁なきも事々しからず、唐・倭の撫子の美しく咲き亂れた夕榮は艶に美しい。そこを彷徨ふ若人達を御簾の中から見ても源氏はこり／＼に優れた人達だと思ふ。中にもわが子ながら夕霧が立ち優つて見える。きら／＼しい中にもごこか侵し難い所を持つてゐる。「あゝした夕霧をさうして内大臣が厭ふのだらう」なきふこいはれる。こんな事を聞くにつけ、源氏と内大臣との間に流れてゐる暗流が瑠璃君の心に陰翳を投じるのである。

日も暮れた。月もない頃なので庭に篝火を焚かせて源氏は琴に興じる。そして内大臣に勝る琴の上手はないなき源氏の云ふのを聞けば、瑠璃君はいつになつたら打ち解けて父の妙なる琴の調を聞く事が出来るだらうなきいふ。

「若い人達は飽くまで撫子を賞せずには歸つてしまつたね。内大臣にもこの花園を見せたい。あ

なたの母様が大臣にこの花を手紙に入れて哀れな歌を贈つたとか大臣も云つて居た」など源氏はいふ。源氏はます／＼この人に對する戀心の深くなるのを感じては、いつそ兵部卿宮か右大將かに許してしまはうかとも思ふのだけれど、さうした後の淋しさを思ふと堪へられないのであつた。琴を教へるに托言^{かき}けて姫君に近く寄る機もあるのだけれど、瑠璃君も今は馴れて嘗ての様に思ひ疎む事はなかつた。

内大臣は新しく求め得た娘を、邸の人達まで侮蔑の眼で見えてゐる事を知つた矢さき、辨少將が源氏に問はれた事なき話したので、

「さうだらう。源氏君も今まで聞きもしなかつた人の子を呼寄せたさうだね。なか／＼人の惡口なき云はないあの人が、私の事いふに難をつけるね」なき笑ひながら云ふ。それにしても内大臣は近江君——これが新しい娘である——の始末はさうしようかと思ふ。弘徽殿女御にいうて手許で使つて貰はうかと思つて女御が丁度里に居られた時だったので相談して見るさ、快く承知されたので、近江君の曹司^へへ行くさ、丁度五節君いふ若い女房を相手に双六をしてゐる

た所であつた。顔も愛嬌があり、髪も立派だけれき、たゞ額の狭いのが見苦しく且つ聲が至つて下品なのが何といつても大きな缺點であつた。

「忙くて餘り訪ねられなくて」

「かうして此方に居さへしますれば何の苦勞もありません。戀しかつたお父様のお顔を始終見てゐられないのがいけないんですけれき。」

「私の身の廻りの世話をして呉れる人もないのだから、あなたにさうして貰はうと思つてゐたのだが、さうも出来ないのですね。」こんなことを云つて、さて女御の所へ時々行つて、あちらの行儀作法なきを見馴れるやうになご云へば、

「まあ嬉しいこゝ。女御様が私を妹と思つてさへ下すつたら、水でも何でも汲みますよ」なき、はいやぎ立つて喋舌るのを、大臣は情なく思つた。大臣は今晚にでも行きなければ行くが、さ云つて歸つてゆく。四位・五位なきが大勢供をしてゐるのを見送つた近江君は

「まあ立派な親だね。かうした人の子が、あんな怪しげな小屋に住んでゐたんだよ」なき云

そして女御の所へ行くのはやはり早くしよう、それにしてもまづ手紙をやつてからなき思つて怪しげな手紙を長々書きいて、

草わかみ常陸の海のいかゞさきいかで相見んだごの浦浪

さいふ珍妙な歌を書き添へた。書き方なきもそれに相應して行なきも斜かひになつてゐる。これを見た女御も可笑しくて返事もようお書きにならんで、中納言さいふ女房が代りに書く。近江君は参殿の用意に化粧し、薫物をたきしめたりしてゐる。

篝 火

近頃事に觸れては内大臣家の近江君の噂の立つのを源氏は聞いて、何にしても深窓に居ても知り得ぬ筈の人の噂がかう世間に擴がるのは不思議な事だ、内部から立てる噂だらうが、可哀さうになご氣の毒がつてゐる。瑠璃君はかうした噂を耳にするにつけても假の親なる源氏の心を有難い事と思つて、だんく親しみを感じて來るのであつた。

秋になつた。うら淋しい近頃は殊に人戀しく、源氏は屢々瑠璃君の方へ來ては琴なご教へて日を暮して居た。今日も今日まで琴のお稽古も濟して、寛いだ氣分になつてつひ轉寢をしてしまつた。ふみ目ざめるこ五日頃の月は疾くに山に入つて、空には雲が出た様子、風渡る萩の葉すれも悲しげな夜である。あまり更け過ぎては人の思わくも憚られて、歸らうごすれば庭の籬も消えさうになつて居るので人召して新しく點火させた。泉水の邊に枝を擴けてゐる栴檀の下に新しい籬は燃える。その影に照されて、女のつゝましげな様子が歸らうごする源氏の足をこめるのであつた。

篝火に立ち添ふ戀の烟こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

なごいふのを聞いて瑠璃君は怪しからぬ御心よご思ふにつけ、人もや怪しむご

行方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ烟ごならば

なご困惑する様に源氏はそこを立ち出ようごするご、東御殿の夕霧の曹司の方から箏に合せた篳の音が流れて来る。

「頭中將だわ。あの篳の音の鮮かさ」なご云つて手紙を持たしてやつたので皆は此方へ來た。夕霧ご従弟の柏木・辨少將の三人である。こゝで源氏ご四人で樂を弄ぶ。瑠璃君は柏木の頭中將選の事は殊に勝れた人達だごは思ふものゝ戀心は動かないごいふのは、やはり肉親だからだごう。

野 分

六條院なる中宮の御殿の秋草は例年よりも美事に花をつけ、その間には常磐木や紅葉する木なごで垣を結んで、庭の趣に變化を見せてゐる。春の庭も忘れ果てるまでに心あくがれるやうである。昔から春秋の争に秋に心寄せる人は多いが、今まで春の方の人だつた人もまた今更に秋に加擔する者も多かつた。中宮は幸の里居に管絃の遊なごも催したいごお思になるのだつたが、八月は故父宮の忌月なので花の色の衰へを思ひ侘びつゝ、朝夕に色深き庭の面を見つゝ、日をお暮らしになる中、暴風が例年より烈しく吹いて折角の庭の草花の見るく萎れゆくの中宮

はほんごに氣も狂ふまでにお惜しみになるのだけれき、風は暮れ行くまゝ、いや荒れに荒れま
さる。お前の格子を下してもなほ御心は花の上に馳せるのであつた。

南の紫上の方でも庭の手入をした矢先にこの嵐をうけて、萩の枝なきも散々に吹き折られて
飛ぶのを紫上は縁近く出て見てゐる。源氏は姫君の所へ行つて留守の時に夕霧が来るこ、そ
の妻戸が明いてゐたので立止つて中を見るこ、若い女達が大勢居た。屏風も風で吹き倒される
爲か覺んであつて、奥までずつこ見透しである。端の間にゐた女は他の女達と紛れる事もない
美しい人だつた。譬へば春霞の間に匂ひ出る櫻を見る心地がする。一目見るより懐さに打たれ
る。父が自分達に逢はせないのもその筈だと思ふ。その人は庭上の花の吹き亂されるのを見て
内へ入らうこもしない。源氏が歸つて來たらしい、その人の聲が

「ひさい風だね。格子を下しなさい。男達がその邊にゐるかもしれない」なき云ふ。夕霧はま
た物の隙から内を覗く。やがてその人達は奥へ行つたらしい。夕霧は今來たやうに音なふ、あ
ゝした美しい人を見る機を得しめた風の不可思議な力に感謝しつゝ、そこへ家來達が來て、

「ひさく吹く風でござります。東北から吹いて來ますので、こちらはさほごでもありませんが
馬場殿の方は大へんでござります」なき云ふ。源氏は夕霧の來たのを見て、

「あなたは何處へ行つてゐたのか」こ問ふ。

「三條の祖母様の所にゐましたが、風がひさく吹きさうだこ申しますので、氣にかゝつたので
參りました。しかしあちらでも祖母様が子供のやうに恐ろしがつていらつしやるこ思ふこ、そ
ちらも心配になりますから、これから又三條へ行かうこ思つてゐます」こ云ふ。

「早く行つて上げなさい。」なき云うてお見舞の手紙を書く。夕霧は氣立の優しい人で、三條こ
六條こを迭交に訪ねぬ日こではないのだ。三條の祖母宮は嵐の中に訪ねて來たのを嬉しく頼し
こ思ふ。恐しさに生れてはじめての嵐だなき慄へく云うてゐた。今はたゞこの孫一人を力こ
してゐるのであつた。夕霧は寢についてもありし戀人の佛の代りに今は紫上の姿が幻に見える。
夜中大きな木の吹き折られる音なき聞きつゝ、物狂ほしい心に曉を待つ。

夜明け近くなつて風が少しないで雨が降り出した。六條院では離れた家なきが倒潰したなき

いふ噂である。東の町の義母——花散里なきはさうしてゐるだらうなき思つて、夕霧は横さまに降りつける雨を犯して六條院へ行つた。嵐の烈しさにうち慄ふ義母を慰めておいて、さて父のゐる南の町へ行く。亂れ伏せる叢、吹き飛ばされた檜皮や瓦なき、物凄しい野分の朝の庭の面を見渡してゐる。

源氏もやがて起きて来て、中宮の御殿の心もなきに夕霧を使ひしてお見舞ひ申さす。夕霧は庭からその方へ行つて見るに、明方の庭を見渡しつゝ、簾を捲き上げた部屋に女房達が勢集つてゐる。そのおのがしゝの装、皆みり／＼に立派だと思はれる。さ、童女が庭に下りて蟲籠に露をやつてゐる。人々は夕霧の忍びやかに音なふ聲に、さ、でもあわてた風もなしに奥へ入つてしまふ。夕霧は源氏からの消息を奉り、なほ知合の間の宰相・内侍なきいふ女達も密かに物語なきした。氣品あるさ、の御殿を見るにつけ、若い心には惱ましい氣分も醸されるのであつた。

源氏は夕霧から中宮の御返事を聞くにつけ、自らも一應お見舞に出ようと思つて、着更へを

しに奥へ入つた。

「昨日の風の騒ぎに中將はあなたを見やしなかつたか知ら。戸が明いてゐたからね」なき、支度を了へて出た時、なほ放心した者のやうに紫上の居る奥の間の方ばかり見入つてゐる夕霧を見た源氏はまた奥へ引返して紫上に云ふ。

「そんな事はありますまい。お廊下の方には人音もしませんかつたもの」なき答へるもの、紫上の面はさ、さ赤みがさした。でもをかしいなき思ひつゝ、源氏は出て行つた。夕霧もその件をする。

明石上を訪ねるに、箏を弾いてゐた。瑠璃君の所へ来た時は、恐しさに眠れず、曉方からさ、ろ／＼した名残に今起きて化粧をしてゐる所だつた。殊更に驚かすも心なきわざさ、前觸の聲も靜かに、そつ／＼簾の中へ入つて行つた。こまやかに話す二人の様を夕霧は聞いて、さうぞしてこの人を見たいと思ふ。ふさ、さこの几帳なき風に吹かれてく、しや／＼してゐるのを、そつ／＼手でおし開けて見るに、何だか戀人同志のやうな二人の様に何だか淺ましいやうな心も動く。

そこから花散里を見舞ふに、その人は物なれた女達を相手に裁縫なごしてゐた。

夕霧は先刻からあちこち源氏の伴をして廻つてゐたので、今朝は早く書かうと思つてゐた雲井の雁への見舞が後れてしまつたなご思ひながら小さい姫君の御殿へ行つて見た。姫君は昨夜の風に怖ぢて、まだ起きてゐなかつた。夕霧はこゝで紙筆を借りて、氣にかゝつてゐた戀人への手紙を書く。紙は紫の薄葉である。墨色なごも氣をつけて細やかに書く。

風さわぎむら雲迷ふ夕べにも忘るゝまなく忘れぬ君

咲き亂れた苜蓿に結びつけて下人に托した。かうした所へ姫君が起きて來た。前に見た人達を櫻・山吹といふなら、この姫君はさし當り藤であらう。かうした人達も自分とは他人でないのに隔てをつけておく父の心を夕霧はつらいと思ふのであつた。

また三條の祖母宮の所へ行く。内大臣も來た。雲井の雁にあひたいなご祖母宮が云へば、内大臣は

「その内にこちらへ伺はせませう。自分の心からした事の爲めに心配して近頃は半分弱つてゐる

ます。しなご云うてゐた。

行 幸

その年の十二月に帝は大原野へ行幸し給ふので、六條院からも人々がその鹵簿を拜觀に出掛けた。今日の供奉には左右大臣内大臣以下威儀を正して仕る。雪ちら／＼と色々の袍に降りかかるのも艶かしい。親王以下も狩に關係される人は勿論その方の装束である。瑠璃君も拜觀してゐる。われこそを装束き立つた人達も、赤の御衣を召して端然と鳳輦の中に坐した帝に比べては物の數ではないと思つた。實父内大臣を特に氣をつけて見れば、けに立派に男盛りの人だ。さは見だが帝はやはり品位が違つてゐた。兵部卿宮も居られた。右大將も居た。胡籬を負つた武官姿も見事である。たゞ色黒く髭の多いのがむさくるしけであつた。こゝで源氏から常に勧められる宮仕の事を考へる。後宮に入るのは晴れがましい、女官として大方に宮仕して、あつた陛下のお側近く御奉公するのも面白い事だらうなご、思ふ。かくて行幸の列は野につい

て御休息の所へ、事によつて供奉を辭した源氏から酒や菓子なきを献上して來た。帝からは雉子一枝を下賜された。

「昨日は陛下を拜しましたか。あの事はまだ御決心がつきませぬか」なごその翌日源氏は瑠璃君に手紙でいうてよこした。

うちきらし朝ぐもりせし行幸にはさやかに空の光やは見し
なご返事には書いてあつた。

一人前の女として立つに、男の元服に相當する式を裳着といふのだが、源氏は瑠璃君のその式を擧げなければと思つて何かご用意してゐるのだが、この序に内大臣にも打明けのつもりにしてゐる。年がかへつて二月にその式を行はうと思つて、内大臣にその裳を着けさせ役を頼んだのだが、丁度母宮が去年の暮から病牀にあるので大臣はそれを拒絶した。三條の宮に萬一の事があつたら何かにつけて不都合だと思つて、見舞がてら行つた。宮も喜んで脇息に凭つて話なきされる。自分が養つてゐる瑠璃君が實は内大臣の子だといふ事、それを今度宮仕に出さう

と思ふ事、大臣に打明けようと思ふ事なきを話して、こちらへ大臣に來るやう宮から手紙をやつていたゞいた。大臣は母宮のお招きですぐ來た。随分久しぶりの二人の對面である。逢うて見ればやはり昔の親しさがお互の心に甦つて來る。献酬の中に日暮に迫つて來た。折を見て源氏は瑠璃君の事を詳しく大臣に打明けた。若かつた日の品定の夜の話なきも思ひ出されて大臣は笑ひつ泣きつ、さしもに心強い源氏も打萎れた。夜更けて別れて歸る。大臣は嬉しくみんなに成人してゐるだらうなき思ふが、ご云つて親らしく引取る事も出來まいと思ふ。或は源氏が既にわが物として、而も他の妻達の氣を兼ねて今更打明けたのぢやないかと思へば口惜しくもあるが、又源氏を擧げるのも悪い心地はしない。たゞ宮仕といふ事は直接弘徽殿なきにもさし響く事だから困るごは思ふのだが、もう源氏の方でさう決めたものなら仕方がない事であつた。

二月十六日が彼岸の入で、日柄もよいご云ふので、その日に裳着の式を擧行する事ごした。式をやる前に源氏は瑠璃君に内大臣にうちあげた次第、今日の腰結は内大臣に頼んだ事、その

時の心得なきを細々云うて聞かせ、夕霧にも事實を打明けた。あの野分の朝の謎が釋然なつたやうに夕霧は思つた。三條の祖母宮からも色々なお祝の品が來た。中宮からは裳・唐衣その他結構な贈物がある。その外いろ／＼の贈物の中に例の末摘花はかうした時にだまつて過ぎぬ律義な心から、こはいへ古い顔から工夫した古風な装束に

わが身こそ恨みられければ衣君が袂になれず思へば

さいふ歌を添へて來た。返事は自分が書かう云つて源氏は筆を取つた。

から衣また唐ごろも唐衣かへす／＼も唐ごろもなる

瑠璃君は美しく笑うて

「何だか私というた様でいけませんわ」なき云つて心苦しげにしてゐた。

その當日内大臣は定刻以前にもう六條院へ來た。式は夜の十時頃に始まる。大臣は裳の紐を結ぶ時、もう堪へられぬ様な氣分になつた。祝宴は三條宮の病氣の故に殊更にはない。柏木と辨少將とは父から打明けられて、立ち入つて戀をしなかつた事を喜んだ。

裳着が済む兵部卿宮は急に縁談の進行を望むけれど、源氏は宮仕の事を言ひたてにしてそれを拒絶つてゐる。内大臣もあの夜以後再び相見たいと思ふ心は深くなりまさる。例の夢占も事實であつた。今にして思ひ合せられる。近江君は瑠璃君の事を聞き出して、——實はこの事は公にしたくないと思ふのだけれど、いつこはなしに漏れてしまつたのだ。

「お父様にはまた一人お子様が見つかつたのですつてね。ほんこにおめでたい事ね。でも聞けば私見たいにお母様がいけないですつて」なき、女御の御前に柏木以下の兄弟達が居る時にいふのであつた。柏木中將がさうしたはしたない言ひ方を責めるこ、

「だつて皆私知つてゐるわ。その人は尙侍になるんだつて」なきもいふ。やがて兄達が歸つて行つた後で、下藤の女達でさへ厭ふやうな雑役をも甲斐／＼しく一生懸命に立働いて

「私を尙侍に推舉して下さい」云ふので、女御も持て餘して居られる。こんな事を内大臣が聞いて、女御の御殿へ來た序に近江君を呼んで、尙侍になりたいのなら何故自分に告げないのかと嘲弄つて見るこ、眞に受けてゐるのも笑止である。

「お前がその積りなら私から奏上して見よう。對手が太政大臣の姫君だつて、私がたつて、奏上したら帝だつてお聞き入れ下さるだらうよ。すぐ上奏文を立派に書いてお出しなご云へば、」
「歌ならまづくつても詠めますが、上奏文はごうも。お父様からよろしく奏し上げて下さいませ」なご手を合せていふ。几帳の陰で聞いてゐる女達は可笑しさを死にさうな心地で怵へてゐるのだが、ごうしても堪へきれず、外へすべり出て笑ふ者もあつた。女御は顔赤めて苦々しげな風である。内大臣は近江君を退屈凌ぎに嘲弄してゐるのだが、世間では自分でも恥しいのでわが子を他ミ一所に笑はうごするのだなごいうてゐる。

藤 袴

瑠璃君の尙侍に上る事について、源氏も内大臣もそのつもりであるけれど、當人はさうしてゐる若しもの事があつた場合、中宮や女御から憎しみを受け、而も陛下の寵幸はそれらの人達に及ばない、ご云ふ様な事があつたらなご思へば心は進まなかつた。それに源氏との關係、實

父との關係なごあれこれ思ひ亂れて夕暮れゆく庭の面を見出してゐるごころへ夕霧が來た。今は參議を兼ねて宰相中將ご呼ばれてゐる。祖母なる宮の喪に當つて二人も鈍色の喪服に纏れてゐる姿がまた一段ご艶めかしい。

二人は簾ご几帳ごだけ隔て、逢うた。夕霧は父からの用事で、内裏から尙侍に採用する旨の仰があつた事を傳へに來たのであつた。瑠璃君の應答を聞いてゐるご、あの野分の朝にちらご見たこの人の佛も偲ばれて、今まで姉弟ご思つてゐるにひきかへて、その眞の種姓を知つた今はなご戀しく、このまゝ宮仕に出すのが惜まれるのである。同じごならたご二人で話したいご思つて、夕霧は父からの内密の傳言ご偽つて女達を遠ざけて、源氏のいひさうな口上をいゝかけんな事を述べて、それが濟んでからも何かご話の緒口を捜すのであつた。話の序に瑠璃君はこの十三日に忌明の禊を河原でしようご思ふなご告げた。

「ではその日私もお伴しませう。」

「それでは目立ちますわ。私はあまり人に知れないやうにご思つてゐますの。」

「そんなに内密に／＼なさるのはさうしたお心でせう。忘れられないお祖母様のお記念と思へば喪服をぬぐのも、私には辛い様に感じられるのです。」

「それは私だつて何もお祖母様の思ひ出はないにしても、かうして喪服を着てゐますご何だか自然に悲しい気分にはなりますの。」こんな事を云つて、常より萎れてゐる瑠璃君の氣色をいゝ懐しい夕霧は思ふ。かうした時に思つて持つてゐた藤袴の花を簾の中へ入れて、それを取らうとする女の袖を熱心に引動かしつゝ、

同じ野の露にやつる、藤ばかりかま哀れいかけよかごさばかりも

なき云つて、苦しい戀を打ち明けた。女は何も答へてよいか困つて、氣分が悪くなつたに托言けて奥へ入つてしまつたので、仕方なしに重い心を抱いて歸つて行く。それにつけてもこんなに物越しにでもいゝ紫上と話す事は出来ないものかなと思ひ煩ひながら南の町へ来て父に瑠璃君からの返事を取りつぐ。そして尙侍なきにするより兵部卿宮の奥方にでもした方がその人のために却てよくはないかと思ふなき、夕霧はつけ加へた。源氏もそれはさうだが、また尙侍に

もあの人はよほさ適してゐる様に思ふ云ふ。

「お父様があの方を引取つてお養ひになつたのを世間では變にまつてゐますね。内大臣なんかもさうですつて。今度の宮仕なんかお父様の下心があつてだなき人は噂してゐますよ。」

「それはこんでもない誤解だ。宮仕でも何でも内大臣の不承知な事なきはしないよ。」かう云つて源氏は笑つてはるたが、さうも夕霧は果してそれが父の本心かさうか分らなかつた。

その宮仕はいよく十月に決つた。帝もその間を待遠く思はれ、ば、兵部卿宮その他の懸想人達はその前に懸命に氣をもんでゐるのだけれきその甲斐はない。夕霧はあんな事を云はなければよかつたなき思ひつゝ、忠實に用事を勤めてゐる。ある月明の夜柏木中將が父内大臣の使で来た。宰相いふ女房を取次にして話すのを柏木は餘りに隔てた仕打だと思ふ。内大臣からの傳言は宮仕をするについての支度なきは如何な風になつてゐるか一向知らないけれき、もし何か必要な物があつたら内々さう云つて欲しい、父が直接來たいのだが遠慮されるのでえ來ない云ふのであつた。やがて月を浴びて歸つて行く柏木の後姿のめでたさ。

瑠璃君を戀してゐる右大將は今の春宮の御生母の兄で當代の権力家で三十二三の男盛りである。奥方は紫上の姉で、大將には三つか四つ年上だが、なぜか婆さま云つて、離縁したいと思つてゐた。九月頃の霜の朝、いろ／＼な人達から托つた懸想文を女達が瑠璃君に持つて來た。瑠璃君はそれらは見ず、女達が讀むのを聞くばかりだつた。大將の手紙には今月は結婚には忌むさいふ九月だけれぎ、來月になれば宮仕に出で立つ人には、さうした事なきいうてゐられないなき書いてあつた。兵部卿宮は

朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たすもあらなん

なき書いて、せめてこの戀心を察してくれさへしたら心慰む方もあらうなきいふ様な事を書いて來た。紫上の兄なる式部卿宮の子左兵衛督も亦その一人だつたが、恨みのたけを書きつゞけて、忘れてしまはうと思つてもさうしても忘れられない、さうしたらいゝだらうなき書いて來た。紙の色、墨つきなききり／＼に氣がきいてゐるのを、宮仕したらかうした人達は皆失望してしまふのだと思ふ。返事はたゞ兵部卿宮へだけあつた。

眞木柱

瑠璃君は遂に右大將に逢つた。戀を得た大將の喜びよ。たゞそれでも打ち解けぬ女の心を情無しと思へぎ、かうした美しい人を他人の物にして見ないで濟んだ我が果報を思ふにつけ、媒してくれた女房の辨に對して感謝の念を禁じ得ない。内大臣もこの結婚には元來反對しては居なかつたのだし、旁、源氏は残念ではあるが、自分一人許さぬ云ふのも姫君の爲めに不憫に思はれたので、三日の夜の儀式なきも重々しくり行つた。大將はすぐ自邸に迎へ取りたいと思ふのであつたけれど、源氏はそこにはまだ夫人がゐる事に托言してそれを後らしてゐた。内大臣はこの結婚を衷心喜んでゐる。瑠璃君は結婚後もなほ尙侍は辭さないでゐる。十一月は神事の多い月であつたので、内侍たちが尙侍の許へ出入する事が多かつた。さうした時でも大將がいつも來て居るのを尙侍は厭に思つてゐる。兵部卿宮は最も失望した一人である。左兵衛督に至つては自分が失戀の痛手を負つた上に妹の家庭の破壊された事なき重ね／＼の歎きながら